Creatures.E

駿駕

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

青山という学者によって引き起こされた事件について、オカルトマニアな部分を持った主人公、柊　海都が、その事件の起こった場所に幽霊が現れるという噂を聞き、そこへ足を運ぶ。

だが、そこで待っていたのは幽霊ではなく、ある能力だった。

この物語はそんな主人公が異能力、超能力の世界に入っていく物語です。

目次

新たな物語の始まり 1
妖狐、憑く 8
彼を探しに・・・ 15
敵わないもの 20
命名する！ 26
自由行動 31
剣を奪うもの 37
雷帝 42
乗り越えていく 47
訓練そして実戦 53
蛍ノ島へ 59
作戦と忍び寄る影 64
雪のなかの炎 69
氷の能力者 75
氷の涙 80
Ｌｏｓｔ 85
メビウスプログラム 91
ルナの記憶 97
殿堂杯への参加 103
情報 109
エリート二人組 115
殿堂杯前日 121
殿堂杯開始！ 127
雷帝よ、永遠に 133

キラの能力 138
千と万 144
エースと雷 150
決着 156
殿堂杯が終わって 161
ロカ・セルナード 167
インタビュー 174
勅使河原が来た 181
天使襲撃 187
オルガの意思 193
ザザエルの契約 199
月夜 205
柊とタマ 211
コミュニケーションと連携攻撃 217
剣を手にした日 222
ルナとロカ 228
シュウ、立つ 233
潜入開始 239
チームZの掟 245
アリスの目的 250
復活 256
決着と目標 261
卒業 268

新たな物語の始まり

三年前、ある夏祭りの日。
日本のある町にあらゆる国から少年少女が集められた。彼らに該当するものそれは、常人ではありえない能力だった。
身体能力ではなく、超能力に近いものだ。
最初、俺が聞いたときは、嘘とか、非現実的とか、そんなことを考えた。
俺だけじゃない。他の人間もそうだろう。
ニュースに取り上げられたのは、たくさんの少年少女が集められ、たくさんの死者が出たという表面のみだ。
裏面はそこで集められた少年少女が能力者だったということだ。
その事件の犯人である青山という学者の言葉によって、裏面は作られた。
「私は集めた少年少女を生物兵器『Ｅ―ｖｉｌ』として、人間の進化への貢献がしたかった。彼らの能力はこのままだと、厄災を運んでくる」
そして死刑判決を聞いた後の言葉、
「この世界にはまだ、たくさんの生物兵器が存在する。どこかに隔離しなければならない」
その言葉の後、
青山は刑務所から消えた。
★
「遅いよ、柊君！」
俺はそんなことを考えながら、隣町の夏祭りに彼女と来ていた。
待ち合わせの時間に十分近く遅刻したが、どこか心に余裕を持っていた。
彼女の名前は赤井　ルナ。高校一年生になってすぐに俺から告白した。一目惚れといってもいいだろう。
伸ばした黒髪に自分よりも少し小さい身長。そして何よりも左目の下にある涙黒子が特徴的だ。

「すまん。ちょっと見たいものがあって」
「見たいもの？」
俺はデートの裏で、これまで話してきた事件について探し物があった。
三年前のその日、少年少女が集められた場所の一つがこの町に存在する。
「あぁ。この町の『K市昆虫美術館』というのが見たくてね」
「昆虫？虫か・・・」
「いや、虫に興味はない」
「じゃあ、何でそこに？」
「その建物が目当てかな。ほら、将来建築の仕事に携わるのが夢だしさ」
建物と言っても、外装に興味はない。内部に興味がある。
そこは今、俺と同じ目的で来る人間が多いらしく、ある人によると、地下空間に通じる扉があるとかないとか。
「でも、今日はそこに行くのはやめよう？ほら、私、今日のために浴衣で来たしさ」
「・・・だね。それにしても、浴衣似合ってるよ」
「あ、ありがとう・・・（似合ってるよって言われた、うれしいな）」
「ん？何か言った？」
「な、何も言ってないよ。じゃあ行こう！」
俺はルナに連れられ、人混みの中へ入っていった。
★
その夜、俺はルナと駅まで行くと、ルナが電車に乗ったのを見た瞬間、急いで美術館へ自転車を走らせた。
辺りは暗く、懐中電灯なしでは見えないほどだった。
「着いたぞ・・・」
嫌な雰囲気が溢れるその空間は、足を運んでくる人間に帰れと言っているようだった。
俺は懐中電灯をリュックから取り出すと、割れた美術館の出入り口の扉から中を照らした。

「誰もいないよな・・・」
本来これが狙いと言ってもいいだろう。
言わば一人肝試しだ。
ルナがいれば、確かに可愛い一面が見れそうだが、こういうのは一人で行くことに意味がある。
俺は出入り口から中へ入ると、周りを懐中電灯で照らす。壁にはカブトムシやクワガタの絵が、たくさん貼られていた。もう色褪せているが、それが何の虫かはなんとなくだがわかる。
少し歩くと、『立ち入り禁止』と書かれた看板が何個も並ぶ廊下に出た。
その先には地下へと続く階段がある。
勇気のないものはここで引き返してくるが、俺は違う。それにルナからもらったお守りもある。
「・・・行くしかないな」
俺は看板と看板の間を進むと、地下への階段の一段目に足を置いた。
それだけでも鳥肌が立っている。
「嫌な空気が漂ってる・・・」
ホラーやオカルトなど、非現実的な恐怖というものに敏感で、休日になるとそういった場所を巡っているが、ここまで恐怖に包まれたのは初めてだ。
心拍数が上がっているのが自分でもわかる。
「やっと地下か・・・ここは」
俺は思わず、声が大きくなってしまう。
なぜなら、地下空間へと続くと言われる通路には全くもって損害がないからだ。
さっきまで窓ガラスが割れていたり、壁に落書きがされていたりと廃れた部分が多かったが、この階段から先の通路は、まるで三年前の空間をそのまま、現代に残しているような感じだった。
展示ケースのガラスは割れていない。床から少し上がった高さの壁に嵌め込まれた避難のための誘導灯も電気がついている。

俺は恐る恐る、展示ケースの中にある芸術作品を見て回る。特にこれといって目立った物はなく、恐怖心を植え付けるような物もなかった。
むしろ、その空間に似合わない、綺麗で芸術的な物ばかりだった。
「・・・何やってんだ、俺は。ここに来た理由は芸術作品を見に来たんじゃない。この建物で起こった事件のことを探しに来たんだ」
俺がそんなことを言って、自分の頬を叩いた瞬間、奥の扉がギィーッと音を発てながら開いた。
俺に反応したとか思いたくないが・・・
だが、それは招かれているかのようにも感じた。
「関係者以外立ち入り禁止・・・か。何かあるかもしれないな」
扉に書かれたその言葉がとても重々しく、そこだけが時間の過ぎたような感じだった。
俺は気がつくと、扉の前に立っており、片足がその先へ入っていた。
ここで逃げ帰る意味がないと感じ、俺はそのままその先へ入っていった。
暗闇を懐中電灯で照らす。
時間は現在に戻った。三年前のような空間は完全に消えている。
棚の荷物はこの前起きた大きめの地震によって、下に落ちて散乱している。高いところから落ちたのを証明するように、棚の上のホコリの中に四角があった。箱の大きさくらいの四角。おそらく、ここから落ちたのだろう。
これだけ話したがこのは箱が落ちた理由なんて、今の状況では関係ない。
問題は『その中身』だ。
「うわ・・・何だよ、これ」
指だ。本物ではないが、指がたくさん入っていた。
マネキンの手の指を抜いたものなのか、指の根元にはネジなような凹凸があった。
「嫌がらせか?」
俺は指を拾う。そのとき、あることに気づいた。

この指の凹凸はネジの凹凸じゃない。
ある一種の鍵だ。
俺はその先にある扉にそれを持っていくと、鍵穴を見る。やはりその鍵穴は丸かった。
「この指が鍵になるとは・・・しかも、このたくさんの指の中からこの鍵一本を」
他の指も凹凸があるが、どれもネジのような形で、この左手に握っている鍵のような奇形なものは見た感じ、一つもなかった。
扉の先には階段が続き、それを下りた場所にまた新たな扉が見えた。
扉を開けると、そこからは全く違う空間が広がっていた。
伏見稲荷大社の千本鳥居のような真っ赤な鳥居が、ずっと先まで続き、その先にうっすらとだが、小さな神社が見える。
俺は何かに引っ張られるかのように、走り始めた。まるで、子供が好奇心のあまり、親に注意されながらも店内で走ってしまうかのように。
そして、何十本かの鳥居を潜ると、見えていた神社に着いた。
「案外・・・早かったな」
マラソン後みたいに息があがっていた。汗もかいていた。
「ここは・・・いったい」

話は変わるが、あの事件にはまだ先があった。
そのとき逮捕された学者の後ろには月読という少年と、アリスという少女が立っていた。
少年は最後まで学者の名を叫び、少女はすぐにその場から消えてしまった。
少年の方は重傷だったのか、その後すぐに救急車に運ばれ、その先で今回の事件について色々と聴かれたらしい。だが、少年は一言も話さず、最後は病室から消えた・・・
と、どこかの雑誌の一部に記載されていた。
今ごろこんなことを話すのもなんだが、話しておきたいことの一つ

だった。

「久しぶりに客か？」

女の声が神社の中から聞こえる。

少女というよりは女性。

「ここだよ、ここ。君の目の前」

気づくと俺の前の賽銭箱の上に座っていた。

桜舞い散る柄の着物から白い肌の腕と脚。

長い黒髪から出た耳と、フワリとした毛並みの尻尾はまさしく、

「妖狐・・・」

そのものだった。

「いかにも私は妖狐。まぁ、どちらかというとそんな禍々しい者よりは神々しい稲荷神とかの方がいいが」

妖狐。狐の妖怪をまとめたものをいい、九つの尻尾をもつ狐の九尾狐もまたそれに含まれる。またここでの妖狐の考えは、神として祀られているものは妖狐とは言わない。

この狐もまた九つの尻尾を持っていた。

「お前は九尾の類いなのか？」

「会ってすぐの質問がそれかい？・・・案外勇気あるんだねぇ。で、その質問についての答えと言えば、半丸かな」

妖狐は賽銭箱の上から下りると、俺の前で後ろを向いた。どうやら、尻尾を見せているらしい。

数は・・・！

「気づいたかい？私の尻尾はまだ八つ。あともう一つ生やすことができれば、九尾として神の座に座れたのだろうけどねぇ。まぁ、理由はその時が来たら教えるわ」

「その時・・・まさか、お前」

「今、君が思った通りだ」

俺はその言葉を聞いて、逃げようと思ったがそのときには遅く、俺の身体を包むようにその魂が浮遊していた。

そして俺の手の甲から身体の中へ入っていった。

ここから俺とこの妖狐の進化の物語が始まった。

妖狐、憑く

「う、ぐ・・・ここは」
　さっきまでの朝日差し込むような風景は、夕日差し込む焼けた風景へと変わっていた。
「この神社・・・確か俺は・・・ッて！」
　頭が痛い。どうやらあの後、この石畳の上で寝ていたらしい。
　そういえば、あの妖狐は！
「目が覚めたか？主よ」
「な、お前！・・・・んん？今主って」
　妖狐は俺の横に胡座をかいて座っていた。
　それより・・・
「主ってどういうことだ!?俺はお前の主になった覚えはないぞ！」
「まぁ、君が印鑑を押したとか、名前を書いたとか、そういったことはしてないからね。とりあえずほら、深呼吸して落ち着いて右手の甲を見てみ？」
　俺は言われた通り深呼吸した後、右手の甲を見た。そこには黒字で『狐』と書かれていた。
「こ、これは！」
　俺は神社の外にある水道の水で手を念入りに洗うが、字は消えそうにない。肌を抉るかのように掻いても落ちそうになかった。
「まぁ、他人には見えてないからさ。契約の印としてさ」
「・・・先にいってくれよ。つーか、お前と契約なんてしてないからな」
　俺は神社から離れようと鳥居の方へむかった。
「・・・何でついてくるんだ」
「え？だから、契約したからでしょ？」
「だーかーらッ！契約してねぇっての！はい、契約しましょうなんていつ言った!?」
「心では許してるくせに～」
　ウザい・・・こいつ、本当にウザいヤツだ。
　久しぶりにこんなヤツにあった。

この印も消えないし、記憶にはないが、本当は契約しているんじゃないか。とも思い始めてきた。
「おいおいおいおい。誰だ、お前は？」
そこにさらにうるさそうなヤツが入ってくる。
タンクトップにジーパン。腕にはタトゥーが入っており、サングラスを付けていた。
その男はジーパンのポケットから手を出すと、その手に拳を作った。
「お前は何者だァ？この寺は能力者以外立ち入り禁止のはずだ。だが、お前からは1ミリも能力値を感じられんなァ」
能力者？能力値？
この言葉から推測するに、ここは三年前の事件に関係あるというのがわかった。
そして、この男はその事件を聞いて集まった人間の一人だ。
「俺の名はキラ。キラ・ヘルフレアってんだ。お前は何だよ」
「柊　海都だ」
「ほぉ、日本人か。そりゃァ・・・楽しくなりそうだなァ！」
男はその拳を俺の頬に向かって放つ。
拳を防ぐことのできなかった俺はその攻撃によって、思いっきり神社の方へブッ飛ばされた。
「ほぉ、能力値ゼロのくせしてよォ。よく俺の攻撃を耐えたじゃねぇか。ッアァーッと！ストレス解消したし、帰るか」
「待て」
「！・・・ほぉ、立ち上がるかァ」
さっき、ブッ飛ばされたと言ったが、それは俺の幻だ。
この妖狐が守ったようだ。
昔から妖狐は幻を人間に見せるのが得意で、人間を騙してはその生活を楽しんでいた。
（それがここでも活躍できるとはね。で、どうする？立ち上がっても殴られる一方じゃない？）
「それでも戦うしかないようだ。こうなってしまった限り、妖狐頼む

ぞ」
「？・・・お前、誰と話してんだ？」
（それじゃあ、妖狐パワーを使うよ！）
身体のどこからかわき出てくる力。これが妖狐の力なのかわからないが、今はこいつの力に頼るしか、勝機はない。
「いくぞッ！」
その時、俺は気づいた。
俺の尾骨部から何かが生えている。
「これも・・・お前のせいなのか？」
（まぁ、狐だしね）
尻尾が生えている。しかも、モフモフだ。
今は一本だが、これは増えるのだろうか。
「何だァ？その男らしくねぇ能力は。そんな枕にしたら気持ち良さそうな尻尾を生やしてよォ」
キラがこの尻尾に魅せられた瞬間、
戦況を一転させるような隙ができた。
俺の拳はキラの顔面を襲い、その威力で鳥居の柱部分に背中を強打させた。
「この力・・・勝てる！」
「ッ！・・・ったくよォ～。少し隙を見せたらこれだ。やはり、本気で戦わなくてはなァ！」
キラはすぐに体勢を立て直すと、何発も拳を放つ。だが、妖狐の力は筋力的な物だけでなく、スピードまでも上昇させていた。
拳を避けてから、カウンターをいれるまでの時間はほとんどない。そんな早さを持っていた。
「この学校にこんな能力を持った人間がいたというのか!?・・・まぁ、まだアレを使ってないから何とも言えんが」
キラは一度後ろへ下がると、拳を地面に向かって撃ち込んだ。
「悪の章：開演ッ！」
その言葉と共に始まったのは、黒い火柱のようなもの。それは俺の足元から空へと放たれる。

それはまるで天に昇る竜のようだった。
「これが我が能力、『悪の章』だ。どうだ、人間！思い知ったか！」
ギリギリで幻の身代わりを置いて逃げた俺はキラの顔を見た。
悪魔の顔だ。人の死を見て喜ぶ、狂気染みた悪魔の顔だった。
（大丈夫かい？まぁ、幻は粉々だけどさ）
「本当に勝てるのか？あんな化け物」
（じゃあ、尻尾を巻いてここから逃げる？）
「それは・・・」
（なら、行ってこい。君なら勝てるよ。だって、私が選んだ人だからね）
「・・・」
無責任なことを言う狐だ。
確かに本当のことを言うと怖い。あの柱を喰らったら、本当に終わりだろう。
しかも、あれで開演だ。それが終幕まであると考えると恐ろしいものだ。
「だが、俺は・・・諦めないッ！」
「ほぉ、逃げたか。だが、まだ始まったにすぎない。次は序章だ！」
キラは地面に拳を刺し込むと、地面からレバーのようなものを引っ張りあげた。
「序章はホーミングミサイルだ。これを避けきったなら第一章を見せよう！」
「いや、第一章なんてものなく、これで終わりだ」
妖狐の力によって早くなった足で、ミサイルの網を避けると、目と鼻の先にはキラが立っていた。
「これで終幕だーーーッ!!」
「そこまでだ！」
拳が当たるその瞬間に、俺たちの耳に声が響き渡る。
それは戦闘終了の合図だった。
「ッ、見つかったか」
その声の方向には、眼鏡をかけた男とロングヘアーの女が立ってい

た。
「チームO、キラ・ヘルフレア。また校外能力使用禁止法を破ったな」
「ッたくよォ～。俺も俺だが、こいつはどうなんだァ？こいつもバリバリ能力使ってたじゃねぇか！風紀委員さんよォ？」
「彼もチームOよ」
「!?・・・アンタは」
女はかけていたサングラスと目深にかぶった帽子を取り、素顔を見せた。
「か、監督・・・」
キラは女を監督と呼んだ。
それよりも、
「俺が、チームO？何を言っているんだ？」
この女の言ったそれが気になっていた。
女は俺の質問に答えるのか、俺の言葉を聞くと、すぐにこちらへ歩ってきた。
「君が柊　海都君だね？私は今日からあなたの先生、そして監督となるリアよ。よろしく」
「監・・・督？どういうことだ？」
リアは深呼吸をすると、大声で
「柊　海都！これより、その能力を極めるため、私立レッドブラッド能力専門学校への入学、そしてチームOへの参加を許可する！」
と言った。
俺は驚きのあまり、唖然とした。そして突きつけられた現実問題に驚愕の声をあげた。
★
何でこんなことになった・・・。
あれから一夜が過ぎた。家には帰れないでいる。
リアは大丈夫だ、の一点張りでそれ以上のことは言わない。
「今日からこのチームで一緒に戦ってもらう柊　海都君だ。みんな頼むよー！・・・ほら、柊君も」
「え？あぁ、えーと・・・」

俺の声にキラは舌打ちをする。
「柊君だね？」
そんなキラを無視して、一人の男が立ち上がった。
銀髪に銀縁の眼鏡。そしてこの学校の物と思われる制服を完璧に着こなした『Ｔｈｅ　優等生』という姿をしている。
「俺はこのチームＯのリーダーをしている、オルガだ。何でもわからないことがあったら言ってくれ。全力で答えられるようにする」
「よ、よろしくお願いします・・・」
オルガは手を前に出す。・・・握手を求めているらしい。・・・俺は手を握った。
「よろしく！」
「ケッ、こいつのせいで昨日はよォ～」
キラはこの空間にイラッと来たのか舌打ちをしたあと、机の上に乗せた足を地に下ろして、前へ歩ってきた。
「オルガ！本当にこんな拳一つ当てただけで、揚々とした顔を見せるやつをこのチームに入れんのか？」
「？・・・何を言いたい」
「要するによォ～、こいつはこのチームに似合わねぇってことだ。このチームは今、力不足だ。先輩達が卒業してしまったせいで、戦闘にすら出れない人数になった。こいつが入っても数合わせにしかならねぇよ」
「お前の顔に拳をいれたのだろう？・・・ということは彼はそれなりの力を持っているということだ。・・・意味わかるか？」
「ッ！・・・わかったよ、好きにしろ。ただ戦闘のジャマをするな」
俺もこんなチームにいるのは嫌だ。
今、俺の前で広がっているこの光景は何だ？俺は漫画やゲームの世界にでも来てしまったのか？
家族や友達も心配しているはずだ。
「家族にはもう了承はとってあるよ。と、言うより君はもうあの世界に存在しないことになっている」
その言葉は俺の心配を踏み壊すと同時に、絶望を植え付けた。

「え・・・どういうこと・・・ですか?」
さっきまで明るい顔をしていたオルガも顔を暗くし、他にこの教室にいる人間も目を反らした。
「監督の言う通りだ・・・」
ここに来た物は、あの世界から消えたことになっている・・・行方不明としてな

彼を探しに・・・

（え？・・・海都君が？）

祭りに行った次の日、私は学校である噂を耳にした。

最初は海都と同じ地域に住んでいる、隣のクラスの男子が話始めたことだ。

海都が自宅に帰っていない、というものだ。

昨日何度かメールを送ったが、返信は帰ってこなかった。そのときは、疲れて寝ちゃったんだよね、とか携帯の電源がきれちゃったのかな、とか思っていたが、まさかそんなことになっているなんて・・・。

「あ、ルナ。おはよー・・・どうしたの？何か顔色悪いけど。まさか、昨日の柊君とのデートの疲れが出てる？」

友達の言葉すらも私の身体を重くする。

・・・海都君が危ない！

「ちょっと！ルナ！どこ行くの！」

そう考えたときには、もう身体が動いていた。友達を突き飛ばすと、玄関に向かって走っていた。

「私、ちょっと用ができたから帰る！先生には早退するって言っておいて！」

「ちょっと・・・。もう、朝から・・・」

確か・・・海都は昨日、K市昆虫美術館に行きたいとか言っていた。

まさか、そこで何かあったのかもしれない。

それにこの学校から駅まで行き、そこから数分歩けば、そこの近くに停まるバスが通っている。

私は乗ってきた自転車を、駅の駐輪場に停めて、電車に乗り込んだ。

K市まではすぐだ。駅二つ、三つで着く。

私はそれまで、海都と撮った写真を見て、心を落ち着かせていた。

『次は～K市昆虫美術館前～』

バスはその前にある公園の駐車場に停まる。

私はバスから降りると、公園の方ではなく、それと向かい側の美術館へ足を運んだ。

「お嬢ちゃん。その美術館はもうとっくに閉まってるよ。まさか、君も観光客かい？」
「いえ、私は・・・」
「運転手さん、どうしたのですか？」
バスの奥から声が聞こえた。
ほとんど、乗っていないバスの後ろから現れたのは一人の女性だった。
モデル体型で、長く綺麗なクリーム色の髪が特徴の女性は席から立ち、バスを降りた。
「私もここに来たかったの。ここまで走ってくれてありがとう。」
「こ、こちらこそ・・・」
運転手はバスの扉を閉めると、そこから走り去ってしまった。
「え、えっと・・・ありがとうございます」
「いいのよ。困ったときはお互い様よ」
「あの・・・ここに来たかったって？」
「そのままよ。特に理由はないわ。強いて言うなら、観光かしらね」
私と女性は館内に入る。
割れた窓から入る日の光は、その空間を幻想的に魅せた。未だに壁に飾られた絵画は不気味さの中に、芸術的センスの欠片もない私でさえ、魅力を感じさせた。
「そういえば・・・あなたの名前は？」
「え？あ、はい。赤井　ルナです・・・あなたは」
「私の名前は有栖川　剣城。剣城なんて男っぽい名前、変だよね」
「いやいや、むしろかっこいいですよ！」
フォローになっていないのはわかっている。この服装と体型からして、有栖川さんはきっと、ファッション雑誌などのモデルであろう。それか女優か・・・
「ふふ、ありがとね・・・さて、問題はここかな？」
有栖川さんは話を切り替えるように視線も切り替える。その先にはこの一階フロアから地下へと続く階段があった。
私は入ったときからそこには触れていなかった。

「・・・あなたも感じる?・あそこから溢れる黒い何かが」
この人は鋭いところを突いてくる。正解だ。
私が触れなかった理由は、それだからだ。
「黒い何か・・・わかります」
「なかなか、見る目があるねぇ」
有栖川さんの口調が変わる・・・。私はこの人についていくのを躊躇した。だが、
「待って」
有栖川さんは私の腕を持ち、私の帰る足を止めた。
「この先に、あなたの狙いがあると思うの」
「狙い・・・目的ですか?」
「そう・・・。確か、あなたは運転手に観光かい?と、聞かれたときに躊躇ったよね。それはつまり、『あなたは観光でここに来たわけではない』ということを説明しているよね?」
本当に鋭く、私のミスを的確に突いてくる。
「もしかして、この美術館で起きてる事件について調べに来たか・・・または、人を探しに来たか」
・・・またもや、正解を導き出されてしまった。
まるで、心を読んでいるような・・・そんな感覚にも襲われた。
いつの間にか、私は冷や汗をかいていた。
「もしも、このまま私と一緒に地下へ行くと言ってくれれば、その人を探すのを手伝うわ。さぁ、どうする?」
「地下へ・・・行く・・・」
その地下には奇妙な空間があった。
今までの廃墟のような空間が消え、当時の内部が表されたような空間があり、その先にはさらに地下へと続く階段があった。
「あの・・・有栖川さん」
「何かしら?」
「あなたの目的って何ですか?」
「ここまで来たからには言ってもいいかしらね・・・」
階段の途中、有栖川さんは足を止めた。

急に立ち止まったので、私は思わず、階段を踏み外しそうになる。
「私の目的は忘れ物を探しに来たの。昔のね・・・」
「それって、どんなものなんですか?」
私は少し有栖川さんの目的に足を踏み入れる。
それが私にとって良いことなのか、悪いことなのか、全く考えていなかった。
「それはね・・・私の宝物よ」
「宝物?」
「えぇ。昔、ここである事件があったの。そのときに私も被害者でね。ここにその宝物を置いてきちゃったの」
「・・・」
その事件については、前に海都から聞いている。といっても昨日だが、海都はこの事件のことになると、耳をそっちばかりに傾け、私の話を聞かなかった。
今でも裏番組やちょっとしたニュースで、その話題をあげられることがあり、海都はその番組をちょくちょく録画していた。
今頃だが、私と海都が会ったときの話をするかな。
私は一人の転校生だった。
父の都合でこの地域にやってきた私は、中学二年の二学期くらいに、海都のいる中学にやってきた。
最初はただ、同じクラスで、あまり話すこともなく、目が合うと挨拶をしたり、ちょっと話すくらいの仲だった。
しかし、高校が同じ場所と決まったとき、海都君の方から話しかけてきた。
「あ、赤井はその、ど、どこから通っているんだ?」
私はそれから海都君と話すようになって、高校に入ってすぐに彼からの告白に返事をした。
「・・・へぇ。君の探している彼ってそんな純粋な子なんだね・・・」
「な、何を言ってるんですか!?・・・まさか、心を読んだとか!?」
「うん、そうだよ」
「・・・え?」

「私の能力は目を合わせた人間の考えや心境を読み取る能力。昔からそんな能力があってね・・・。でも、良いことといえば、その人の考えを見て、その人に合わせるくらいだけど・・・」
この人は何を言っているんだ？
普通はそんなことを考えるだろう。だが、私はそんなことを思わなかった。
ここまでのことを思い返してみると、辻褄が合ってしまう。最初から最後まで・・・
それに海都の言っていた事件の内容には『能力者』という言葉が何度も出されていた。
・・・この人は能力者だ。
「おや?それを聞いたら、目を閉じてしまったか。まぁ、そうだよね。普通ならそうするよね」
「・・・それで、その能力は」
「まぁ、それが狙いだったけどね」
次の瞬間、私は胸の辺りをグッと後ろに押された。
私はそれに対応できず、階段を転げ落ちた。
「それじゃあ、さようなら。ルナさん」
私はようやく目を開けた。
そのときには、全く違う景色がそこに広がっていた。
だが、それよりも身体中を激痛が走る・・・階段を転げ落ちた後に、その先にあった扉に突っ込んだからだ。
私はなんとか立ち上がると、辺りを見回す。
さっきまでの空間とは違う・・・
木々や草花が生い茂り、地面がある。
「ここは・・・」
この世界でルナはある一人の男と会い、人生を変えるほどの戦いをすることになるが、それはまた次の話で・・・

敵わないもの

私はその空間に入っても、なぜか冷静でいれた。
どこか懐かしく、そしてこの風景を知っていた。
この先、何が起こるかわからないが、私自身何が起こっても冷静でいれる気がした。
すると、いきなり私の前にドサッと倒れる男が現れた。
男は身体中血まみれで、今にも息絶えそうだった。
「どうしましたか！」
「ぐっ、俺に触れるな！」
よく見ると、彼の心臓を貫くように、長めの矢が刺さっている。
それは銀色に近い色をして、矢じりに十字架が描かれていた。
「俺は吸血鬼だ。だが、普通の吸血鬼じゃない」
話の途中で男は吐血する。
「だが、人間であるお前に頼み事をしなければなれないようだな・・・」
男は私に大事に持っていた剣を渡した。
「その剣は俺の魂だ。絶対に追っ手に渡すな。」
「ま、まだ、わかりません。あなたの名前は？」
「・・・クロードだ。人間に名前を告げるときが来るとは思わなかった・・・な」
男は最後にそう言い残すと、静かに息を引き取った。
そして、場面を変えるかのように追っ手が私の目の前に現れる。
「そこの女よ。ここに瀕死の兵士が来なかったか？」
「来ませんでしたが・・・ある男性は来ました」
「・・・まさか、その剣は！キサマッ！」
「クロードさんの意志は・・・私が受け継ぐ！」
そのとき、普段の私なら、何を言っているんだと思うところだけど、私は何も思わなかった。むしろ、光栄に思った。
なぜなら・・・
やっと、私にだけできることが見つかったから。
この感じ、小学生から中学生にかけてやっていた剣道に似ている。

振り方は全く違うが、この貰った剣の力もあってか、いつも以上の力を発揮しているのがわかる。
剣は相手の隙を縫うように動き、いつの間にか追っ手は戦闘不能で倒れていた。
ルナの力ではない。この剣に染み込んだクロードの魂が彼女を動かしている。
そして、彼女を先へと進ませる道標になる。
ルナは剣をしまうと、追っ手の現れた方向へ足を進めた。
★
「これから試験を受けてもらう！」
そう言われてやってきたのは、校舎から少し歩いた場所にある体育館近くのグラウンド。
そこには何人か観客と思える人間がいた。
「ここで行われるのは、入団試験を兼ねた新人戦だ。ここ数週間で入学した者が戦い、監督が真価を見るというものだ。この結果によっては、すぐに参加もありえるな」
「まぁ、私たちのチームは今、四人しかいないから、嫌でも参加できるけどね」
教室の奥の方の席に座って男のような格好をした女が、俺の耳元まできて話した。
「ごめんね、驚かせちゃった？」
「・・・いえ、別に」
「いやー、あまりにも私、空気だったからさ。私の名前は四津野　千理。よろしくね」
四津野は俺の手を握る。・・・痛い。握力が俺の右手を壊しにかかる。
「あ、ごめんなさい！私、昔から力が強くて」
（この女、本当に女か？握られたとき、私の腕にも力が伝わってきたぞ）
四津野が手を離したあと、数分は手が痺れていた。
ほとんど感覚がなかった。

「柊、ちょっとこっちに来てくれ」
リアが二回ほど手招きをする。俺はすぐにリアのところへ向かった。
「今日の新人戦だが・・・
君は一回戦目から負け試合みたいだ。
★
俺は静かに戦場へ出た。
武器などないが、俺には妖狐がいる。
(監督の言葉、まだ気になっているのかい?)
「普通は気になる。・・・それほどの力の差があるのか、それとも」
(戦う前から勝敗の指示があるか・・・。まぁ、戦ってみたらわかる)
俺は戦場のど真ん中、線の引かれた場所に立つ。
『新人戦　1グループ一回戦!左、柊　海都。右、東条　シュウ』
右と言ったが、俺の前にそいつはいない。
東条　シュウとか言ったが、どんなやつなのだろうか。
『新人戦初試合からこんな状態とは、どうやら不戦勝みたいだな、運のいいやつだ』
「誰が勝ちを譲ると?」
その声は、会場を一気に凍らせた。
熱気は外へと消え、そこには冷酷な眼差しをした男がこちらへと向かっていた。
「試合時間が押していると聞いている。すぐに終わらせるから、次の試合時間には間に合うだろう」
男は右手に握った刀の鞘を投げ捨てると、その刀をかまえた。
「お前は確か・・・昨日、キラと戦って初めて能力を知ったみたいだな」
「なぜ、それを?」
「あの集団の中に俺はいたからだ。風紀委員よりも上の役を持つ能力者としてな」
『それでは・・・試合開始ィーーーッ!』
審判は俺たちの話を断ち切るように、開始宣言を行う。
そして、俺の戦意をも断ち切った。

その刀は俺の右腕を切り落とした。・・・という幻覚を相手に見せた。
だが、あと少し遅かったら、それが現実になっていた。
「・・・お前の武器はその幻覚か？」
「！」
なぜ、バレた！
昨日のことを観ていたといえど、それでも観ていて二回だ。まさかその二回でバレたとは・・・。
「いや、その幻覚はただの防御だ。まぁ、俺には効かないがね」
シュウは眼光をこちらに向ける。・・・すると、俺の目の前に衝撃波のようなものが激突した。
まるで、車がぶつかってきたような、そんな威力の衝撃波が俺に襲いかかった。
「ッ！」
「この眼は幻覚をも消し去り、相手に衝撃波で攻撃する。いわば、攻撃と防御の両方ができる能力だ」
（柊ッ！こいつと私たちとではレベルが違う。まだ、私と完全に融合できていない状態では！）
妖狐は確かに今、融合と言った。
俺の意識が、妖狐の意識と融合すれば、シュウを倒せるのか？
（・・・難しいところね。今は数字で表すと、およそ１０％くらい。あと２０は欲しいけど・・・）
かまわない・・・とも思ったが、昔読んだ本をたった今、衝撃波をまともにくらい、壁に衝突したときに思い出した。
神や妖怪が人間と魂や意識を合わせるためには、それなりの体力が必要だと言われる。中には、魂の共鳴を図り、死んでしまったものや、完全にその相手に食われ、二度と人間の魂はこの世界に帰ってこなかったという話もある。
（大丈夫。だって、私には経験がある。昔にも、私と融合した人間がいたから）
・・・それはそれで何とも言えないが、今は仕方ない。

「力を貸してくれ！妖狐！」
「わかったわ！」
３０％
何が起きたのか、俺にはわからないが、身体の奥から溢れ出す力にどこか『強さ』を確信させるものがあった。
そして、俺のケツから生えた尻尾は三つに増えていた。
「この数秒で能力値が上がった!?・・・進化だか何だかわからないが、まだ俺には策がある。この眼以外にもな」
「行くぞ！シュウ！」
俺はその力で、シュウの振り下ろした刀を受け止めると、右拳をシュウの顔面目掛けて殴り貫いた。
拳は顔面の手前で、シュウの能力によって防がれたが、次の左は完全にシュウの顔面を捕らえた。
「やった！」
「この衝撃波は片眼のみでしか発動できないッ！」
衝撃波をくらった俺のように後ろへぶっ飛ぶが、壁面わずか数ミリのところで踏み止まった。
「最初の言葉はどーしたッ！もう限界か！」
思わず、そんな言葉が口から出てしまった。きっと、妖狐が発した言葉も出てしまうのだろう。
「限界？・・・俺はまだ一つしか能力を出してない。俺には三つの能力がある。そして・・・これが二つ目だ！」
次の瞬間、シュウは瞬間移動をしたかのように、俺の目の前に立った。
本当に一瞬だった・・・
「ヤバイッ！」
刀は本当に俺の左腕を切り落とした。
「う、うわぁぁぁぁぁぁッ！う、ぐ、ぐぁあッ！」
「悪者にはなりたくないが、こんなことを言ってやろう。その悲鳴、とてもすばらしいな」
シュウは俺を見下すと、右足で俺の左腕の付いていた部分を蹴り飛

ばした。
そして、ここでレフリーストップか、鐘の音が鳴った・・・。
『ここで、柊　海都。戦闘不能です。これ以上戦っても死人が出るのみです！』
俺の初試合は初戦敗退で幕を閉じた。
ちなみに優勝者は俺を倒したシュウだったという。

命名する！

新人戦から三日が経った。
俺は泊まっている寮の部屋で起きた。
夢ではない。まだ左腕に痛みが残ってい・・・左腕!?
俺は左手で掛け布団を軽く握った。感触がある。
「あ！まだ起きちゃダメですよ！」
部屋のキッチンの方から女の声が聞こえる。
そこには俺と同じくらいの歳の女が立っていた。
「お、お前は！ぐぁ、ぐッ！・・・」
「ほら！ダメですよ！」
女は俺がベッドの上で後ろに倒れたを見ると、していたことをやめて、俺の方へ歩ってきた。
「まだ傷が回復していません！寝ていてください！」
「お前はいったい・・・」
「私はリリー・クロノといいます。チームOの看護係をしています。監督に看護を頼まれまして」
「そうだ！妖狐は！」
手の甲に刻まれた狐の文字は消えている。どこかにいったのか？
「ヨウコ？・・・あ、あの女性ですか！あの人なら、ベランダにいますよ」
「そ、そうか・・・ん？」
俺は思った。どうして、リリーに妖狐が見えているんだ？確か妖狐は・・・
『私の姿は海都君以外には見えない。だから、他人に違和感を持たれたりすることはないよ』
と、言っていた。
「妖狐の姿が見えているのか？」
「え？あ、はい。うっすらとですが、形は見えています。狐のような尻尾を生やした・・・」
「ありがとう。ちょっと、ここから立てない・・・よな」

あのシュウの攻撃で足もケガをしていた。
シュウの能力は身体中のあらゆる部分を攻撃していた。頭から爪先まで、身体中が悲鳴をあげているのを食らった際に感じた。
骨まではいってないみたいだが、筋肉には痛みがある。
肉をえぐる・・・そう言えばいいか。
「柊さんは無理矢理この世界に入ったんですよね？」
「え？あぁ、そうだが」
「その・・・元の世界に帰りたいとか、そんな気持ちはありますか？」
「・・・」
ＹｅｓかＮｏかというと、Ｎｏだ。
俺自身、こういった非科学的な超能力系が好きだからだ。スプーンを曲げるとか、人の考えることを当てるとか、そんなレベルじゃない。瞬間移動とか、魔法とか、眼から衝撃波を放つとか・・・
「最初は帰りたかったけど、今はＮｏだ。俺は超能力とか好きだからな。それに新しい目標を見つけたしな」
「目標・・・それって」
「東条　シュウに勝つ。もちろん、妖狐と力を合わせて」
「えっと、言いにくいのですが。言ってもいいですか？」
「ん？何だ？言いにくいって」
「その・・・えっと・・・今回の新人戦の結果」
東条　シュウさんが優勝しました。しかも、圧勝です。
「・・・えっと、すまん。それは俺にとって良い知らせなんだが」
「え？」
「それを聞いて、さらに壁が高く、そして厚くなった。目標が大きいほど、それを達成したときの達成感はデカイからな」
俺はそんなことを言って、笑ってみせた。
リリーにはそんなことを言ったが、俺は心の中で押し潰された圧迫感が残った。
高く厚い壁。それは俺にとって、とても大きなもので、乗り越えることが厳しいものだと思った。
本当に妖狐の力を全て使わないと無理なんじゃないかと思った。

「リリーはどうして、この世界に?」
「・・・」
それまで笑っていたリリーは一気に顔を暗くした。
聞いちゃいけないことだったか?
「私は拾われた身でした。中学生の頃、ある事件の中で、完全に死んだことにされました。ある建物の地下で行われた能力者のみの殺し合いで、私は回復のみを使い、三人一組のチームで傷ついた二人を回復するという役目をやっていました・・・」
この地下から、生き残った2チームだけが、この世界から脱出できるというもので、私のチームはそこに入れませんでした。
その2チームは一人以外全員が死んで、結果1チーム一人の合計二人でした。
その後、この事件の犯人の男は逮捕され、私たちは救助隊に助けられました。
ですが、その結果、私はその男の手によって完全にこの世から消された存在となり、私が住んでいた家や家族、全てが消されました。繋がりのある者も全て・・・。
私は中学生で一人ぼっちになりました。
そんなとき、チームOの監督であるリアさんが、私を助けてくれたんです。
「君の力が必要だ。お願い、力を貸してくれ」
助けてくれたと言いましたが、そのときのリアさんは私にむかって、お金も住む場所もない私にむかって深く頭を下げていました。まるで、神様にでも感謝しているかのように、膝を地面について・・・
「君が住む場所も、お金も、食べ物も、何でも願い事なら叶える。だから、私に力を貸してくれ」
そう、何度も、何度も言いました。
私はそんなリアさんを見て、逆に神様に感謝しました。
そして、リアさんに・・・
「ありがとうございます。」
と感謝しました。

それからここにいるんです・・・あれ？」
「何かすまない。そんなことがあったなんてな」
リリーは能力で助けられたといっても過言ではない能力者だ。ここに来て、キラやシュウと戦い、超能力は争い事の道具になり、人を傷付けるだけのものになってしまうのか、と考えたがリリーの話を聞いて考えが少しだけ変わった気がする。
「私以外にもそういった人はたくさんいます。四津野さんも助けられたみたいですし。オルガさんとキラさんは自らここに進学されたみたいですが」
「そうか・・・そうだ！妖狐に話があるんだ。少しだけ無茶してもいいか？」
「それくらいなら全然無茶じゃないですよ」
俺は立ち上がり、ベランダへとむかった。
カーテン越しだが、妖狐が立っているのがわかる。
俺はカーテンをめくり、ベランダに出た。
「・・・あれ？起きれたのか。大丈夫かい？」
「まだ痛みが残ってるけど、これくらいなら余裕だ」
「そう・・・で、話って何だ？」
「聞いてたのか・・・大したことじゃないが」
「重要さはどうでもいい。そんな焦らさないで話してくれ」
「何かさ、妖狐って呼ぶのはどうかと考えて、これからは名前で呼ぼうと思うんだ。・・・で、名前は？」
「そういうことか。ずばり言おう！私に名前はない！」
俺は風船の空気が抜けたように、おもわず心から緊張が抜け出てしまった。
「名前がない？」
「確かに神には○○神とか、何々の神とか名前がある。だが、私は所詮、妖怪狐の一人だ。ほら、河童だって一匹ずつに名前がついているわけじゃないし」
「・・・じゃあ、何て呼べばいい？」
「んー、考えたことないな。前の主はずっと妖狐って呼んでたな、よう

こというよりはヨーコ？」
「つまり、ヨーコでいいのか？」
「いや、それは何か嫌だな」
俺は一度会話をやめ、腕を組んで名前を考えた。
妖狐と何年も一緒に暮らすかもしれない。何度も妖狐のことを呼ぶことになる。
親が子供に名前をつけるとき、どんなことを考えるんだ？字の意味とか、読みとか、形とか、画数とか・・・
子供に名前をつけると考えるからいけないんだ。
「確か、俺のことは『君』って呼んでたよな？」
「まぁ、名前で呼んで欲しいなら呼ぶよ、海都君ってさ」
「・・・それは嫌だな。海都でいい」
一つ考えが浮かんだ。妖狐を一匹のペットと考えればいいんだ。
「・・・よし！命名する！」
今日からお前の名前は『タマ』だ。
パッと頭に浮かんだ名前。呼びやすく、それっぽい名前だ。何となく狐というよりは、猫って感じだが。
「・・・却下で」
「ダメか？」
「ダメか？って！私は猫じゃないし、君のペットでもない！それにどちらかというと、神に近い存在だ！あと少しで神になれる存在だぞ！神社とかに住めるような存在だ！」
「じゃあ、あれだ！妖狐が呼んでほしい名前を俺に言うまでタマだ！あらためてよろしくな、タマ」
「ぐぬぬ・・・あー！もういいよ、タマで！その代わり、何があっても絶対にタマって呼べよな！力を貸してほしいときでも、話を聞いてほしいときでも、まるでペットを呼ぶときみたいにな！」
タマは怒りながら、部屋のなかに入っていった。
俺はその後ろ姿を見て、少しだけだが、タマとの距離が近付いた気がした。

自由行動

妖狐の名前が決まってから二日後。
やっと身体が完全回復し、痛みがなく動けるようになった。寝返りができない、飯を食べるときも腕に痛みを抱えていた・・・そんな日々とはもうおさらばだ。
「おはよう、タマ」
「・・・」
タマという名前が気にくわないのか、ムスッとしている。そんなにタマという名前が嫌なのか。
「それもあるが、何か嫌な予感がするんだよ」
「例えば？」
「何か災難に巻き込まれる感じ」
「まぁ、大丈夫だろ」
俺は学校側で用意された服に着替える。俺の着てきた服はこの前の戦闘でボロボロで、血で真っ赤に染まっている。
用意された服は着てきた服に似ていて、俺の好みにピッタリの服だった。あともう一着あるが、それはジャージみたいだ。
「・・・とりあえず持っていくか」
俺は畳まれたジャージをカバンにしまうと、部屋から出た。
「おはよう、柊。ケガは大丈夫か？」
部屋を出ると、すぐそこにオルガが立っていた。
「あ、おはようございます。完全回復して、全然動けますよ！」
「それならいいが。・・・さっそくだが、今日の時間割りを伝える。今日は一日、個人練習だ。その能力を磨くように。そして、明後日に能力値検査があるから、あまり無理はするな」
「はい！」
「それじゃあ、俺は監督に呼ばれてるから、練習相手が欲しければ、キラや四津野に頼んで」
「わかりました！」
オルガはそのまま、階段を下りていった。

（個人練習言っても、何をするんだい？）
「難しいな。二人がどこにいるのかわからないからな」
学校に来てばかりの俺は二人の場所よりも、今俺がどこを歩いているのか、それを知る方が大事に思えてきた。
（・・・迷ったのか）
仕方ない。地図も渡されないし、壁に窓がないからどこが出口なのか外も見えない。
（それにどこか、空間がねじれている感じがする。これも能力かしらね）
「あれ？どうして、君がここに？」
そんな俺に後ろから声をかけられた。助け船かと俺は振り向くと、そこには全くもって見たことない顔があった。
「えっと・・・」
「あ、そうか。君とは会ってなかったもんね。私は東条　アキネ。よろしく」
「東条・・・もしかして」
「そのもしかしてで、シュウの姉。この前はごめんね、昔からシュウは熱くなっちゃうときがあって。シュウにはいつも言ってるんだけどね」
前々から思っていたのだが、ほとんどの生徒が私服で、この学校に制服というのは無いはずだが、オルガやこのアキネはこの学校の校章が胸部分に書かれた服を着ている。
「で、あれか。道に迷ったのか？なら、着いてきてくれ」
「え？あ、はい。こっちなんすか？」
「うん。まぁ、ただ出口に送るだけなんだけどね」
少し歩いた後に、アキネがこんなことを言い始めた。
「ここらへんはチームＡ～Ｃが使用するトレーニングルームや、研究室があって、他のチームはほとんど来ないんだ。来ると言えば、係や委員会で上の人間に用があったり、あとは宣戦布告とかね」
「じゃあ、俺って相当まずいことをしてるんじゃ・・・」
「ピンポーン！正解。まぁ、私の後ろにいればとりあえずは大丈夫

じゃないかな」
　アキネの横を通る人の大半がアキネに向かって挨拶をする。この人がすごい人だというのを実感した。
　シュウの姉ということはあれ以上の力を持っているに違いない。少しでも、何か悪いことを言ったら、首が飛んでいくかもしれない。
　とりあえず静かにしてよう。
「君ってさ、その妖狐をどうやって仲間にしたんだい？」
「仲間にって・・・。仲間にしたというよりは使われてる感じですね。あっちからでしたし」
「へぇ・・・。じゃあさ、その妖狐はどこで会ったんだい？」
「え？それはすッむぐぐ！」
　俺はいきなり口が動かなくなった。タマが押さえている。
（バカ！余計なことは言うな！）
「妖狐が口を押さえているのか。その感じ的に、２０～３０％は融合してるね」
（こいつは君を捕まえようとしている！逃げろ！）
　俺はタマの言っていることが本当だと思い、すぐにその場から逃げ出した。来る途中、一ヶ所だけ窓があった。あそこから脱出する！
（彼女は追ってきてない。今なら、脱出できる！）
　俺は窓を開けると、そこから下に飛び降りた。そして、タマの力を使い、下の階の窓の縁に掴まった。
　そして、窓を開けて中に入った。
「柊！どうしたんだ！」
　入ってすぐのところに、リアが立っていた。どうやら、俺が落ちてきたのを見て立ち止まったらしい。
「た、助けてください！チームＡの方に！」
「話は後で、助けないと！」
「何だぁ？朝っぱらから起こされたかと思ったら、次は空から女の子ってかぁ？」
　リアの後ろから低い男の声が聞こえる。
　男は俺の腕を掴むと、窓から一気に引っ張り上げた。

金髪の右腕だけ袖のない服を着た大男で、その右腕には龍の刺青が入っていた。龍の口からは『Ｅｍｐｅｒｏｒ』の文字が炎のような字体になり、吐き出されていた。
「何だ、男か。リア、新入りかい？」
「彼は柊　海都君。この前、チームＯに入ったの」
「お！新入りか！俺の名は雷帝。本名はあるが言わないぜ。よろしくな！」
「よろしくお願いします・・・」
「そんな畏まんなよ！俺には敬語使わないでいいから！」
雷帝は俺の背中をバンバン叩くと、そのまま笑いながら廊下を歩っていった。
「彼はあういうヤツだ、気にしなくていいよ。まぁ、もうこの学校に八年も留年してるから先輩だけどね」
それにしても、肌の艶や髪の感じからして、それ以上に歳をとっている気がする。
「彼の人種的に人よりも歳をとるようになっててね、普通の人間の二倍の歳をとるらしい。今、彼は２８歳だから、５６歳くらいじゃないかな？」
「なるほど・・・。キラさんと四津野さんの居場所って知ってますか？」
「うーん・・・。たぶん、チームＯ専用のトレーニングルームにでもいるんじゃないかな？雷帝に着いていけば着くと思うよ」
「わかりました。ありがとうございます」
俺はそれを聞き、雷帝の後を追った。
「雷帝、久しぶり！」
「おう、四津野。相変わらず、女らしくねぇな」
雷帝はトレーニングルームに入って早々、近くにいた四津野に絡み、みぞおちに一発突きをくらった。
「相変わらずの力だな・・・。キラは来てないのか？」
「アイツはどうせ、今日もゲーセンに入り浸ってるんだろ。自由の時はいつもこれだからな」
「まぁ、アイツらしいな。それと、柊だっけ？入ってこいよ」

俺の存在はとっくにバレていたようだ。
俺は柱の影から静かに出てきた。
「それともう一人、柊の後をつけてきたヤツ。確かアキネとか言ったよな」
「何!?」
俺は後ろを振り向く。そこにはアキネがあきれた顔をしてこちらを見ていた。
「相変わらずの能力ですね。えっと、誰でしたっけ?」
「雷帝だ。覚えてくれ」
「ごめんなさい。ここ最近、全く試合で見かけなかったもんで」
「俺も休んでたんでなぁ。後輩に戦線は任せて」
雷帝はトレーニングルームから出ると、アキネの目の前で止まった。雷帝の身体から出る弾けた雷撃は近くで見ていた俺の心を震わせた。
「久しぶりにやるかぁ?チームAとZには本気出していいとリアから言われてるからなぁ!」
「本気ですか・・・。元LOST討伐部隊隊長の本気と手合わせできるとは光栄です」
「やるならこっちこいよ。そこじゃあ周りに迷惑かけるからよ」
「わかりましたよ」
雷帝とリアはトレーニングルームに入る。
「柊、お前は外で観てろ。四津野もな」
「久しぶりに雷帝の戦闘が観れるのかい?いつもなら、割り込みたいところだが、観ることにするよ」
四津野は壁に立て掛けておいた刀を持つと、トレーニングルームから出た。
このトレーニングルームの出入口側の壁は全体がガラス窓になっており、中が見えるようになっている。もちろん、どんな攻撃にも(たぶん)耐えられると思われるものなんだろうが、信用できない。
「さぁ、始めようぜ。お前も研究なり、委員会なり仕事が残ってるだろ?・・・まぁ、ケガしないように頑張れとしか言えないけどな」

「お手柔らかにお願いしますね・・・あまり、汗をかきたくないので」

剣を奪うもの

ここは、いったい・・・
このベッドや消毒の臭い・・・。どこかの病院・・・なのかな・・・。
でも、それにしては窓はないし・・・。もしかして、どこかの病院の診察室とか。
「起きたか。まさか、こんな場所に連れてこられるとは思わなかった」
「わわっ！あなたは確か、クロードさんですよね？」
「何を今さら、俺はクロードだ。」
確かこの人は私の目の前で死んだはず。なのにどうして、こんなところに？
「それか。それなら、俺が『お前が俺の意志を貫き通すのを近くで見ていたい』と、神に願ったから・・・とでも言えばいいか」
私の心のなかで思い浮かんだ質問にクロードは答えた。
「私の心の中が読めるの？」
「あぁ。思考からお前の記憶まで、色々なことが今の俺には手に取るようにわかる」
「じゃあ、今から私が心の中であなたに質問するので、心を読んで答えてください」
「・・・なるほど。俺の好物は血だ」
確かに心の中が読めるみたいだ。
今、私は『あなたの好きなものは何ですか？』と質問した。そして、クロードはそれに答えた。もちろん、相手が吸血鬼だから、そう答えるだろうなと思ったけど・・・
「予想通りだったのか。じゃあ、何て言えば、お前は驚いたのだろうか・・・部位とか言えば良かったか？」
「・・・結構です」
「そういえば、そういったグロテスクな話は苦手と書いてあったな」
クロードは近くの椅子にドッシリと座り、難しい顔をした。
「それで話を変えるが、お前は早々に約束を破ったようだ」
「約束・・・！」

「わかったみたいだな、俺の剣を盗まれたようだ」
　周りを見回すがそれらしきものは一つもない。
「とりあえず、ここから脱出することが最適だ。連れてきたヤツを殺してでもな」
　私はベッドから足を下ろすと、扉まで息を潜めて進ませた。そして、扉をほんの少しだけ開けると、その先に見えるものを、目を細めて確認した。
「ここは・・・病室とか、診察室じゃない。保健室だ」
　どこかの学校の保健室なのか、近くのコンクリートの柱に保健室と書かれていた。その下にはチームZと書かれている。
　学校にしては廊下が全体的に暗いし・・・もしかして、廃校かと思ったが、すぐそこに人が話しているのを見て、廃校でないことがわかった。
　だが、おかしいのはその人達の格好だ。
　二人とも、兵隊の制服を着て、頭には首から上全部が隠せるような鶏のマスクをしている。・・・とてもおかしい。一人は普通の白ベースに赤のもので、もう一人は黒ベースに黄色のものをつけている。そんなことはどうでもいいが、いかにも怪しい人達だ。
（アイツらは監視の人間か？珍妙なマスクをしているが）
　クロードもクロードで、私の身体の中に霊を潜め、テレパシーのような他人に聞こえない声で、コミュニケーションを図る。
「さすがに見つかる・・・よね」
　私は静かに扉を閉めると、ベッド近くの丸椅子に腰かけた。
「どうにかして、逃げなきゃ」
（おいおい、忘れてないか？俺の目的を、剣を取り返すことを）
「でも・・・」
　迷いと共に後悔がじわじわと大きくなっていく。
　私はベッドに上半身をうずめると、涙が出始めた。
（泣くのか？確かに涙の元は血液だが、それでは俺は強くなれない）
「あなたにこの気持ちはわからない」
（・・・確かにわからないかもな。これまで殺した人間の血を飲んで、

その肉を食って生きてきた。食料の気持ちはわからない）
「・・・」
（だが、仲間が死んで、仲間と共に強者を倒し、人間の力が偉大だというのは魂がわかっている。・・・お前がそんな身体して心は強いということくらいはな）
　クロードはもう一度、私の身体から出ると、近くに置いてあった長さ1メートルくらいの鉄の棒を持とうとする。
　だが、霊体のクロードでは物を掴むなんてことはできず、何度も手が鉄の棒をすり抜けて空振る。
「あくまでも、お前のために戦うのではない。剣のためだ」
　私はそのときの心情を聞き、その棒を掴んだ。
「剣を奪う。それがあくまでも第一目標。ここからの脱出は二の次ってことで」
「ルナ・・・。戦闘だ、お前にその意志はあるか？」
「Ｙｅｓ！」
「そうじゃなきゃな」
　曲がり角にある保健室でカランカランと音が鳴る。それに気づき、近くにいたチームＺの研究員は恐る恐るそこに近づいた。
　マスクの先に見える眼は、目の前に実験台の女を見た。目の色を変えた女を。
　マスクが吹っ飛ぶほどの衝撃を頭にくらうと、研究員はその場に倒れてしまう。いくら女の力といえど、鉄の棒が顔面にフルスイングで当たったら重傷だろう。
「何をしている！」
　次に脇腹を砕くような痛みがその研究員を襲う。痛みを感じたときにはもう遅く、攻撃は終わっていた。
「が、じ、実験台が、逃げるぞ・・・誰、か・・・」
「逃げないよ、私は。私の持っていた剣はどこにある？言えば、この横で倒れている仲間のようにはしない」
　顔面全てが隠せるくらいの鶏の形をしたマスクの首から血が流れ出ている。どうやら中身はその衝撃のせいで助からない状態になっ

ているようだ。
「私は剣を返してもらうまでここから逃げない。君が死ぬまで人質として扱わせてもらう」
「ひ、ひぃぃぃぃ！」
「はいはい、終了でーす。」
私とこの研究員の中に入ってくるように、女の声が現れた。
その声の先には、ウサギのマスクを被った女が立っていた。マスクというよりはフードか。被ったとき、ウサミミがピョコンと立つものだ。
顔は口と鼻の部分を隠し、目だけが出ている。
「あ、アリス様！た、助けてくださいぃぃぃッ！」
研究員はゴキブリみたく、カサカサと動いてアリスと呼ばれた女の足元へ隠れる。
「あらあら、可哀想に・・・。そんな気持ち悪い姿になっちゃって」
「こ、この実験台に！」
「へぇ～。まぁ、あなたが悪いんでしょ？」
「ち、違います！僕はただ博士の言う通りに、」
研究員は途中で口を塞がれてしまう。
アリスの手は彼に向けて、チャックを閉めるような動作をした。そこに種はある。
「あなたがルナさんね。ようこそ、チームZの実験施設へ。そこの保健室に連れてきたのは私です。いい身体だったわ。胸は大きくなく、控えめな方で、あまり太ってないのか、ウエストや脚はスラッと」
「そんなことはいい！・・・何が言いたいの」
「実験は終了。剣は返すからどこにでもいってらっしゃーい。まぁ、元の世界には帰れないけどね」
アリスはどこからか、剣を取り出すと私に投げ渡した。
「ここは異世界の学校。あなたには、能力者としてこの世界で生きるしかないの。わかる？」
「そんなこといいから出口は？」
「話を聞かないな～。ここから出ていって強姦とかされても保証しな

いよ」
私にはどこからか湧き出る自信があった。
もしものときはクロードがいるし、この剣もある。
「出口はすぐそこ。ま、あなたがどうなろうと私には関係ないからいいけど、じゃーねー！」
アリスは私の横を通ると、曲がり角を曲がっていった。
私は剣を見て安心した。クロードの感情がそこにはあった。
「ここは・・・」
アリスの言われた通りに、すぐそこの扉を開けると、新しい廊下が見えた。
奥で何をしているのかわからないが、応援をする観客席のような盛り上がりが見えたのでそこに向かった。
彼らの見ていたものは、男と女がアリスの言っていた能力のようなもので戦っている。
一人は雷で、もう一人は・・・何だろう、全くわからない。
「いけ、雷帝！チームＡを倒せ！」
「アキネさん！負けないで！」
そんな応援を聞きながら、その後ろを足音を忍ばせて通る。
「おい。」
ほとんど気配を消していたはずなのに、私の肩を掴む人がいた。私は恐る恐る振り向く。
「何で・・・何でここにいるんだ・・・」
そこには海都が立っていた。

雷帝

雷帝とアキネの戦いが今始まろうとしている。
いつの間にか、周りには見物人が増え、盛り上がりを見せていた。
その中の九割はチームＡの人間で、ざっと見た感じ、５０人以上は絶対にいる。
「この量の観客・・・アキネ、何かやったのか？」
「どうせ、新聞部やら写真部やらが情報をバラまいたんじゃないの？私の能力では人間をこんな人数持ってくることはできないわ」
「四津野さん、アキネの能力って何ですか？」
「んー、敬語とその呼びはやめてくれよ、私は四津野でいい。それとその固ッ苦しい敬語もな」
「・・・じゃあ、四津野」
「うん、それでいい。」
「・・・」
能力者というのは変わり者が多いのか？
「アキネの能力って？」
「アキネの能力は空間を操る能力。特にぬるい攻撃はあの能力の前では無力、すぐにどこか知らないところにとばされてしまう。刀や拳みたいは物理攻撃してみろ～、そこだけ消されてしまうから」
「なるほど」
俺や四津野はまず無力だ。それにもしも、俺の予想が正しければ、最強の防御能力かもしれない。
（あの空間で能力を吸い込み、他の空間に移動させれば、まずあの娘に攻撃が当たることはない）
タマの言う通り、銃弾やキラの炎は空間に飲み込まれて、他の場所で着弾する。
あのシュウの能力だとどうなるのだろうか・・・
（おそらく、その部分だけ防がれ、他に散らばった衝撃波だけが攻撃をする。雨のなか傘を差すみたいに）
まぁ、本物を見たことないため、あくまでも予想だがそれか本当

だったらと考えると、相手にしたくない能力の一つにもあがるだろう。
「お、始まるぞ。お前は目見開いて良ーーーく見とけ！」
そう言い、四津野は俺を壁に押し付けるくらいに近づけさせた。
雷帝は大きく息を吸うと、一気に飛び出した。
「はぁッ！」
雷帝の拳から放たれた雷は地面を何度か跳ねると、アキネの首をかっ切るように跳躍する。
「何だ！あの雷！」
「あれは雷帝の雷技術の一つ、『兎』。雷が兎のように地面を跳ねるところから、この名が付いた」
「あの動きはこの技を見飽きている監督や、四津野でも予測不可能。反射神経が試される技術！」
四津野とキラが説明する。
だが、その説明を無視し、アキネは身体を後ろにそらしてその雷を避けた。雷は天井に直撃し、辺りに分散する。
「予測不可能ねぇ・・・情報量はチームＡの方が圧倒的なのかしらね。私がただ何の情報も知らず、何十歳も年上の大先輩に挑むとでも？」
「なら、次の攻撃も避けられるよなぁ？」
体勢を崩したアキネは次の雷帝の攻撃に驚いた。
普通は近づいてはいけないと考えるが、次の瞬間、雷帝は一気にアキネの懐に飛び込んだのだ。
そしてバチバチと電気が流れる音のなる拳をアキネの身体目掛けて撃ち貫いた。・・・ように見えた。
「驚いた。まさか、私に近づく馬鹿がいるなんて」
アキネはその拳を、自分の首から腹にかけて作った空間の裂け目を使い吸い込んだ。
アキネの能力をさらに詳しく言うと、アキネが手刀で空を切ることで空間の裂け目を作るという物だ。
「そして、空間は閉じる」
その空間は雷帝の拳を喰らって消えた。

「ぐぁぁぁぁぁぁッ！・・・・なーんちゃって」
拳が無くなったはずなのに、雷帝は苦しい顔をせず、観客とアキネに笑顔を見せた。
「今、アンタは俺の拳を消せたと思ったろ？残念、俺の身体はほとんどが電気の塊。少しくらい消えても、電気がある限り、回復させることが可能！」
「残念だわ。・・・情報（予想）通りで」
「そう言ってくれなきゃなァ、面白くねぇ」
雷帝は喰われた拳を作り直すと、真剣な顔に戻した。
雷帝の周りをバチバチと電撃が走り、壁や天井を伝って、アキネを囲んだ。
「じゃあ、これはどうだ？王女を捕まえる籠なんてな」
その電撃は少しずつだが、アキネを囲み、鳥籠のようなものを作っていた。
「アキネ。この世にはこの能力を創る神が三人いる。特に、俺やお前はその中でも、創成の神なんだろうな」
「！・・・・なんでそれを!?」
「さぁな～。まぁ、リアにでも聞けや」
「・・・・もういい、私は帰るわ。」
アキネはそう言うと、その鳥籠から能力を使って、いなくなってしまう。
「待てよ、そっからは逃がさねぇぜ」
雷帝の鳥籠の格子から、雷帝の腕が生え、アキネの腕と足を掴んだ。
「やめて！離して！」
「逃がすかよ！ちょっと秘密を握られたからって、逃げるのはチームAの副隊長としてどうなのかねぇ～」
「なら、その腕ごと空間に引っ張り込む！」
アキネは雷帝の腕を片方の腕でガッシリ掴む。
鳥籠はガタンと揺れ、雷帝の腕はす少しずつだが空間の中へ吸い込まれていた。
「ぐ、逃がすかよ！久しぶりの試合が不戦勝は気持ち悪いぜ！」

俺は戦闘が盛り上がっているなか、タマが戦闘中に言ったことが気になり、観客の集団の外に出た。
(叫び声が聞こえた)
急にそんなことを言い始めたら、さすがに気になるだろう。昔から悪い予感は必ず的中する。嫌な記憶を思い出しながら辺りを見た。
むこうから誰かがこっちに向かって歩ってくる。
(あれだ。いったい何者なんだ?)
「あれは、おい!」
目の前から歩って来た誰か。それは見たことある外見をしていた。
「なんで・・・なんでここにいるんだ」
「か、海都!?海都こそ、どうしてこんなところに!?」
そこにはルナが立っていた。夢かと思い、頬をつねるがそんなことはない。
ルナ、ルナがいるんだ。ただ、一つ気になることがあるだけで・・・。
「・・・で、その持っている剣は何だ?」
「あー、これ?これは~その・・・あの・・・」
ルナは剣を俺に見せる。すると、ルナの影から男がスゥーっと生えてくるみたいに現れた。
「クロード!」
「おいおいおい!何だよ、この男!」
「何で出てきたの?」
「いや、その男がこの剣のことに疑問を持ったようで、教えてやろうと」
その筋肉質の体に合わない黒いスーツを着た男は剣の鞘を抜き、刃を俺に見せた。
「この剣は血を吸うことでその能力を発揮する剣。名前はない」
男はルナの後ろに下がると、影の中に消えてしまった。いったい、なんだったんだ?
「はぁ・・・。で、本当にどうしてこんなところに?」
「えっと、海都を探してあの昆虫博物館に行ったら、奇妙な女に会って、なんやかんやあってここに。海都は?」

「俺はその博物館の地下を歩っていたら、・・・ここに着いた」
「何か隠してる？」
「いやいやいやいや！何も隠してない！」
「んー、あやしい。もしかして、その隣にいる女性に関係する？」
俺はルナの指差した方向を恐る恐る見た。
俺が一番ルナに見せたくない女がそこに立っていた。
「あ、私はタマ。今はこの海都君のペットをやってます」
「タマ・・・ペット・・・」
「お、おい！何言ってんだ、タマ！その・・・ルナ違うんだ！」
「サイテー・・・、知らない！」
「おい！・・・待ってくれ！」
ルナは遠くへと走っていってしまう。久しぶりに会えたことで得た喜びは、一気に絶望の中に捨てられてしまう。
（やっぱり、面白いな）
タマは嫌な笑いをすると、俺の前に出てきた。
「何が面白い」
（こういうことだよ、憑くことを許すということはね）
俺は未だ許してはいない。
確かにシュウとの戦闘で俺は契約した。確かにあのときは生半可な気持ちだった。今、この状況は変えることができれば・・・というそんな考えで。
「お前は、愛する人にサイテーって言われる気分わかるか？しかも今のは冗談口調じゃなかった」
（・・・私だっていたよ。最愛というか、とても愛する同種がね。とっくに神になって私の前から消えていったけど。少しだけ、昔話をしてもいいかな？）
「まずはルナを追いかけることが大切、お前のことは二番目だ」
「要するにいいってことだよね？」
俺はルナを追いかける傍らで、タマの昔話を聞くことにした。

乗り越えていく

まだ私がこの世界にいない頃、妖怪の世界では色々と戦争が起こっていた。
あらゆる妖怪を操る日本の大妖怪の一人が、私たちのところへ攻めてきて、何人もの仲間を殺していった。
始まったとき、戦争の始まる引き金になったものも曖昧で、私たちは混乱していた。
そんなときに、私の先輩である妖狐はその妖怪の群生に一匹で突っ込んでいったわ。それが私の愛した妖狐だった。
彼は私よりも幻術が得意で、人間以外にもその幻を見せることができた。普通、自分よりも上の力を持つ、神や大妖怪には幻を見せることはできない。だが、彼にはできた。それに妖術の大半を使いこなすことができ、妖狐の中でも最強と言われていた。
そして彼は私に「ヤツの首を持ってくる」と言って、数日経ったとき、彼は有言実行したわ。
でも、彼は暗殺された。噂では同種と聞いたけど、ほとんどわからない。
私は今でも彼を殺した人間を探している・・・。
・・・て、話だけど・・・どう？
「・・・すまない、納得はできないな。だが、お前にも人間らしいところがあるのはわかった」
（人間らしいって・・・私は妖狐だけど）
「あと、一つだけ。人間に頭を下げたくないと思うが、俺に頭を下げてくれ」
俺は一度立ち止まると、その勢いで俺の身体から現れたタマを振り向かせた。
（わかった。でも、一つだけ言うわ。あのとき、私は自分のことをペットって言った。でも勘違いしないで、私は海都のペットじゃない）
「わかってるよ」
タマは深々と頭を下げた。タマの長い髪が顔の前に出る。顔は見

えないが、反省しているのはわかった。
「ごめんなさい！」
　そのとき、なぜか俺はタマの頭を撫でた。
「むぅ・・・やっぱり私のことをペットだと・・・」
「いや、これが最後だ。よし、それじゃあルナを、」
　俺が頭から手を離し、タマの横を通りすぎたとき、目の前にはるルナの姿があった。
　頬を膨らませたルナはこちらに来ると、俺の頬を殴った。ビンタ、と言えばいいのか、それはとても強力なものだった。
「やっぱり・・・やっぱりその狐妖怪とはそんな関係なんだ。頭撫でてもらっちゃってさ」
「そ、その・・・」
「・・・私も」
「へ？」
「私も撫でてよ、頭。」
　思わず、俺は唖然としてしまう。どこかペットのようなかわいい部分もありながも、少し強いことを言うルナが自分からそんなことをい言うとは思ってもいなかった。
　前は少しでも頭を触ろうとすると、プイッとその手を避け、頭を触られることを嫌っていた。
　なのに、今はこの状況だ。
「撫でてくれたら許す」
　遠くでルナの影から現れた男がこっちを見ている。
「・・・わ、わかった」
　嫌がられていたことをする。ついにできると思うが、手は言うことを聞かない。
　何かここで撫でたら負けな気がする。・・・とか、思いながらもルナの頭を触った。
　すると、やっぱり嫌なのか、俺の顎目掛けて跳んできた。俺は顎に重たい一撃を喰らい、後ろに倒れた。
「これでおしまい。・・・行こ？」

「ぐぇ、やったな!」
それから数分間、ずっとじゃれていた。
それを見るタマやクロード。周りの眼など考えずに・・・。疲れ、飽きるまでずっと・・・
★
「今日からチームOに入った、赤井　ルナだ」
次の日の朝のホームルームで赤井　ルナの入団が発表された。俺はそれを監督に言っていたので、驚くことはなかったが、他は新人に驚き、そして喜んだ。
久しぶりに全員が揃ったホームルーム。
俺は喜ぶ四都野、キラ、雷帝の影で、静かにガッツポーズをするオルガを見た。
「よ、よろしくお願いします」
「俺はキラ、よろしく!」「私は四都野　!」「雷帝だ!」
順々に自己紹介が続くなか、オルガだけは違うことを言い出した。
「その剣は何だ?」
真面目な声のオルガと、「お前空気ぶち壊してんじゃねぇぞ!」と言いたそうな眼でオルガを見るキラと四都野。
そして沈黙のルナ。
「オルガ、その剣に見覚えがあるのか?」
そして沈黙を切り開く雷帝。二人の視線は雷帝の方へ向けられる。
「あぁ。だが、どこで見たかは覚えていない。恐らく武器を使う能力者で調べれば出るとは思うが・・・」
「まぁ、そんなことといいじゃねぇか!これでやっと、チームOとして戦場に出られるんだからな」
「・・・わかった。歓迎する」
オルガは目をつぶると、机の上に置かれた分厚い本を読み始めた。
ルナはオルガの視線から逃れることができ、安心をするが、
「ただし、少しでもその武器についてわかったことがあれば、すぐにでも尋問する」
「は、はい・・・」

すぐに釘を打たれてしまった。
ルナは俺の前の席に座ると、剣を机の脇に置いた。
（この子には私の姿が見えるんだよね？他の人間には見えないみたいだけど）
タマの姿は俺とルナ以外の人間には見えない。
ルナの隣に立っているクロードの姿も。
（おい、狐。お前はこの人間をどう思っている？）
（可愛い少年・・・て感じかな？そういう君はどうなんだ？こんな可愛い女をまさか、食いモンとでも思っているのかい？）
（馬鹿馬鹿しい。俺はルナのことを受け継ぐも者だと思っている。俺の目標、そして俺の意志を受け継ぐ者と）
（それはそれは、すまなかったね）
「柊、ちょっといいか？」
二つの霊が話しているのを見ていると、オルガが話しかけてきた。
やっぱりルナの剣が気になっているのか、近付いたとき、チラッとけ剣を見た。
「今日のメニューだが、新人のルナと共に雷帝と練習をしてくれ。雷帝が少しでも逃げたり、酒を飲み始めたら俺や監督に言ってくれ」
「了解。・・・で、場所はどこですか？」
「寮の近くに、能力者専用の公園がある。今日、あのトレーニングルームは少し修理中だからね」
話によると、昨日の雷帝とアキネの戦闘によって（ほとんど雷帝が原因）壁や天井の電気配線が壊れてしまったらしい。
「それでは、今日も頑張っていこう」
公園にて・・・
学校の寮から徒歩3分のところにある公園で、ここでは能力者が日々、外の空気を吸いながら鍛練している。
そして、
「ふあぁあ～～。ったく、あくびが出るぜ」
雷帝はあくびをしながら公園に現れた。
すでに準備体操を終えて、俺はタマの能力を発動した状態で、ルナ

は剣を構えて、雷帝が準備をするのを待っていた。
「お願いします。」
「お、いいね～、ルナちゃん」
「どこからでも、お願いします。訓練にならないんで」
雷帝は腕を組むと指示を出した。
「今日のメニューだが、俺の聞いたのはお前らの練習に付き合うことだ。どんな攻撃でもいいから、俺に攻撃してみろ」
格闘ゲームでよくあるチュートリアルのような指示。
正直、俺たちは自信を持っていた。
「「お願いします。」」
「おう！どっからでもかかってこい！」
雷帝は腕組みをやめると、俺たちの攻撃を防いだ。右から来た俺の拳、左から来たルナの剣を手のひらでハエを払うように防ぐと、次の攻撃を避け、その次の攻撃で、俺たちの利き腕を掴んだ。
「なかなかの攻撃だ。だが、やっぱりオルガとキラには負けるな。アイツらは仲悪くても、戦闘ではシンクロして攻撃してくんだよ」
そう言いながらも、俺の左腕の攻撃を避けた。もう、防ぎ手がない。そんな状態も完全に避ける。
「この人、強い」
「さぁ、始まったばかりだぜ。シンクロしてこいよ。お互いの心を合わせて！」
シンクロと言うが、何をすればいいのかわからない。今はここだ！と思う場所に攻撃をするだけ。他はどうしようもない。
その考えは素人の俺らだから思うことなのか？
「お前らの関係は聞かなくてもわかっているぜ。さぁ、まだ練習は始まったばっかりだぜ！」
それから一時間、俺たちは攻撃を繰り返したが、雷帝に攻撃が届くことはなかった。
そして、雷帝は酒を飲み始めてしまった。
★
その頃のオルガは監督から渡された紙を見て、前髪をかきあげ、た

め息をついていた。
「始まるのか・・・」
オルガの持つ紙には、屋外授業と書かれていた。

訓練そして実戦

練習が終わり、雷帝は昼休みだと言って公園を去ってしまった。
俺はルナに手を引っ張ってもらい、何とか起き上がった。途中でルナは諦めて攻撃をやめたが、俺は雷帝が終了と言うまで攻撃し続けた。
雷帝のため息は精神的に俺の心を傷つけ、雷帝の最後の拳は身体的に傷つけた。
「あー、終了だ。もう昼休みだ、今日は終わりだ、終わり！」
雷帝の帰っていく姿は俺たちを見て、呆れているようにしか見えなかった。
「あれだけ時間があったのに、」
「俺たちは一度も攻撃を当てられなかった・・・」
それを思い、自分が情けなく思えたのは、俺だけではない。ルナもそうだろう・・・。
「おい！雷帝はどこにいった？」
疲れきって座り込んだところにオルガがやってきた。
オルガはその一瞬で何があったのか察すると、俺の膝の上に一枚の紙をそっと置いた。
「これって・・・？」
「屋外授業だ。お前達が来て早々、これが行われるとは思わなかったよ・・・
屋外授業。
お前達を強くするための物だ。ある島にいって訓練し、新しい力を修得することが目的だ。
もちろん、今の能力をさらに高めるのも必須だがな。
これが行われることで、能力者としての覚悟や努力を見て、監督は成績をつける。そして、次の戦闘メンバーを決めるデータにもなる。
しかし毎回のことだが、これによって脱落者も出る。
そして今回はまたあることもやってもらう」
「あること・・・ですか？」

「その島にいる能力者を仲間にすることだ」
「仲間にするって・・・まるでＲＰＧゲームみたいですね」
「ＲＰ・・・何だ？それは」
「・・・続けてください」
「続けてくださいと言ってもな。とりあえず、その資料を見ておいてくれ。一週間後だからな。あと、日直頼むぞ」
　オルガはそう言い、雷帝を探しにいった。
　やることが増える・・・それは疲労の原因にもなるが、成長の一歩でもある。なんて綺麗事は捨てたい気分だ。
　オルガは帰るとき、そんなことを俺たちに言って帰った。
「脱落者か・・・。」
（自信がないのかい？海都君）
「・・・その呼び方はやめてくれ、海都でいい」
（呼び捨てよりも君付けの方が可愛くないかい？）
「その歳で可愛いとか考えるなよ。前に女を捨てたとかまで言ってなかったか？」
（・・・ひどいことを言うな。まぁ、捨ててるのは本当だがな）
「それなのにそんな可愛げな着物を着てるのか？」
（・・・むぅ）
　帰りの日直の仕事をしながらのタマとの会話。部屋に帰るとタマはどうもムスッとした顔でいるので話してこないが、こういった空間だとタマもノリノリで話しかけてくる。
　夕日がさす校舎。唯一、教室を照らし、手元を明るくしてくれる。まぁ、そんな小さなことをやってるわけではないが。ただあまり使わない黒板を黒板消しで拭き、次の日直の名前を書く。それだけに時間を費やす。いわば、『無駄に有意義な時間』という矛盾だらけの時間だ。
（失礼だねぇ、君も）
「君もって？」
（あ、あぁ！それは、忘れてくれ。君に得な話じゃないからな）
　たまに引っ掛かることを言うが、そういうときは大抵、「忘れてく

れ」と言う。
「君、さっきから誰と話しているんだい？」
その声に背筋が凍る。俺とタマ以外誰もいないはずの教室を響くその高めの声は、俺とタマを凍らせた。
その声の方向、後ろの黒板に近いところにいるそれは、掃除用具入れの横に設置された棚の上に座っていた。
１５０ｃｍくらいの身長の小柄な男。・・・小学生か？
「何か失礼なことを考えてるな？・・・俺はクロサク、このチームＯに君よりも先に入った一年だ！」
クロサクと名乗る男は、棚から降りてこちらにむかってくると、片手に雷帝の雷に似た球体の何かを俺の方へ向けた。
「一つ、俺と交えようぜ。能力者なら、逃げねぇよな？」
エネルギー弾。俺の頭に流れ込んできたゲーム知識はその何かをそう名付けた。
（どうする？海都。逃げるわけないよね？）
「売られた喧嘩は買うのが男だ・・・よな？」
「き、聞くなよ！・・・まぁいい、場所は寮近くの公園でいいよなぁ？」
「いいぜ、夜に待ち合わせだ」
場所は変わって日の沈んだ夜の公園。
街灯がポツポツと光り、月明かりが公園を不気味に照らす。
そんななか、クロサクの持つエネルギー弾はバチバチと電気を纏って光を放っていた。
「さぁ、始めようぜ。ルールは先に背中をつけた方の負けだ。まぁ、先に命の灯火が消えたら終了だがなぁ」
「面白いルールだねぇ。アンタ、素質あるよ」
「おい、タマ！」
クロードに会ってから、夜になるとどうしてかタマが普通に体外に出てきてしまうようになった。そしてルナによると、タマの姿は他の人間にも見えているらしい。
「ほぉ、そいつが教室で話していた相手か。そして、そいつがお前の能力の源だというのもわかった！」

クロサクはタマを指差す。
タマはニヤリと笑い、クロサクを指差す。
「だからどうした、少年！ほら、かかってこいよ！私はいつでもやる気だぜ！」
「タマ・・・戦うのは俺だ。力だけ貸してくれ」
「・・・はいはい、久しぶりに熱くなったんでね」
タマは俺の後ろに下がって、観客にでもなるのか、どこからか出した炭酸飲料の缶を開けた。酒じゃないだけ安心した。
「それじゃあ・・・いくぞ！」
クロサクはいきなり、俺にむかって走り出した。
あれはゲームでいうところのダッシュ攻撃。クロサクは手のひらで溜めたエネルギーを俺にぶつけるように飛び込んだ。
「だが、そんなのを避けるのは容易い！」
俺は攻撃をヒラリと避け、少しだけ離れた。大半のダッシュ攻撃は避けた後に隙ができるが、ゲームのようにうまくいかないのは知っている。なら・・・
手数を増やすのはどうだろう。
「うぉッ!?こいつ！増えやがった！」
クロサクにたくさんの俺を見せる幻覚を見せ、さらに大きな隙ができた瞬間に攻撃する。まぁ、こういう能力ならすぐに溜めたエネルギーを範囲攻撃みたく分散させて俺に攻撃してくるが、こいつの頭的にどうか。
「なら、こっちも数だ！」
作戦は見事成功。クロサクは幻覚で作られた俺を全て攻撃してきた。もちろん、その攻撃は幻覚を攻撃するので、俺のところには来ないはずだ。
そして、
「見事背中をとったぜ！」
俺はクロサクの背後にまわった。
そして、あとは中学の頃、体育の授業で習った柔道の技で、相手を倒した。・・・と思ったが、

「小さな体だからこその戦い方だ！」
クロサクは俺の掴んだ手を支点にして逆上がりの要領で、回転し、俺の顔を蹴り下ろした。
「この野郎ッ！」
おもわず、俺は腕を離してしまう。この状態では幻覚を見せることは不可能だ。
（まだ大丈夫でしょ？このチビッ子、なかなかの身体能力を持ってるわ。海都とは反対にね）
「悪かったな」
「おぉ？謝るのかァ？」
「お前にじゃねぇ！ッたく・・・こいつ」
（どうする？頭が使えない分、身体能力でカバーする能力者の対処法は。）
「もちろん、俺もゴリ押しだ」
（頭を使う者が、頭を使わないと残念なものになりやすい・・・これまでの経験談ね）
「わかってる！」
一度幻覚をかけることに成功したヤツほど次にかけるのは容易いものだ。
そのタマの言葉を思い出し、俺はもう一度自分が何人にも見える幻覚を見せた。
クロサクもアホみたいにそれに同じ事をする。
幻覚といえど形あるもの。もちろん、そのエネルギー弾の衝撃に爆発する。
「待ってました！俺は見つけちまったぜ！その幻覚の弱点をな！」
俺はその言葉に思わず、攻撃の手を緩めてしまう。
「幻覚に影はない！」
「ッ！」
俺は自分の出した幻覚の真下を見る。辺りは暗闇に近い。エネルギー弾の爆発によって出た光は俺の幻覚を照らすが影は作らない。だが、俺の下には影があった。

「そして！本物は、その影を見るために、他の幻覚とは違う行動を取る！この勝負、もらったァ！」
俺は次の攻撃をその場で防ごうとした瞬間、何かが俺の目の前に現れたのがわかった。それは大きな盾を何もない場所から取りだし、クロサクの攻撃を受け止めた。
「もう、終わりだ。早く風呂はいって寝ろ。」
ようやく、周りの街灯に照らされ顔が見える。そこに立っているのはオルガだった。
「クロサク、柊、明日は今日のことをレポートにして出してもらう。いいな？」
「はい・・・」
勝負はオルガによる強制終了で幕を閉じた。
そして次の日、俺たちは朝からレポートという名の反省文を書かされた。
俺はすぐに終わったが、クロサクはそれに1日かかったらしい・・・。

蛍ノ島へ

船の上。

ギリギリ全員が乗ることのできる船に俺は乗っていた。

「この船はこの学校の研究員が作り上げた船で、動力は私たちが持つ能力値で動いている。まぁ、今は私だけの能力値でだけどね」

この船の行き先は屋外授業が行われる島、蛍ノ島。

そこは今、ある能力者によって一年中ずっと雪が降り積もっているらしい。しかも、大雪だという。

前までは夏になると、蛍が飛び回る綺麗な島だったが、こうなると蛍も飛ぶことができないようだ。

「しかしよォ。日本の南に存在するんだよな。なのに、お前ら、その情報すら知らなかったのか？」

「私は知ってましたよ。前にニュースで見ましたから」

「・・・」

俺はほとんどニュースを見ない、新聞を読まない。そんな現代っ子のような男だった。こっちに来ても、部屋にあるテレビはバラエティー番組と、深夜帯にやるアニメくらい。

「まぁ、普通男なんてなぁ！わかるぞ、柊。」

キラはそう言って俺の肩を一発、二発と強く叩いた。

「ほら、見えてきた！あれが蛍ノ島よ！」

俺たちは目の前に蛍ノ島を見た。

雪が降り、地面は白くなり、木や建物にも大量に雪が降り積もった島。ここが、今回の”戦場”になる。

「こ、ここが蛍ノ島か！・・・寒い！」

南の島とだけ聞いていたため、タンクトップにジーパンのキラは寒さで凍える。それをアホかと思いながら、笑いをこらえるオルガと四津野とリア監督。

「おいおい・・・寒いヤツは船から上着を持ってこい。今回のことを予想して、全員分のオーバージャケットを持ってきたから」

「さすが、オルガ。さすオル！」

「ただし、特訓のときは脱いでもらう」
「そりゃあないぜ、オルガ・・・」
オルガと雷帝以外はオーバージャケットを着用し、雪が降り積もる世界に足を踏み入れた。
ほとんど前の見えない世界で、俺たちは宿を探す。
リアの話によると、船を降りて少し歩いたところに、今後泊まる宿があるらしいが。
「おいおい、こんなところに人がいるのか?さっきから雪に埋もれた家しか見かけないのだが・・・。」
「おかしいな。前に来たときは、こんな積もってなかったような」
「前っていつですか?」
「去年?」
「ずいぶん前ですね・・・」
俺らの行く先に人影が見えたのは船から降りておよそ15分後。人影が見えるとともに、リアが先行して話しかける。
「すみません、ここらへんに宿があると思うのですが」
「・・・」
その人は明後日の方向を向いたまま、リアの顔を見ることはない。
「あの、もしもし」
リアはその人の顔の前で手を振る。そのとき、リアの手がそいつの鼻に当たる。
「・・・お、おい。これってよ・・・死体じゃねぇか!?しかも凍りついている・・・うぉ!?粉々になりやがった!」
鼻は粉々になって、雪と混ざりあう。そして死体は一気に粉雪になって雪のなかに埋まった。
「これが・・・ここにいる能力者の力なのか・・・」
「体だけじゃない、服やスマホまで粉々だ!」
その男が凍死したときに握っていたと思われる携帯は、オルガが掴んだ瞬間、角から粉々になり、雪になって消えた。
「柊、これはちとマズイかもなぁ・・・」
キラは俺の肩に手を置く。その手は熱くなっていた。

「でも、それが」
「燃えるんだよな。キラ」
「お？わかるか～四津野」
「もう二年も面倒見てるからね・・・柊、ルナ、クロサク。お前たち、キラを見習わなくていいぞ」
「おい！・・・まぁ、俺が何人も増えるのは嫌だがな」
　キラがそんなことを言って笑っているなか、雷帝は島の中心にある山をずっと見ていた。船を降りたときからずっとそうだ。雷帝はずっと山の方を見ている。
「どうしたんだ？さっきから山ばっか見て。心ここにあらずって感じだけど」
　それに気づいた四津野は雷帝の背中を叩く。
「いや、あの山のあの部分になにか見えないか？何か、旗のようなものが見えるのだが」
　山はこちら以上に吹雪いているため、俺たちには全く見えない。雷帝と四津野だけは例外だが・・・
「その旗はどんな色とか、模様とかわかるか？」
「そこまではわからない。わかるのはただ旗がある程度だな」
　雷帝はなぜか、電気の槍を作るとその方向へと放つ。槍は吹雪のなかを進み、旗にいくまでに何かによって妨害される。一瞬だが、俺たちにも見えるほどのバリアが吹雪の中で光った。
「・・・やっかいなことになったな、リア」
「まさか国が来てるなんてね」
「国とは？」
「国家能力者研究団体ね。やっぱりこの島の能力者のことが気になってるみたい・・・」
　オルガはそれを聞くと、俺らの前に出た。
「全員、彼らだと思うものに会ったら、自分達のことを絶対に話すな。彼らには一言、『迷った』と言うように」
「戦うことになったら？」
　キラが嫌なことを言う。彼らと戦うということは名前的に国や政

府と戦うことになる、ということだ。
「もしも戦うことになったら、情報を知られないようにしろ。そして、戦うことがないように行動しろ」
「へいへい。」
キラは返事をして、嫌な笑みを浮かべた。何か悪事を考えているような、悪魔のような顔を。
少し歩くと、港の近くよりも雪が深く積もる場所の先に、少し大きい建物を見つけた。看板はほとんど見えないが、雷帝の電撃によって雪を溶かしたことで『ホテル』という文字が雷帝には見えたようだ。
その情報を聞き、俺たちは雪の中を歩きそこへと向かうことにした。
「・・・待て、何か聞こえないか?」
オルガが突然奇妙なことを言い出す。
「ここに国の人間が来てんだろ?なら、きっとその足音じゃねぇか?」
キラがそんなことを言うが、確かに何かがこっちに向かってくる足音がする。しかも四方八方からだ。
「急げ!早くあそこに入るんだ!」
オルガの言葉に全員が急ぎだす。
木の影や雪の中から現れたそれは人間を型どった雪像だった。
「これもこの島の能力者の能力なのか!?」
「さすがに能力でこれほどのものを、しかもこの数作れるなんてことはありえない。もしも、そうだとしたら相当な能力値を持つことになるぞ!できるとしたら、ランクSの殿堂入り能力者くらいだ!」
突然だが、この能力者専用の学校にはランクが存在する。E判定からしだいにD、C、B、Aと上がる。戦績や成績によっては最高ランクであるSになる。
そしてランクSの中でもさらに高成績、高戦績を持っているものは殿堂入りというランクになる。
殿堂入りはほとんどいない。
「そんなこと今はどうでもいい!ドアを開けて、早く入れ!」
ホテルに先に到着したキラはその扉を蹴り開けようとするが、ホテ

ルの扉の表面を氷が覆っているためか普通以上の強度をみせた。
「なんだ、この頑丈な扉はッ!?クソがッ!」
「なら、データ!」
リア監督が扉に手をかざす。すると、扉はデータファイルなって、その強固な氷をデータにした。
「いらないデータは捨てるまで!」
そして、そのデータ化した氷をそこらへんに投げ捨てた。
「みんな、入って!」
「なんスか!その能力!かっけぇ!」
「クロサク!今は入ることが優先だ」
クロサクは雷帝に腕を掴まれ、中へと飛び込む。それに続いて、全員が中へ入った。
雪像は扉に激突することで崩れていく。
「あまり、この雪像自身の強度は無いみたいね。みんな、大丈夫?」
「確認しました。全員、大丈夫みたいです」
「よかった。・・・とりあえず、ここは私の能力で封鎖しておくわ。だから、今のうちにこのホテルを探索して食料や暖をとれるものを見つけてきて」
リア監督は入った来たときから、扉に手を当てている。
扉から電子回路のようなものが、壁や床を這ってこのホテル内全てを侵食しているようだ。
「柊君も、私の能力が気になるのはわかる。でも、今は私の言うことを聞いて」
「は、はい。」
俺はルナやクロサクの後を追って、ホテルの奥へと入っていった。
振り返ったとき、扉の前にいるリア監督が汗をかいているのが俺にはわかった。

作戦と忍び寄る影

ホテル内ではたくさんの物が見つかった。
寒さをしのぐための毛布やこういうときのための非常食。さらには、ラジオや懐中電灯などの便利なものがあった。
しかし、ストーブは全て燃料が必要で、中は全て消えていた。また、電気が通っていないのか、冷蔵庫の中身は腐り、照明はつかないみたいだ。
「監督、いろんな物が見つかった。とりあえず、一日はなんとかなりそうだ」
「キラ、ありがと。私も・・・今、やっと・・・セキュリティが、完成、した・・・わ」
リア監督はその場に倒れる。すぐにオルガが監督の額に手を当てる。
顔が赤く、息が荒い・・・。
「すごい熱だ。・・・船といい、ここのセキュリティといい、少し能力を使いすぎた。リリーなんとかなるか?」
「はい!風邪なら数分もあれば治せますが、疲労となると、ベッドに運んだ方がいいと思います。ここまでの症状だと、数時間はかかります」
「そうか・・・。雷帝、監督を隣の部屋に運んでくれ!」
「わかったぜ」
雷帝は監督を持ち上げると、クロサクとリリーを連れて隣の部屋に移動する。
「柊とルナと四津野は三、四階から外の状況を見てくれ。敵に入れなさそうな窓なら割っていい」
「了解だ。行くぞ、二人とも」
四津野の行動は予想通りだった。四津野は何の躊躇いもなく窓を割って外を見る。四階からでも景色は相も変わらずの雪景色で、真っ白な空間が広がっていた。
俺たちを追いかけてきた雪像はこのホテルの前に包囲するように

立っていた。
「四津野さん、そろそろ閉めてください！」
「ルナ。閉めてって言ってもあれはどうしようもない。だって割れてんだぜ」
「あー、どうするか。とりあえず、ダンボールでも貼る？そこに置いてあるやつでも広げてさ」
　四津野はダンボールを刀で切り、ガムテープを探してくると割れた部分に貼り付けた。
　四津野は満足して下の階に報告するために降りていく。
「敵は前に列を作って待機している。いつでも襲いかかってきそうだ」
「監督によると、セキュリティの方はちょっとした爆撃なら無効化できるくらいの力はあるみたいだ。雪像の攻撃なら、まず壊されることはないらしい。そして内側からの攻撃には全くもって効果無しだ」
「それはわかってる。なぜなら、私が窓を割ったからな」
「冗談で言ったのだが・・・。まぁ、いい。みんなこれから作戦会議をする。奥の部屋に来てくれ」
　オルガはそう言い、奥の部屋に入っていく。
　奥の部屋は食堂となっており、何個かの円卓があり、その周りに何個かのイスが等間隔で置かれていた。
　荒らされたような痕跡はないが、円卓とイスにはほこりがかぶっていた。
「今、考えるべきなのは三つのグループ分けのことだ。一つ目はここで監督やリリーを守るグループ。二つ目はこの島にいる能力者を探すグループ。三つ目は二つ目のグループのためにおとりになるグループだ」
　二つ目のグループの案が出たところぐらいから四津野が手を挙げている。
「私と柊とルナは能力者を探しに行ってもいいかな？」
　俺とルナを指名する。何か嫌な予感はしていたが、予感は的中してしまった。

「・・・正直、他のグループにしたいが頼んだ。おとりはどうする？」
「俺はここに残っていいか？」
　意外なことに雷帝がそんなことを言い出す。
「正直、おとりが失敗したらここに大量の敵が攻め込んでくる。それを対処できるのは俺くらいだろ？オルガも指揮係としてここに残るべきだ」
「・・・ということは残りはおとりということで」
「おいおい、俺らには権限無しかよ！俺も行きたいぜ、能力者探しによ！」
「全くッスよ！」
「・・・わかった。二人は雪像を片付けしだい、四津野達と合流して探してくれ。おとりじゃなくて雪像の排除ということで頼む」
「それなら面白ぇな。なぁ、クロサク。」
「そうスね。それなら賛成ッス」
「全員には小型通信機を渡す。何かあったら連絡してきてくれ」
　戦闘用小型通信機。
　普段は戦闘に使われるもの。大きさはワイヤレスのイヤホンと同じと考えていいだろう。
　この通信機の中に、位置情報を所得するためのＧＰＳと連絡用のマイクとイヤホンが搭載されている。
　チームＡやＺといった研究者の多いチームはさらに小型化されているが、チームＯには研究者が一人もいないため、全チームに渡されるものしかない。
　全員はそれをつけると、各々の行動を開始した。
「ひゃ～～～。探すっていったけどね～こんな寒いとはねぇ」
　この蛍ノ島中心に存在する山。ここに能力者がいるらしい。噂によると、洞窟のなかにいるとか。
　キラとクロサクはホテルのドアを蹴破り、ホテル前の雪像を退治している。今さっきから爆発音がここら一帯を轟かせている。
「それにしても、寒いねぇ。こんなところにその能力者はいるのかい？」

「リア監督によるとですが」
監督から渡された紙にはその能力者の詳細と、リアの能力によって嵌め込まれたナビゲートシステムが記載されていた。その能力者の能力値と思われるものに反応してこのナビは方向を差しているようだ。
（海都、後ろから何かがついてきているわ）
「何!?」
俺はタマにそう言われて、後ろを振り返る。だが、そこには誰もいなく、足尾ともなかった。
（本当にいたんだ。その木の影に）
「・・・あの二人が倒し損ねたんじゃないか?」
（いや、人間よ。生命を感じたわ）
四津野とルナは、そのナビを頼りにどんどん上へ登っていく。俺とタマは足を止め、その木の影を睨み付けるようにジッと見る。
「もしも、人間だとしたら・・・いったい誰なんだ?」
作戦通り決行しているとするならば、キラとクロサクが俺たちを追ってきているのか?
だが、数十体のあの雪像を相手にそんな数分で終わるわけがない。
でも、この雪山に他の人間が・・・まさか!
（そう、そのまさかかもしれないわ）
「国・・・」
「柊、何をボーッとしてるんだ? 早く行くぞー」
後ろで四津野の声が聞こえる。だが、この気配に気づいた俺がもしも、振り返ったら攻撃が始まるかもしれない。
「二人は先に行って下さい。俺は今、その木の影にいる敵を倒してから向かいますので」
「・・・それはダメ。」
「なぜですか!」
「オルガが言ってたろ?戦うことが無いように行動しろ、てね」
四津野はそう言い、俺のまたの間から顔を出すと、そのまま俺を肩車した。

「ちょ、四津野!?こ、これって!?」
「いいから、ほら行くよーッ！」
俺はその姿を見るルナを見て顔が熱くなる。十年ぶりだ、こんなことをされるのは。しかも、俺と三つ年が離れた女にこんなことをされるのは、人生で二度とないだろう。
「四津野、わかった！わかったから、下ろしてくれ！はずい！はずいっての！」
「追っ手が見失うまでこれで逃げるよ！」
「ひぇぇ～～」
★
木の影から現れた男。手には銃、腰には刀を装備して、三人が雪山を登っていくのを、眼鏡の奥からじっと見ている。
男は白衣の上に薄地のコートを羽織っている。
あの三人を見失った。
境界線を通ったものはあの三人。他は通っていない。
何としても、三人を捕まえなくてはならない。この先にいる能力者のことを知ってはならないのだ。
「おさよ、奴等を捕まえろ」
「了解です、マスター」
対能力者戦闘用アンドロイド、Ｆ―０３４を向かわせた。
そう簡単には破壊されて帰ってこないだろう。
「この先にいる魔物に会ってはいけない。一筋縄ではいかない能力者だ。『氷には炎』なんて甘い考えでは勝てないくらいのＳＳ級能力者、榊原　鈴華に・・・」
男はアンドロイドと共に柊、四津野、ルナを追う。
三人の排除ではなく、三人を男の言う能力者に会わせないために。

雪のなかの炎

四津野に肩車をされてから数分後、後ろから来ていた謎の影がいなくなっていることに俺は気づいた。
雪山の林の中にひっそりと建つ山小屋。そこで俺たちは休憩していた。とくに四津野は俺を肩車していたのだから、疲れているに違いない。
その山小屋はここ最近空き家になったのか、暖炉がなんとか使える状態だった。薪も中に完備されている。火も近くにあるマッチで十分だろう。
「それにしても、ここらへんは雪像の姿を見ないね」
「たぶんですけど、ここらへんに人は住んでなかったんじゃないですか？」
「？・・・どういうことだ？」
「たぶん雪像は元々、人間だったんじゃないですか？ここの能力者によって姿を変えられたとか」
「まさか～、ファンタジーやメルヘンの世界じゃないんだよ」
「春の南の島がこんな豪雪で雪が積もっていることじたい、非現実的ですがね・・・。それにルナの言ってることは一理あるかもな」
「じゃあ、ここの住人も雪像に？」
「たぶん・・・」
ルナはクロードを呼び出す。普段、ルナの中で眠っているクロードはルナの声に反応して起床し、ルナから出てくる。
（どうした？ルナ。）
俺にはルナとクロードの会話が聞こえる。今もその仕組みはなぜかわからない。
ルナがクロードと会話し始めたことで、四津野はなぜか寝始めた。雪山で寝るのはダメだと思うが、ここなら大丈夫だと・・・
「侵入者、直ちに排除します・・・」
安心したとき、暖炉の火ではない『炎』が木造の山小屋に火をつけた。

そして炎の中から白衣姿の女が現れた。
「侵入者、そこで止まれ」
「なんだいったい・・・。うぉッ!?これは火事か!?」
さすがの暑さと炎に四津野は目を覚ます。
女は右手を四津野の方へ向ける。
「侵入者、排除・・・」
「四津野!危ない!」
「へ?」
女の右腕は形を変える。手のひらに穴が開き、腕からエンジン音が聞こえ始める。
「発射」
次の瞬間、その右腕から炎の弾が放たれた。
四津野はその炎を刀で防ごうとするが、炎は刀に触れると共に爆炎と化した。
「あっちぃじゃねぇか!」
四津野はその爆炎によって、壁に叩きつけられた。
「排除失敗、次に移ります」
女はさらに炎の弾を放つ。それは燃えていく山小屋の壁に触れて爆発する。
「ヤバイ!く、崩れるぞ!」
「この山小屋ごと破壊する」
俺は倒れている四津野を抱きかかえると、ルナと共に山小屋の外へと出る。
山小屋の炎は一瞬で、全てを燃やしきった。
「次はあなた達のバンだ」
「海都、アンタが言ってたのはこれか?」
「たぶん、これだ・・・でもどうして俺たちを」
「そりゃあれだ、研究者が研究の邪魔とでも思ったんだろ?だからこんな物騒なモン送ったんだよ」
物騒なモン・・・これってロボットか?まさかこんな近未来な兵器に会えるとは思わなかった。

（感動してる場合かい？コイツは私たちを排除する気満々だよ。それにこの火力、なかなかだね）
確かにあの火の弾、さしずめ火炎弾と言えばいいか。この火炎弾は確かに当たったらまずいことになる。服が燃えるとかならまだしも、身体まで燃え尽きてしまいそうだ。
「Ｂｕｒｎｉｎｇ　ｉｎ　ｈｅｌｌ・・・相手は驚いています。」
「いや、その逆だ！」
四津野は燃え上がる炎の中から、ロボットに攻撃する。
その衝撃波で一瞬だが、四津野の姿が確認できた。
持っていた刀をロボットに振り下ろし、ロボットはその刀を左手で掴む。
「アンタのその攻撃、昂らせてもらったよ。私の戦意をね！」
刀を支店にして、四津野はロボットの左頬を蹴り飛ばす。
人間のような反応を見せたロボットはその右手からまた火炎弾を放った。四津野は一度刀から手を離し、ロボットの背中に回ってその攻撃を避ける。
「アンタ、ロボットを越えてるね」
「アンドロイドと言ってください。そんな弱々しいものではないので」
四津野はアンドロイドが刀を離したのを確認すると、その刀を拾ってこちらへ走ってくる。
良く見ると、四津野の右腕の一部が火傷していた。
「さすがに、ロボット相手は無理か・・二人とも逃げるよ！いったん、山を下ろう」
「それが一番だ・・・能力者」
俺はあのアンドロイドが現れた頃から、違和感を感じていた。雪に残る足跡の大きさが違う、あれは男の物だと。
「国家能力者研究団体研究者兼異常気象研究家のホムラだ。君たちは関わってはいけない」
「やはり他にいたか」
「・・・わかっていたか。授業で習ったよな？国に関わってはいけない

と」
男は懐から銃を取り出す。現実でこのシーンを見るとは思わなかった。
（そんなこと言ってる場合か！避けろ！）
俺はタマの声を聞き、すぐにその場から離れた。
今さっきまで俺の立っていた場所を銃弾が通る。やっと俺のなかに恐怖心が生まれた。
「銃弾といっても銃弾じゃない。麻酔銃って知ってるか？それの強めのやつ。前に戦ったものが、能力でこの銃弾を溶かしたんだ。じゃあ俺たちはこの銃弾をどうすればいいか考えた。その結果、能力を使わせる前に眠らせてしまえばいい、ということを考えた」
四津野はアンドロイドと戦っている。ルナは通信機を使い、情報を伝えている。そして俺は目の前のこいつと戦わなければならない。
「・・・やっぱり長々と説明するのは苦手だな。真面目にしてたが、どうも俺には似合わない」
ホムラは銃口をこちらに向けた。
「説明はありがたいが、その考えに間違いがある。なら、こっちはその銃弾が当たる前に、アンタを倒せばいいってことだ」
「ほぉ、面白いこと言うじゃないか」
次の銃弾が放たれる。俺はその場から少し右ななめ前に踏み込む。
「数打ちゃ当たるってこと知ってるか？」
撃たれた。だが、それはヤツに見せている幻覚。
ホムラには俺が撃たれた映像が見えているはずなのに、ホムラは次の銃弾を放つ。
あの眼鏡、幻覚を無効化できるのか？この幻覚は視覚に直接映像を送ってるわけではないのか？
（あくまでも私の幻覚は『相手に幻覚を見せる』程度。言わば、目の前にその映像を見せているだけだ。物体として作るのは幻覚とは言わない。）
あとでその話は聞いて勉強しよう。
（あとがあればね？）

・・・あとがあるに決まってるはずだ。
「次の銃弾が来る！」
俺はその瞬間、ある『体験』をした。
その瞬間をフレーム単位で見ているようなゆっくりとした映像だ。
逆に俺が幻覚でも見ているのか？
だが、その幻覚があったから俺はその銃弾を避けることができた。
「その身体能力、あそこにいる女とは比べてはいけないが、すごいね。研究材料として欲しいくらいだ」
「されてたまるかぁッ！」
俺はやっとホムラに俺の拳が当たるところまで近づいた。
すると、ホムラは銃を俺に向かって投げた。
俺は思わず、避けた後のそれを目で追ってしまう。
「さよッ！銃を回収しろ！」
「了解です。マスター」
ホムラは投げた銃を交戦中のアンドロイドに拾わせに行かせ、自分は腰につけた刀を抜き、その場でかまえた。
「おいおい、どこ行くんだ！」
四津野はアンドロイドの腕を掴む。
アンドロイドの腕は肩から千切れるが、それでも銃を拾い、コートの中にしまった。
「回収しました。」
「撤収だ。・・・戻るぞ」
ホムラはアンドロイドが銃を回収したのを確認すると刀を鞘に納めた。
「了解です。マスター」
俺は背中を向けたホムラに攻撃しようとするが、アンドロイドの拳が俺を横から妨害してきた。
「おい！どこに行くつもりだ！まだ、戦闘は」
「習ってないのか？国に関わってはいけないと・・・」
ホムラのその言葉には優しさが見えた。
さっきまでの説明口調ではなく、ただただ注意をする、そんな言葉

だった。
「失礼しました。」
アンドロイドは座ったままの俺を引っ張って起こすと、一礼してホムラの後を追った。
俺たちは二人を追うことはなかった。
ただ森の中に消えていく姿を俺は見ているだけだった。

「こっちに来てる、三人・・・」

氷の能力者

あの山小屋から数分後、ようやくこの山に入れると思われる洞窟の入り口を見つけた。
「情報によると、この中にいるらしい。ルナ、オルガとの連絡は？」
「それがここまで来ると、全然反応しないみたいです。圏外なのかわかりませんが、さっきからノイズしか聞こえません」
「そうか・・・。柊、洞窟のなかは？」
「入り口から見た感じ、というより見えん！」
一寸先は闇。その言葉を突きつけるような闇がその先にある。
こんな闇のなかに、いるとは言い難い。もしも仮にいるとしたら、その能力者はおかしいヤツだ。
「・・・よし、ここにマッチがある。これでなんとかならないかな？」
「ライターならまだしも、こんななかでマッチは無理ですよ。近くに松明のようなものがあればですが」
・・・タマ、なんとかできないか？
（妖術で火の玉とか作れるけど）
どうやったらそれができるんだ？教えてくれ！
（たぶん経験値？が足りない）
・・・はぁ？
（だから妖術を使うにはさらに私を海都の中に取り入れなきゃダメってことだ。ルナが戦闘時に、クロードを取り込んで、クロードの人格を発動するみたいにね）
それは俺にはできるのか？
（たぶん無理。あなたの身体が爆発してもいいならするけど？）
遠慮しておこう。
「こんな山のなかに・・・何か用ですか？」
洞窟の前でそんな話をしていると、洞窟のなかから一人の女の子が出てきた。
白いワンピースに黒く長い髪。
この雪山には似合わない格好をしている。

「君がこの島の能力者？」
「・・・あなたたちも、私目当てにここに来たんですか？」
「あなた、たち？」
「ここで話すのもなんですし、よかったら中に」
「中にって、こんな暗い道を進むのか？」
「私についてきてください」
　トンネルのなかはやはり暗く、マッチの光で辺りを照らし歩くことに決めた。
「この道は昔、トンネルを作ろうとしていたのかほとんど一直線に掘られてるので」
「外にいた雪像も君の能力なのか？」
「はい。私の能力で作りました。雪像というよりは氷像に近いですけどね」
「そういえば名前って？」
「私は榊原　玲華。あなたたちは？」
「私は四津野。こっちの男は柊　海都で、こっちは赤井　ルナ」
「四津野、海都、ルナ・・・」
　玲華は静かになると、俺たちの名前を復唱し・・・溶けて消えてしまった。
　地面に水が溜まる。そして、地面を走るように、洞窟の奥へと進み始めた。
「急ぐぞ！あの水が消える前に」
「はい！」
　俺たちは水を追いかける。
　マッチの炎が消え、次のマッチをつけたとき、その空間は全く違うものに変化していた。
　さっきの狭い通路とは逆に広々とした空間が造られ、壁には松明が刺さっていた。
　四津野は持っていたマッチを消す。
「ここは・・・」
「ようこそ、アタシの部屋へ」

松明の光が届かない唯一の暗闇から現れた少女はさっきの雪像と同じ格好をしていた。
一つ違うところと言えば、案内する優しさが見える眼はこちらを睨むような鋭い眼へと変わっていたことだ。
「アタシが本当の榊原　玲華。この島を雪景色にした能力者」
「本物か・・・どうもさっきの雪像には人間らしさが無かったから疑っていたところだったんだ」
「アタシから遠くにいけば遠くに行くほど、雪像の形は雑なものになる。だけど、今さっきアンタたちが見た雪像は私に近いものだから、繊細にできていた・・・と思っていたんだが？」
本物の玲華の力は四津野の持っていたマッチ箱を凍らせた。
そして液体窒素に浸けられたバラのように粉々になって散乱した。
四津野の手には箱を持っていた感触だけが残っている。
「アタシはアタシのテリトリーに入られるのが嫌いでね。昔からイラつく人間がいりゃ、この能力で粉々にしていた。だが、博士気取りの人間が私のことを知って、家にやってきた。アタシの親はアタシを売った。・・・そのあとどうなったと思う？その博士どもは」
「お前が氷付けにした・・・？」
「正解、この島ごと氷付けにしたってことよ。ここは蛍ノ島、観光名所の裏で、政府も知らないような実験をしている施設があった。この服も、本も、食べ物も、全部その研究施設から持ってきた物さ」
「狂ってるな、お前・・・」
「三年もここに閉じ込められてたら、嫌でも狂う。それに昔はモルモットだったからね」
四津野、玲華間で話が進むなか、俺は静かにしていた。
俺やルナはこの少女から放たれる冷気に口が震えていた。顎が寒さで言うことを聞かない。筋肉が縮まるのがわかる。
そんななか、人間離れした四津野は震えることなく話していた。同じ厚さのコートを着ているだけなのにここまで違うなんて、やはり基盤が違うのだろう。
ただ俺には四津野も俺たちと同じ冷気を浴びているのが見てわか

る。その黒いショートカットの髪の毛の先が凍ってきている。発生源の最も近くにいるせいなのか？
「アンタの部下、アタシの冷気で凍えているみたいだねぇ。どう？年下にいじめられる感触」
　ついに脚が悲鳴をあげ、地面に座り込んでしまう。
　そして四津野の横を通って、俺の前に立った玲華は、おもいっきり俺の頭を踏みつけた。
「ほーらほらッ！年下に踏まれてさ！この寒さが痛いだろ？地面に皮膚がついたら痛いよね！」
　俺は残った腕の力で無理矢理でも、唯一肌が見えている顔が地面に触れないようにする。
「私の仲間に手を出すな！」
　四津野が玲華を後ろから殴った。玲華がその攻撃をくらうと同時に、四津野の手袋の中で何かが折れる音がした。
「麓で砕けた人間の死体を見なかった？あれはアタシに近づいた人間の死体なんだよね。冷気を浴びすぎて、皮膚から順々に凍ってさ。まぁ、その露出した頭が禿げないように気をつけて」
　四津野もやはり例外ではなかった。
　四津野も俺たちと同じ、いや、それ以上に被害を受けていた。
「さぁ、さぁ、さぁ！」
「マスター、間に合いました。」
　通路から光とエンジン音がこちらに向かってくる。それは、宙を走り、玲華に火炎放射を浴びせた。
「な、なんだ！この炎は！」
「だから言ったろ、逃げるという判断が最も正しいとな」
　そこに現れたのは下半身が戦車のようになったアンドロイドとホムラだった。
「おさよ、よくやった。・・・この島の異常気象の原因。これ以上の騒ぎは止せ。さらに雪が降ってきた」
「止めないというのなら、あなたは排除します。」
「麓で見たロボットか」

玲華は右手で炎を払う。炎は雪のように散っていく。
「マスター、私の炎、効果ないようです。」
「炎をも凍らせる能力値、やはり異常だ。だが、俺の刀、対能力者戦闘用・三日月は相手の能力値に反応する刀。相手の能力値が高いほど・・・殺傷力が増す!」
「だが、その刀よりも先にアンタ自身が朽ちる」
玲華は立ち向かうホムラに冷気を浴びせる。冷気がホムラの身体にまとわりつく。
だが、止まることなく玲華に攻撃が通った。
「悪かったな、原因。俺ははなからアンドロイドだ」
凍った表面の皮膚が剥がれ、その奥に機械的な部分を見せた。
「人間、じゃ・・・ない?」
「その傷からジワジワと能力者の能力値を食らうウイルスが入っていくのを感じるか?俺の言う殺傷力とはこのことだ。その年で地獄に行くのも可哀想だが、それもまた摂理だな」
「ぐあ、何かが・・・入ってくる。・・・なんてね♪」
バキバキッ!
目の前でホムラが砕けた。
氷塊が砕け落ちるように、そのパーツごとに砕ける。
「な、なぜ・・・だ」
「アタシがアンタ等のウイルスに侵食されるとでも思った?やるならそーだな・・一瞬で私を溶かすような酸とかを持ってくる方が良かったかもね」
「ぐ・・・不覚だ。俺の研究は無駄だったのか・・・」
「アンタ等のような男はこんな言葉なんてどうかな?」
チェックメイト。

氷の涙

一方その頃、ホテルでは・・・
「リリー、リアの調子はどうだ？」
「えっと、まだ熱があります」
「いったんこの寒いなかに出すのはどーだ？」
「さらに熱が出ちゃいますよ！」
さっきまで能力を使っていたリリーと、雪像の破壊から帰って来たキラとクロサクは大広間で休憩する。そしてリアの寝る部屋の前で腕を組み、オルガは何か考えている。
部屋の中でリアを見守る雷帝はリアの顔と窓の外を交互に見ていた。リアも心配だが、仲間を探しに出た三人も心配している。
「雷帝、ちょっといいか？」
「なんだ？」
「ここの能力者についてだが、ある情報が手に入った」
オルガはリアが持っていたパソコンを使い、リアの作り出したデータを読み解く。
「これは・・・」
「このホテル、ただのホテルじゃない。ここには地下があって、そこには研究施設がある。もちろん、今は研究施設として働いてはいないが」
パソコンにはこのホテルのデータが詳しく映っていた。
そしてそこには地下へと続く階段やエレベーターと地下研究所の内部地図が出ていた。
「あの疲労・・・まさかこれを全てか!?」
「あぁ。そうみたいだな」
「新しい謎か。・・・ん？オルガ、そのカメラマークはなんだ？」
「これは地下研究所の監視カメラの記憶だ。全て視るのは不可能だが、一部なら再生することは可能だ」
オルガは雷帝の了承なしにカメラマークをクリックする。
そこには玲華ともう一人の少女が映っていた。

二人は榊原　玲華のことを知らない。だが、彼女の着ていた服に書かれたアルファベット表記と玲華の使用している能力から、二人は彼女が俺たちの求めていた仲間だということを理解した。
「この能力・・・一言で表すなら『残酷』だな」
「・・・」
オルガは彼女の姿に恐怖心を抱き、黙り込んだ。
自分が求めていたのは、こんな『化け物』だったなんて、と考えていた。
そしてそれと共に、三人はもしかしたら死んだんじゃないかと考えていた。
「三人にはちぃーと荷が重すぎたかもしれないな」
「いや、あの三人ならやってくれるはずだ・・・俺はそう信じている。この映像を見た後でもな」
オルガはそういい、パソコンの電源をきった。
★
「さぁ、次はアンタ等のバンだ！」
ここで俺の頭の中には選択肢が浮かんだ。
① 雷帝たちが助けに来てくれる！それまで待つんだ！
② 三人で力を合わせて倒そう！
③ 力ではなく言葉。玲華を感動するような言葉で戦う。
④ 死ぬ。
（このままだと④だねぇ・・・）
タマは正直なことを言う。確かに今の状態じゃ助けが来ない限りは俺たちに勝てる術はない。
俺が諦めかけたそのとき、四津野が立ち上がる。
「お前、親に捨てられた的なことを言ったな」
「だからなんだよ。アタシは売られたんだ、捨てられたんだよ」
「それは私も同じだ！私は、親に捨てられた。きっかけはこの身体のせいだ。重たいものを軽々と持ち上げ、友達を殴ったらそのまま他界・・・私は自分自身の身体が嫌いだった。私の妹もだ。姉妹両方とも捨てられたよ。妹は能力で両親を殺した。でも、私はできなかっ

た。捨てられたけど、そんな中にも愛があったから、最後の最後までどこかに希望があったんだ・・・

これは夢なんだって、現実じゃないんだって。

でも、両親は死んじゃったよ。妹はチームTに。私はリアに拾われてチームOに・・・」

「・・・そんな長々と、命乞いか？」

「あなたにもわかってほしい。ここにいるのは全員、あなたと同じ苦しみを持った同じ能力者なんだって」

「・・・アタシにはアンタのその希望がわからねぇよ」

寒さが少しだけ和らぐ。体もどこか熱を取り戻し始めている。

「親の愛って覚えてる？」

「そんなもん、とっくに消えたさ」

「じゃあ、思い出してほしいんだ。あなたは確かに苦しい思いをした。だけど、それはあなただけじゃなかったでしょ？励まし合う仲間がいたはず」

「・・・」

「今度は私たちがあなたに愛を注ぐ。私は脳筋バカだから、言葉が出てこないし、伝えたいことも伝えられない。でも、愛を伝えることは脳筋バカでもできる」

『一緒に戦おう、玲華ちゃん』

なんだ？アタシの中に、昔の記憶が蘇る。誰だ？囁くのは！語りかけてくるのは！

『私、名前がないの。だから、玲華ちゃんが付けてよ』

『な、なんだよ・・・名前？』

『なんでも良いよ。でもせっかくだから玲華ちゃんみたいにキレイな名前がいいな～』

『ば、なんだよ！・・・キレイか』

『痛いけど、頑張ろう。あともう少し耐えれば、希望の光が見えてくる。だから、玲華ちゃんも頑張ろう』

『・・・わかった』

この声、研究所にいた・・・

『あり、がとう・・・玲華ちゃん』
『おい！諦めるな！死ぬな・・・死ぬなって・・・』
「・・・」
　玲華は何を思い出したのか、その場に膝をつき、涙を流し始めた。冷たい涙が頬をつたい、地面に落ちる。そして涙は地面で固まらずに広がっていく。
「なんだよ、さっきからこの声は・・・」
「さっき雪像が言ってたこと、ここには元々トンネルが造られるというのは嘘なんだよな？」
「・・・あぁ、そうだ。ここはアタシの友達がその能力で必死に掘ったアタシとアタシの友達の部屋だ。だけど、友達は能力の使いすぎから出た熱のせいで死んだ。」
　玲華は涙を手で拭うと俺たちに背中を向けた。
　そして、
「アンタ等、熱のせいで苦しんでる仲間がいんだろ？雪像使って見たよ。それが治ってからもう一度来てくれ」
　といい、膝を抱えて座った。

「ただいまー。」
　やっとあの洞窟から帰って来た俺たちはホテルの裏口から入った。入ってすぐに見えるロビーに誰もいない。もしかしたらリアのいる部屋にいるかもしれない。
　そう思って、俺はリアのいる部屋の前にいく。
「おっ、帰ったか。オルガは向かいの部屋にいるぜ」
「監督はどうですか？」
「監督は今、リリーが付きっきりで看病している。まだ熱は下がらないみたいだ。それで、お前たちに聞くが、行った先で国の人間と戦ったか？」
　俺たちは目をそらした。
「・・その反応、戦ったんだな。今すぐオルガのところに行ってこい、謝ればなんとかなるかもな」

雷帝の足元には酒の瓶が置いてあったが、開いてないということは飲んでいないのだろう。・・・まぎらわしい。
「し、失礼します・・・ただいま帰りました」
「遅かったな。こっちは・・・なぁ？」
オルガの前に座る人を見て、俺は開いた口が塞がらなかった。
玲華によって壊されたホムラがそこに座っているではないか。しかも、眼鏡も完全に直っており、顔や手に傷はない。そして横にはアンドロイドのおさよが立っている。
「・・・俺の最高傑作を壊したのはお前たちか？」
「いや、それは違います！」
「じゃあ、この島の能力者か？」
ホムラは立ち上がり、俺たちのところに近づいてきた。
腰には折れたはずの刀がある。きっと懐には銃があるだろう。
「・・・その目、本当のことを言っているな。」
ホムラはそういい、もう一度オルガの前のソファーに座った。
「で、オルガと言ったな。このホテルの地下にある研究施設のことは知っているか？」
「ついさっき知りました。仲間にこのホテル内の情報をデータ化する能力の能力者がいるので」
「それは興味深い。だが、今はそんなことはどうでもいい。その研究施設から、ある物を取ってきたいんだ。俺は他の研究施設に用がある・・・頼めるかね？この要件に承諾するなら、俺はこの三人を捕まえて実験台にはしない」
オルガは目を閉じ、
「・・・わかりました。」
と承諾の返事をした。

Ｌｏｓｔ

地下へと続く階段。
薄気味悪い蛍光灯が辺りを照らす。たまに着いたり消えたりを繰り返しているためかさらに奇妙だ。
俺は内心、幽霊とか出ないかなー、とわくわくしながら階段を下りていた。
「それにしても不気味だな。・・・それにしても、あの気持ち悪い研究者は何を探してんだ？」
「どうやら、榊原　玲華の記録を探しているらしい。この島に来てどんな研究をしているのかをな」
「本人に直接聞けばいいじゃんか」
「それができればやっているだろう。・・・お前らのその傷からして、強かったんだろう？」
「・・・三年間で一番かもな」
「雷帝よりか？」
「んー、難しいところだね。マジの雷帝と同等かそれ以下？」
「つまり強かったんだな」
オルガ、四津野間で行われる会話を聞いた感じ、玲華も強いがあれと互角に戦える雷帝もすごいというのがわかる。
そしてルナはオルガって四津野に敬語使わないんだ、と思っていた。
「おい、これは・・・」
階段を下りたところに白衣を着た骸骨が壁に寄りかかって死んでいた。
それの右手の下には本が置いてあった。
「オルガ、その手の下の本は？」
オルガは本に気づくと、しゃがみこんで本を取る。
その本は少し分厚いノートで表紙に『記録』と書かれていた。
中身は殴り書きでグチャグチャになるくらいの力でたくさんのメモ書きが見えた。

「記録か・・・読めないな」
「監督なら読めるんじゃないか？一度データ化させて」
「監督のデータはそこまで万能じゃない」
オルガは背負ったリュックにノートをしまうと、電気のついていない奥を懐中電灯で照らす。
光で照らされた一瞬、何かが壁を這っていったのが俺たちにはわかった。
「・・・今の見たか？」
「な、何？今の・・・」
オルガが懐中電灯で探すなか、俺はその生き物を探しに暗闇のなかを進む。
後ろでタマがうるさいからという理由もある。
（あの生き物から能力値を感じた。もしかしたら、能力者かもしれない）
タマの言うことが本当なら、俺たちに危害を及ぼす。
「柊、どこにいくんだ？」
オルガが俺の肩を掴む。
「さっきあそこに変な生き物が」
「まさか・・・Ｌｏｓｔか？」
「Ｌｏｓｔ？」
能力値を水、能力者の能力最大値を器とする。
水がその器から溢れてしまったときに暴走して発動する。それがＬｏｓｔだ。
能力者は完全に意識を失い、その能力者の能力が暴走してしまう。Ｌｏｓｔの形は人それぞれで、その人間の能力の具現化された物が現れる。龍や人形やその人間の霊体など、様々な形が今のところ発見されている。
ちなみに俺は目の前でそれを見たことがある。確かそのときは騎士だったな。
「つまり今さっきのは・・・」
「まぁ、オルガの言ったことはほとんどありえないこと。それがただ

の生き物かもしれないし」
カシャン！
四津野の話を止めるような金属音が奥から放たれる。
四津野はその音に反応し、ピョンと身体を跳ねさせた。
やはり何かがいる・・・。
（海都、何かがこっちに来るぞ）
タマの鋭い聴覚がすでにその何かの動きを捉えていた。
（来るぞ！）
タマの声と共に、その何かが飛び出してきた。
それはトカゲのような身体にサソリのような尻尾をつけた
生き物だった。大きさは俺の手のひらくらいか。
「これは、Ｌｏｓｔか！」
「案外、小さいッスね」
「いや、これはＬｏｓｓだ！これだけでも能力者の平均以上の能力値を持っている！」
Ｌｏｓｓは俺に飛びかかってきた。だが、オルガの攻撃によってその肉体を散乱させて下に落ちた。
オルガの武器はどこから出したのかわからないくらいの大きさをした巨大なハンマーのようだ。大きさはオルガの身長くらいはある。
「オルガさん、その武器って？」
「これのことか・・・」
オルガはそのハンマーを地面に叩きつけた。すると、ハンマーは液体のようになってオルガの持っていた小さな瓶に入っていった。
「これは天銀といって・・・説明が難しいな。」
「まぁ、オルガの能力媒介として使われる銀色の液体だな。それ以上は話さない、というよりはオルガがそれ以上の情報をくれないんだ。」
話している間に砕け散ったＬｏｓｓの身体は元通りになる。
むしろ二体に分裂していた。
「増えた！」
「Ｌｏｓｓの大半は消滅してしまうが、こいつは例外みたいだな」
Ｌｏｓｓは尻尾をむけると、闇のなかに消えていってしまった。

俺たちはそれを追いかけることにした。
オルガの持つ懐中電灯のみが道標でその先は暗闇が続いた。行く途中、何人もの死体があったが、俺たちは立ち止まってそれを一つ一つ見るようなことはしなかった。
そして少し走ると、そのＬｏｓｓはドアにできた穴へと入っていった。
「これは・・・バイオハザード」
そのドアには大きくバイオハザードの標識記号が描かれていた。そしてその記号の下に人間の骨がいくつか散乱していた。
「・・・準備はいいか？」
「いつでもどーぞ」「いいですよ」「・・・」
「いくぞ！」
オルガはそのドアをおもいっきり蹴り飛ばした。
「◇○＃　▲◇　？」
理由のない音が俺たちの入室を歓迎する。
「うわ・・・」
その部屋のなかにいたのは手を伸ばせば二階以上の建物の屋根に届くくらいの大きさをした人間がいた。
人間といっても身体つきや顔が人間なだけで、肌には鱗のような模様が入り、蠍のような尻尾と蛙のような水掻きをつけている。それが何類に分類されるか俺たちにはわからない。
「これがＬｏｓｔだ」
「◇○　◎◎　●◇　◇◇！」
さっきと似た音が響く。
Ｌｏｓｔは腹部からゼリー状の卵を産み落とす。中からさっきまで追いかけていたＬｏｓｓと同じものが現れた。
「天銀ッ！」
オルガは天銀で弓矢を作り、本体を狙う。
矢は本体の鱗に跳ね返されて空中で消えてしまった。
「ッ！・・・四津野とルナはＬｏｓｓの駆除、俺と柊は本体への攻撃だ！」

（オルガはわかっていない！あの鱗、あの天銀じゃ無理だ）
「お前にはわかるのか？」
（えぇ。あの天銀は形を変えるときに発生した能力値より高い能力値を持つ物に当たると消滅する。そしてあのＬｏｓｔが持つ能力値はオルガの能力値を遥かに越える）
「ということは・・・」
（オルガでは無意味だ・・・）
　タマの言ったことはオルガも理解しているはずだ。オルガは前にこんなことを言っていた。
「強くなるために大事なのは自分を知ることだ。」
　そんなことを言っておいて、無意味に攻撃を放っているわけではないだろう。
　オルガにも策があるはずだ。
「柊、前に言ったことを覚えているよな？強くなるためには何が必要だ？」
「自分を知ること・・・ですよね？」
「そうだ。今、俺の攻撃はヤツに無意味だ。それを理解している。だから俺は指揮をする者として何個もの作戦を練っている・・例えば、」
　この天井が崩れる・・・とかな。
　オルガの作戦は成功した。次の瞬間、Ｌｏｓｔの頭上の天井だけが崩れ落ちていく。オルガは俺の服を掴むと、ルナと四津野に
「ここから逃げろ！」
　と言い、ドアへと走っていく。
　四津野とルナもＬｏｓｓとの戦いをやめ、俺たちを追いかけた。
　結界でも張られているのか、ドアから先の廊下は全く被害がなく、ドアの向こうでただ崩れる音だけが聞こえる。
「・・・全員無事か？」
「まぁ、なんとか・・・ただ資料とかが」
「そうか・・・。作戦失敗か」
　オルガは指揮としてその失敗を悔やんでいた。
　だが、一人もケガすることなく帰ってこれたということだけでも喜

ぶべきなのでは・・・。
「指揮は作戦失敗が一番嫌いなんだよ。・・・まぁ、オルガには責任感があるからね」
四津野は俺の肩をポンと叩くと、オルガのところへ行き、
「まぁ、とりあえず資料はあの遺体が持ってたノートでも持ってけばいいだろ。帰ろーぜ」
と言って、来た道を戻っていった。
オルガはノートを回収し、すぐにホムラに渡した。
ホムラは中身を確認すると、頭を下げてそのホテルから出ていった。
外は少しずつだが、暖かくなっていた。

メビウスプログラム

洞窟前・・・

俺たち三人はまた山を登って洞窟に向かった。

洞窟の前には、玲華が立っていた。

「久しぶりに太陽見たわ～。・・・お、やっとお迎えが来てくれたか」

「玲華。」

「なんだ？」

「これからここを下りるにあたって、一つ言っておきたいことがある」

私たちと共に戦うことはできるか？

四津野のいつもとは違う冷静な声色が、玲華の軽々しい口調を攻撃する。玲華はそれを聞き、その口を閉ざしてしまった。

「な、なんだよ。共に戦う？・・・・じゃあ、一つ聞いてもいいか？」

アタシを『武器』ではなく『仲間』として見てくれるか？

四津野の声色に対して、玲華も声色を変えてくる。

さっきまでの強気な玲華が一歩だけ後ろに下がった。

まだ、強気な口調が抜けきれない玲華の頼みに四津野は

「私たちなら、お前をそんな見方で見たりはしない。むしろ、仲間や友達として接する」

と優しい声で言った。

「・・・なら、着いていくよ。それに・・・こんなところに一人ぼっちも嫌だからな」

こうして蛍ノ島での一件は終わり、俺たちチームOは緑色の大地が戻ったこの島で予定通り、特訓を始めることになった。

玲華はまだ、この空間に溶け込めそうにはない。四津野は玲華を無理矢理でもその空間に入れようとしていた。

そして、とうとう俺は・・・

「お、やっと完成か」

タマの妖術の一つ、狐火を使えるようになった。

★

メビウスプログラム　成功。

「どうだい？アリス。この部屋も前よりは快適だろ？」
ウサ耳フードの女に話しかける狐の面を付けた男。
そして薬品臭いこの研究室では、ある実験が行われていた。
「まぁ、前の居心地の悪い空間よりはね。それに私の実験も成功したしね」
アリスと呼ばれた女は男に『研究成果』を見せた。
「おぉ、もう片方だね？」
研究成果。そう書かれた大きめの瓶の中には一つの心臓が入っていた。
「これであなたたちもいつかは、そんな物騒な物を捨てて、能力を使えるようになるね。まぁ、あと一年はそれを使ってもらうかな」
「・・・てことは、俺は無理か」
「卒業したらやってあげますよ。・・・まぁ、学生じゃないから、それなりに値段しますけど」
「辛いこと言うねぇー」
アリスは瓶の持つと頬擦りをした。
「ん？何をしてるんだい？」
「まぁ、愛ですね・・・。」
「・・・。それじゃ、頼むよ」
男はそう言って部屋から出ていく。
アリスは瓶をそっと机の上に置くと、パソコンの近くに飾られた写真立ての写真を見た。
「あの子は今何してるのかな・・・」
赤井　ルナさん・・・。
★
一週間後、ようやく俺たちはあの島から帰ってきた。
久しぶりの自分の部屋はとても安心する。
俺は帰ってくると吸い込まれるようにベッドへと倒れた。
（この一週間で、私の妖術のほとんどはお前に伝授した。だが、ほとんどはだ。あと少し、この少しを使えるようになるかは私にはわからない）

「ゲームだとな、そういうのは終盤に覚えるもんだ。まだ俺はちゃんとした戦場で戦ってすらいない。だから、俺が本当にヤバイと思ったら頼む」
（それで間に合うのかい？・・・天国で後悔しても遅いよ）
「まぁ、そのときにでも考えるさ」
携帯の通知音がなって画面が明るくなる。
「ん？どうした？」
俺は携帯を取り、画面を見た。
Ｆｒｏｍ：ルナ
助けて。
俺はすぐに部屋から飛び出した。
★
「アリス副隊長、チームＯ１年の赤井ルナを捕まえました。」
「連れてきて」
鉄のドアが開いて、ルナが二人の男と部屋に入る。
両腕を二人の男に捕まれ、手首を後ろで手錠によって固定されている。
「今度はなんですか・・・」
「どこか痛いところとかない？例えば・・・心臓とか？」
「特にないと、・・・どうしてそんなことを？」
「そうか、ならいいんだけどさ」
アリスはフードの中でにっこりと笑うと、ルナのみぞおちを触る。どちらかというと、それよりも上の方を。
（それ以上は、俺が許さんぞ）
「おやおや、本人登場ですか」
ルナの身体を突き破るかのように現れたクロードはその透明の手でアリスを殴ろうとする。だが、透明の手はアリスの身体を貫いて、空を切った。
「どう？新しい身体の居心地は」
（何を言う？この身体はルナの物だ。俺のものではない）
「そう考えてるならそれでいいんだけどさ。」

アリスはルナの腰に付けた刀を撫でる。
「クロードの魂はここにはない。あなたの身体の中に存在する。付喪神とは存在が違うしね」
（何が言いたい）
「つまりだ。君たち二人でその身体の魂ってこと。ルナの魂の半分と、クロードの魂の半分が合わさって存在するということ。」
アリスはそう言い、二人の心臓を左右片方ずつを合体させたものが入った瓶を出した。その二つは同じ動きをしている。
ルナはそれを見て気持ち悪くなったのか、おもわず嘔吐しそうになる。
目の前で自分の心臓が動いている。そう考えると、そうなっても仕方ないことだ。
「クロード。君の内蔵のほとんどは機能停止していた。だが、心臓だけは辛うじて動いていた。逆にルナは心臓以外はほとんど傷ついていなかったが、心臓だけは完全に止まっていた。・・・私に感謝した方がいいと思うよ」
アリスは瓶をそっとしまい、膝をついて絶望するルナに近寄る。
「・・・ろす」
「ん？」
「殺す・・・殺す（殺せ）殺す（殺せ）」
二人の魂は混ざりつつある。そして二人の魂に溢れ出た殺意はクロードの魂を動かした。
「剣よ！」
クロードの剣はアリスの顔の横を通過し、奥にあったパソコンの画面を破壊した。剣は付着した血によって操られていた。
「クロードの能力を完全に使えるようになったか」
剣はパソコンの画面から抜かれると、アリスの首を狙うように横に回転しながら飛んでいく。アリスはそれをポケットに入れていた短刀で跳ね返す。
跳ね返すときの威力でどちらも反動を受ける。
「剣よ！私（俺）の血を使い、あの敵（ヤツ）を倒せ（殺せ）！」

剣はルナのところに戻り、ルナの手首にはめられた手錠と共に、手首を少しだけ切る。
手首から流れ出た血は剣のなかに吸い込まれていき、少しずつ赤く染まっていく。
「これが私の運命！」
★
チームZのある部屋から火が上がった。
オルガはそれを聞いて「よくあること」と言っていた。
チームZは能力を持たない者で形成され、超能力、異能力が好きな人間や、未成年の罪人が集まる。
彼らは自分達のみで実験を行い、対能力者専用の武器を作って戦闘を行っている。
相手の能力値で威力、殺傷力が上がる銃弾や、重さが気にならない太剣などは特に最高傑作と言われ、国に送られているものもある。
実験をしているなかで、失敗して火が上がったのだろう。
「柊、ちょっといいか？」
俺が炎を見ていると、オルガが話しかけてきた。
「どうしたんスか？」
「赤井を見なかったか？火災時はメンバーが全員いるか確認しなければならない」
俺はそれを聞き、脳裏に何かが過った。
「おい！どこにいくんだ！」
そのときにはもう俺の足は動いていた。
ルナからの『助けて』というメールと目の前の火災。あの炎のなかにルナはいる。
「ルナーーーッ！」
俺はガラスを割って校舎のなかに入った。
少しずつ部屋のなかは煙に満たされていく。
「タマ、この前覚えた分身、使えるよな」
（もうそれは君が習得した”能力”だ。君が念じればできる）
俺はタマの言うとおり、分身したたくさんの俺を念じる。すると、

目の前に俺と同じ格好をした分身が四人現れた。
（今じゃこの人数が精一杯。でも、これだけあれば充分でしょ？くれぐれも自身が燃えないように）
「了解。」
分身に一階と二階を任せ、俺は一番ルナのいる確率が高い三階を調べることにした。
三階は一階以上の炎と煙に包まれている。
そんななか、俺は炎に向かって走り出した。
「ルナ！いるんだろ！返事をしてくれ！」
カツンと、何かが俺の足に当たる。
そこには画面の割れたルナの携帯が落ちていた。
そして、その携帯から血のようなものが、すぐ手前の部屋に向かって走っていた。
「ルナ！」
俺は扉を当てる。
そこにはなぜか、クロードが立っていた。

ルナの記憶

能力者の能力値は、その人間の裏、つまり闇が深いほど高くなると言われているが、それが本当なのかは未だにわからない。
特に、殿堂入りした能力者の全員が『悪』とは限らない。伝説にもなっている勅使河原　八野地はチームＯの司令塔、リーダーでＬｏｓｔ討伐部隊の指揮部隊隊長だった。そして能力値は、他の能力者を遥かに上回っていた。
こんな能力者が果たして悪なのか・・・
老けた老人は窓の外、燃える校舎を見ながら、そう呟いた。

★

「クロード・・・さん?」
「・・・頼む。ルナを・・・俺の身体を助けてくれ」
クロードはそう言いながら、俺にルナがいつも装備している剣を渡した。
「クロード!」
俺はおもわず、呼び捨てになってしまう。
目の前で屈強な体つきの男が倒れたのだ。
俺もそろそろ、煙のせいで意識が朦朧としてきそうだ。
「今、俺の身体はルナのものではない。なぜかわからないがこうなった。・・・俺が死ねばルナも死ぬ。わかるか?この意味が」
俺はクロードを運ぼうとするが、予想通りの体重に持ち上がりそうにもない。タマの能力による力の上昇も、分身している限りは発動できない。
ここまでか・・・。
俺も意識が遠退いて、立てなくなったその時、
「まったく、何も考えずに進むからこんなことになるんですよ。わかりましたか?」
周りの炎は薄い板のようになって宙に浮き始めた。
「こちらチームＯ監督のリア。鎮火と柊海都、赤井　ルナの救助に成功」

そこには監督の姿があった。
「よかった～。無事みたいで。あとで反省文を・・・ってその方は？」
「・・・クロード。ルナに憑いてる霊魂だ」
「霊魂がそんなはっきりと？」
リアはクロードの胸部に手を当てる。するとクロードの周りの色々なデータが表れた。
「・・・これは本物の身体ね。ルナさんの能力でも、このクロードの能力でもない。チームＺの実験施設に数ヵ月間いたらしい・・・。死ぬ前に何とかルナさんの身体に取り憑くことに成功した」
リアがデータの塊を消すと、クロードの肌はボロボロと腐り落ちていき、そこからはルナの身体が現れた。
「これは!?」
「ルナ！」
俺はルナを抱き締めた。クロードの中から現れたルナは血の臭いがしたが、そのなかにルナの使っているシャンプーの良い臭いが感じられた。
「海都・・・これは・・・？」
ルナは俺の顔を見る。そして周りを見て、何があったかに気付いた。
「ご、ごめんなさい！私が、私がこれを・・・」
「そんなことはいい！ルナが生きているなら、それでいい」
「仕方ないことだ。チームＺの捕まって、実験台になって抵抗した。・・・もしも抵抗できなかったら、さらに大惨事になっていただろう」
リアはそんなことを言いながらも俺たちの行動に内心、怒っていただろう。言葉と声がどこか合っていなかった。
リアのデータは１０分で消え、炎はまた燃え始める。
校舎が一つ燃えたが、リアやオルガは冷静だった。まるでこの前もあったかのように、日常茶飯事のような立ち振舞いで、メンバーの人数を数えて報告していた。
今回の火災による被害者はほとんどいなかった。

特にルナとクロードが「倒した」と口を揃えて言っていたアリスは無傷だと、情報が出た。
さらに、そのときアリスはその建物とは違う建物にいたという。瞬間移動をしている間もなく、ルナはアリスが血を流すのを見た。・・・なら、どうしてアリスは無傷なのか。
「ルナ、少しいいか？」
「どうしました？」
「アリスの件だが、少し情報を分けてくれないか？何の話をしたのか、そしてアリスが何を言っていたか」
「わかりました・・・」
ルナはオルガに連れていかれる。
チームZは情報が少なく、謎の多いチーム。なので少しでも情報が必要だ。それにどうやら、次週に行われる戦闘訓練、戦闘祭でチームZも参加するらしい。
俺が今、チームZについて言える情報はただ一つ、
チームZはチーム内の九分九厘が能力者ではないということだ。
「キラ！久しぶりだな！」
火災による集合が終え、訓練に戻るとき、キラのところに一人の男がやってきた。キラの知り合いだろう。
「おー！大和じゃないか！久しぶりだな」
「最近キラと戦えねぇからよ、ちょっと体が鈍ってんだ。ちょっと時間空いてんなら戦ってくれねぇか？」
「別に俺は大丈夫だが、そっちはどうなんだ？」
「大ケガしねぇ程度にやるならいいってよ」
「なら、やってやろうじゃねぇか。・・・柊も空いてるよな？情報収集と勉強でちょっと来たらどうだ？」
俺はこのあとの時間は自習で空いていた。やることはほとんどないし、キラがちゃんと戦っているところを見てみたいというのはある。だが・・・ルナが気になって仕方がない。
「おいおい、何考えてんだ？先輩命令だ！拒否権はねぇぜ」
キラは俺の腕を細くなるくらいにガッシリと掴む。

どうやら逃げることはできないようだ。
「大和。あそこはどうだ？ほら、あの貸しきりができる戦場」
「あー、そこならいくら暴れても大丈夫だな」
俺はキラに引っ張られて、とある場所へ向かった。
戦場Ａ。
とある町を舞台にした戦場で、ところどころ建物が崩壊している。全てが作り物で、壊れても数分後には元通りという、なんとも非現実的な物でできている。
そしてここは次の訓練で使う場所になっている。
「しっかしよぉ、よく俺たち三人だけのために貸しきりなんてできたな！さすが、チームＡの火力戦車と言われてるだけはあるぜ！」
「良いこと言うじゃねぇか！そっちはあれか？二人で来るんか？」
「お、いいのか？」
「もちのろんだぜ！さぁさぁ、かかってこいや！」
何でこうなったのか、俺は自分自身に聞いてみる。
答えが出るわけがない。強いて言えば、俺が断れなかったのが悪いのか・・・。
（あの男、どんな能力を使うのか楽しみね）
楽しみ・・・か。
「じゃあ、俺から行かせてもらうぜ！」
キラは大和に向かっていく。
大和はその場で指を鳴らし、
「装備ッ！」
と言う。その言葉に共鳴するように、大和の周りに戦車の主砲や装甲など色々な装備が現れた。
大和はそれを装備し、キラに立ち向かう。
キラの拳は大和の装備に当たると金属音を響かせて装甲の前で止まった。
大和の両肩に着いた大和の身長と同じ大きさの盾はキラの攻撃を完全に防いで薙ぎ払う。
「そんなに近づいていいのかぁ！俺の主砲が火を吹くぜ！」

「やってみやがれッ！」
大和の主砲はキラの方を向く。そして機関銃と共に砲弾を撃った。
キラはそれを全て避けながら、大和に近づく。
機関銃の銃弾の雨と砲弾。あれを全て避けるのか。
（あの男、すごい反射神経と動体視力ね。たぶん彼にはあの銃弾が全て見えてる）
「嘘だろ？」
（嘘じゃなかったら、あの機関銃は避けられない）
タマの話によると、キラは人間離れした身体能力であの銃弾の雨を避けているという。また、キラの体にもしも、あの銃弾が当たったとしても、キラにはほとんど効かないだろう。
「オラッ！」
キラの拳はついに大和の主砲に届いた。
大和はその重装備によってほとんど動くことができない。そのため、近づきさえすれば、キラに勝機はある。
「お前のその装備、訓練が始まる前に壊れるみたいだな！」
キラの攻撃が完全に届く範囲まで来たとき、
「キラ、止まれ！」
何かによって止められた。
その声はオルガだった。
「なんだよ、オルガ。たまにはいいだろ？」
オルガは観客席から戦場へ降りる。
「別にここなら戦ってもいい。だが、俺が来た理由はそんなことじゃない」
「じゃあ、何だってんだよ。あと少しで」
「柊にも言っておく。・・・赤井が狙われている。チームZにな」
「チーム・・・」
「Zだとォ？これまたどうしてだ？」
「わからないのか？・・・たぶん赤井はあのアリスの能力について何か鍵を握ったのかも知れない」
キラと大和はそれを聞いて唖然とする。

「マジか！アリスの能力か！」
　そしてキラはテンションが上がって、わけのわからない笑いを見せた。大和は装備を消す。
「お前のチームの赤井ってやつは何をしたんだ？」
「この前の火事で赤井はあの炎のなか、アリスと二人で話していた。そして赤井はアリスを殺したと言っている。とりあえず、二人は赤井のところに行ってくれ。別に行かなくてもいいが」
　オルガはまた観客席に戻り、出口から外へと消えていった。
　俺もキラと大和に「お疲れさまでした」と言うと、入ってきた場所から出ていった。
　とにかくルナが心配だった。俺がいたところで、何かが変わるというわけではないが、ルナの支えにはなるだろう。
　このあとルナの記憶を、ルナの得た情報を巡って命懸けの攻防戦が始まることを俺たちはまだ知らない。

殿堂杯への参加

「納得できんッ！」
チームＺ会議室。
テーブルを強く叩く音が部屋に響く。
チームの監督の前に立つ、チームＺのリーダーとアリス。
監督は今にも堪忍袋の緒が切れそうになっていた。
普段から怒りっぽい性格も今となっては暴力を振りそうなくらいに変化していた。
「アリス！キサマに研究室を使わせている理由がわかるか？他のチームに我等が取り組んでいるメビウスプログラムのことを教え、さらには自身の隠された能力すらもバレそうになっている始末！解雇までも考えるぞ！」
「・・・」
馬耳東風。アリスには全く言葉が入っていない。もちろん、隣に立つチームＺのリーダーも同じだ。
チームＺリーダー、カラス。本名は不明でいつも黒いマントを羽織り、体を見せようとしない。
チーム内の仲間からも不気味がられ、あのマントの下はサイボーグやら体がないやら、色んなことを噂している。チームのなかでもトップシークレットに近い。
「ぜぇ・・・はぁ・・・いいかー」
チームＺ監督のドンは説教に疲れたのか、息が上がっている。さすがに６０後半から７０前半と思われる爺さんに数十分に渡る説教は疲れるだろう。
しかも何度も声をあらげ、何度か水分補給をしている。
アリスもその姿にただ目を閉じるだけ。見る意味もなく、ただ話を聞いているだけだった。
「アリス・・・例の物は？」
「この前の火事で更新したものは消えましたが、バックアップはあります。」

「そうか・・・」
　無口なのか、ただ話そうとしないだけなのか、カラスは一言二言で、スーッとアリスの前から去ってしまう。
「メビウス・・・ルナ、私の能力に辿り着くための鍵。さて、チームＡは何でその情報を得るのかしら。カラスによると、すでにルナの記憶を奪う計画は始まってるみたいだし。楽しみね・・・ルナさん。ふふっ」
　アリスは笑いを少しだけ外に見せると、新しい研究室へ入っていった。
★
　俺が部屋に入ったとき、ルナはベッドの上で大好物のイチゴオレを飲んでいた。
　頭には包帯を巻き、近くにはリリーがいる。そして入り口の近くでオルガは目を閉じて座っていた。
「大丈夫か？ルナ・・・」
「・・・大丈夫だよ、全然」
　ルナは我慢している。
　ルナは我慢しているとき、少しだけ返事が遅れる。大丈夫の言葉が聞けるまで数秒間は静かだった。
「今、ルナさんの頭部には少し深い傷があります。だからあまり無理させないようにしてください」
「わかった・・・。」
「ルナがこの状態では、次の殿堂杯に出れないな」
「殿堂杯？」
「・・・聞いてなかったのか、今日の朝言ったろ」
　殿堂杯。この学校の行事の一つだ。
　優秀な成績、功績を称えられた者のみに与えられる称号に殿堂というものがある。
　それは色々な種類が存在し、戦闘に関する殿堂を与えられた能力者に、俺たちが戦うというものだ。昔は親善試合のような優しいものだったが、今となっては殺しあいに近い状況になっている。

あるチームを憎み、集中攻撃するもの。殿堂に挑戦し朽ちるもの。ただただ力が及ばず死ぬもの。死因は色々と存在する。ここ数年の戦死のほとんどがこの殿堂杯によるものだ。
「そして俺達チームOはそれに出ることになった」
「へぇー・・・・え？本当ですか？」
「本当だ。・・・嘘だと思ったか？」
オルガはそう言い、病室の扉を開けた。
「柊、教室に戻るぞ。三日後の殿堂杯の参加メンバーを発表する」
オルガは病室から去っていった。
「ルナ・・・じゃあいってくる」
「いってらっしゃい！」
ルナは元気よくそんなことを言ったが、どこか無理をしているようだった。
俺が帰ってからすぐにパックの底をストローがつつく音と、吸い尽くした音が聞こえた。
★
「シュウよ。次の殿堂杯、出たいか？」
「出させてください、お願いします」
プライドの高いシュウが頭を下げる。その先にはチームAのリーダー、エースが座っていた。
エースは大きな狐の背中に座りながら、シュウのその姿を上から見ている。狐の尻尾は九つあり、雪のような白い毛色に赤い毛が何本か混ざっている。
エース本人は赤い髪に、黒いコートを羽織り、中には白いシャツを着ていた。履いていた青色のジーンズはボロボロになり、破れたところは赤く染まっている。
顔はシュウの目では確認できない。
「出たいか・・・良いだろう。それに俺はお前らの敵となるのだからな」
「！」
エースの黒いコートには小さな金色のバッチが輝いていた。
それは殿堂杯に殿堂としての参加を表すバッチだった。

「枠はいつもの俺の分空くはずだ。・・・入れておこう」
「ありがとうございます。」
シュウは頭を下げると部屋を出た。
「シュウ。」
「・・・姉さん」
扉のすぐ横でアキネが待っていた。
「姉さんもリーダーに用があって？」
「いや、シュウを待ってたのよ。・・・いい、落ち着いて聞いて」
「エースは、もう死んでいる・・・この部屋にいるのはエースじゃない、『何か』よ。」
★
黒板に『チームO参加メンバー』と大きな字で書かれている。
だが、その下に何も書かれてはいない。
「あの・・・メンバーは？」
「これからだ。最初から書いてあると、廊下を通る他のチームに見られてしまうからな。情報漏洩だけは避けなければならない」
「まぁ、情報が漏れようが俺たちは人数が少ねぇから誰が出るかなんてバレバレだろーな」
「それに殿堂に入ってるやつらは誰だろうと殺してくる。まぁ、新人は入らないことを願うべきだ。私たちは入るの確定だろうけど」
隣に座るキラと四津野が余裕の表情で教卓に立つオルガを見る。
「これより、メンバーを発表する。指揮、オルガ。」
「指揮？」
「・・・話の腰を折るな、後で説明する。戦闘メンバーは雷帝、四津野、キラ、柊、クロサクだ。控えにルナの名前を書いておいたが、まずあれでは戦えないだろう。誰一人としてその日までケガをせず、訓練で無理をしないように。解散！」
本当にメンバーだけを言って、すぐに解散になる。キラと四津野は前のドアから、雷帝は机で引き続き酒を飲み始め、オルガはリアと作戦について話始めていた。
俺はとりあえず席から立つと、教室に残った三人に、

「お疲れ様です」
と言い、教室から出た。
さっそくルナのところに向かうが、二階に下りたところで四津野の姿が目に入ってきた。
四津野の前には四津野とは明らかに真逆な格好をした女子が立っていた。
特にフリフリのスカートから出る細くきれいな脚が、四津野の女とは思えない男子バスケットボールの選手みたいな脚と比べて格段的な違いを見せた。
「お姉ちゃんも出るんだ。」
「あぁ、今度こそは負けないよ！」
お姉ちゃん？・・・もしかしてあれが四津野の妹なのか？
「お、柊。ちょっと来いよ」
後ろで見ていたのがバレた。四津野はこっちにドスドスと歩いてくる。それに着いてくるようにテクテクと歩いてきた四津野の妹がまた可愛く見える。
「こいつ、私のチームの新人の柊　海都。こいつも出るぜ」
「な、情報漏洩は」
「そう固いこと言うなよ」
「は、初めまして。私は万理っていいます。えっと、よろしくお願いします！」
「万理ー、柊君の方が年下なんだから、そんなんじゃなくていいよー。むしろ、もっと先輩っぽくしないとなめられちゃうよ」
「そ、そうだよね・・・お、おう、後輩。えっと・・・ぱ、パン買ってこいよー、・・・なんて」
「成長したな、万理！前なんてそんなこと無理、言えないとか言ってたのにな」
「えへへ、お姉ちゃんと特訓したから」
一言、一言が可愛い万理さんにどこか心を奪われそうになる。だが、
（ルナがいるのにー、可哀想だなー。）

タマの言葉に心を取り戻す。
「えっと・・・万理さんはどのチームに？」
「私はチームTです」
「・・・ん？まさか」
「私がチーム殿堂の一人、四津野　万理です。」
このとき、俺は理解した。この人は能力者だと・・・

情報

四津野姉妹との会話から抜け出して、やっとルナのいる病室にたどり着く。そこにはリリーと意外な人物が座っていた。
「・・・どうしてここに？」
前に雷帝と戦い、勝敗つかずに消えたアキネが近くの椅子に座って、リンゴの皮を剥いていた。
キレイにリンゴの皮がアキネの生み出した空間の裂け目に入っていく。
「ルナさんがここにいるって聞いてね。話は聞いてるよ、君、アリスの能力を知ってるんだってね」
「そのリンゴをあげても教えませんよ」
「私はそんな姑息なことはしないわ。餌で釣るとかね・・・。これはあなたへのプレゼント。ウサギにした方がいい？」
「そういうわけじゃ・・・」
アキネはルナに皮を剥き終わったリンゴを渡すと、ベッドの近くのテーブルに置かれたティッシュで手を拭き、椅子から立ち上がった。
「私がここに来た目的はもう一つあるの。柊君、あなたにね」
「俺ですか？」
「ちょっと外に来て」
病室から少し離れた場所にある中庭でアキネは俺の腕を引っ張るのをやめる。
最近、こんなことが多い。
「で、話ってなんですか？」
「頼み事があるの。柊君にならできる頼み事・・・
私たちのチームのリーダー、エースを倒してほしいの。
ただとは言わないわ。できたら、私たちはルナさんの記憶や、あなたたちから情報を奪ったりしない。約束するわ」
「・・・無理です」
チームAリーダー、エース・ファン・ロード。俺と同じ狐憑きで、タマをはるかに越える妖術の多さと力を持っている。

オルガから聞いた情報によると個人勝率１００％を誇り、学校のＬｏｓｔ討伐部隊のリーダーもしている、言わばエリート中のエリートだ。もちろん殿堂入りし、あと数勝で伝説にもなる能力者だ。
「むしろ、なんで俺なんですか？もっと雷帝とか、四津野さんとか、それにアキネさんの方が俺より断然強いじゃないですか！」
「私じゃエースには勝てない」
「じゃあ、なんで俺に」
「・・・妖術のなかの幻術の分野、あれは妖術を使う者にしかみやぶることはできない。そう言われているわ。妖術には妖術をぶつけるのが最適なの」
「それでも俺が」
「へぇ・・・楽しそうね」
いつもの心のなかで話すタマの声が外で聞こえる。
「あなたが、柊君の狐・・・」
俺の横になぜかタマが立っていた。前にもあったが、どうしてこうなるのかは俺にはわからない。
でも、何度目を擦っても、タマはそこにいる。
「どうも、チームＡの・・・東条　アキネさんだっけ？雷帝との戦い、なかなか白熱した物だったわね」
「その件はどうも。・・・で、楽しいとは？」
「私がその狐と戦うってこと。久しぶりかしらねぇ」
「久しぶり？」
「私が九尾じゃないのに、あの神社にいた理由と関係あるかな。そういえば、あのとき理由は後で話すとか言ってたっけ」
俺が初めて会った日、タマはそんはことを言っていた。
「それは私が聞いてもいい話？」
「できれば、ここにいる二人だけに聞いてもらいたいけど・・・さっきからつけてきてる人間が邪魔でね」
タマはそういうと後ろの木目掛けて狐火を放った。
「おい！タマ、何を！」
「あくまでもこの炎は偽物。今の私じゃ、本物の炎にはできない」

木の影から逃げるように現れたそれは頭に猫の被り物をしていた。着ぐるみの頭と言えばわかるだろうか。
そしてヤツの右手にはハンドガンが握られていた。
「バレてましたか」
その猫はこちらにハンドガンの銃口を向ける。銃弾は二発放たれ、俺たちにむかって飛んでいく。
「邪魔が入ったか」
アキネは俺を突き飛ばすと、左手で空間を切り裂いて銃弾を消し去る。
「ッ！」
俺の目には銃弾が消えたかのように見えていたが、アキネの左腕には二発の銃弾が撃ち込まれていた。
「アキネッ！」
「先輩を・・・呼び捨てとはいい度胸ね・・・こりゃ、またシュウに怒られるな」
アキネがそう言い、腕を押さえたときには次の銃弾が飛んできていた。俺の体は勝手に動き、アキネを後ろに倒していた。
「チッ！・・・殺し損ねたか」
猫の被り物をした男は舌打ちをすると、ハンドガンをしまい、その場から逃げようとする。だがその先には、猫の被り物の頭およそ二つ分大きな身長の男が立っていた。
「あれほど攻撃するなと言ったろ、隠密に行動しろとな」
「ひ、ひぃぃぃッ！ゆ、許してくだッ！」
大男は猫の被り物ごと、ヤツの頭を掴む。大男の手は光り始め、次の瞬間、被り物と共に男の頭が消えてしまった。
首から上が無くなった男は地面に落ちると、首から血を流し始めた。
「失礼した・・・。」
大男は地面に落ちた死体をその右足で踏み潰す。死体は灰になって、風に飛ばされていく。
なぜかこのときにはタマはそこから消え、俺にしか見えない状態に

なっていた。
「あの・・・今の大男は」
「イーグル。・・・殿堂の一人ね」
「殿堂・・・ってことはあの人も!?」
「えぇ、今回の殿堂杯に参加するわ」
イーグル・ウィント。殿堂の一人。
能力は物の破壊、解体など。対象物を粉々にすることを主流とし、触れたものがなんだろうと消滅させてしまう。もしも、炎を浴びた場合でも、手のひらが炎を触っていれば、その炎は灰のようになってしまう。
「誰が彼の相手をするのかしらね」
「俺が相手をするしかねぇのか」
木の上から声が聞こえる。
そこにはビールの缶を片手に俺たちを見る、少し顔の赤い雷帝がいた。
「アイツを倒せるのはチームA、O、Zのなかでも俺くらいしかいないだろ」
「まだ、こっちには鯰とフェロモーサが」
「確かにその二人はいくら粉々にしたとしても、ほとんど無意味な能力だ。だが、二人には違う相手がいるだろう?今回の作戦がどんなのかわからんが、あまり考えてないだろう?話を盗み聞きしていた感じ、だいいちの狙いはエースの排除みたいだからな」
「作戦はあるわ。でも、エースがいる以上、作戦なんてあってないもの、まぁ、狙いは誰にも話さないようにしているけど」
「今さっきの猫も、イーグルにやられたからな・・・」
雷帝は飲み終わった缶を潰すと、木から下りる。
「まぁ、他のチームの作戦なんてツマミにもならねぇからよ、今回は帰るぜ。正直、そんな硬い話は嫌いなんでな」
「お疲れ様です。」
「また明後日な、俺は明日いないから」
「?・・・どうしたんですか?」

「ちょっと上の人間に呼ばれてるからな」
　雷帝はそう言うと、帰っていった。上の人間というのが少し気になっていたが、俺は深追いをしなかった。
「・・・邪魔がたくさん入ったわね」
「そうですね・・・。で、何でしたっけ？」
「もういいわ、私も疲れちゃったし。」
「・・・わかりました、それじゃあお疲れ様です」
★
　次の日の朝、雷帝は校長室に呼ばれた。
　真ん中に座る校長、その横にはリアが座っている。他、色々なチームの監督が座っているのが雷帝にはわかった。
　三つの長い机に三方向を挟まれた真ん中に雷帝がいる。いつでも後ろから校長室を出ることはできるが、そんなことはできるわけがない。
「君、卒業する気はあるのかね？」
「今年で７年の留年。ここまでの留年はいませんよ。あなたの同級生はすでに普通大学を卒業する、能力者研究などの仕事につくなどして、成果をあげているのに。あなたは何をしたいのですか？」
「そして校内での飲酒は禁止されているのに、あなたは戦闘中も飲酒してますよね？あと盗みを働いたのとの噂も」
　三方向から飛んでくる言葉に雷帝は耳を痛くする。
「君、今年度卒業できなければ、ここから退学してもらいますよ。・・・まぁ、あなたほどの能力があれば、電気会社にでも就けるでしょう。電力としてね」
　リアはこの言葉に雷撃を発動しそうになるが、リアの顔を見て気持ちを抑える。だが、歯ぎしりだけはやめなかった。
「今後、将来のことを考えてくださいね・・・以上です」
　雷帝はその言葉を聞き、静かに退出した。
「リア監督もあんなお荷物を抱えて大変ですね」
　リアの横に座るチームＰの監督がそんなことを言う。
「いえいえ、雷帝は私のチームのエースですから。彼をお荷物と思っ

たことはありませんよ」
その言葉にチームＰの監督は唖然としていた。
会議が終わった後で、さらに酒の量が増えた。
そして、今度は整備されていない立ち入り禁止の屋上で酒を飲み始めた。もちろん、俺自身の能力で、屋上に入ることは余裕だ。
将来か。この能力を誰に託すか・・・だな。
俺のなかでそんな決心がついていた。
俺の寿命はあと２年・・・
死神は少しずつ俺に近づいてきている。
「あーあ、またリアに怒られるな」
その日の空は、少し雲がかかっていて青空があまり見えなかったが、雲の間から太陽の光が屋上を照らしていた。

エリート二人組

エレベーターの着いた音がした。
リリーはコーヒーとイチゴ牛乳を両手にエレベーターの扉が開くのを待つ。
「ルナさん・・・大丈夫かな」
扉が空き、リリーは急いでエレベーターに入ろうとするが、中から出てきた男に当たり、倒れてしまった。
「おっと、大丈夫かい？」
青みのかかった髪に銀縁メガネの男はリリーを起こす。
「ご、ごめんなさい・・・あ！」
リリーの持っていたコーヒーが少しだけ、出てきた男のシャツにかかってしまった。
リリーはそれを見て、何度も頭を下げる。
「ごめんなさい！えっと、ど、どうすれば」
「あぁ、いいよ。このシャツ安物だしさ。それよりもケガはしてないかい？」
「あ、ごめんなさい。ケガは大丈夫です。」
「大丈夫ならいいんだが」
「何をグズグズしてるの！鯰！」
男のとなりに立つ女は男に強めの口調でそう言い放つ。
「フェローサ。ちょっと待っていてくれないか？」
「ったく、早く来なさいよね！」
ピンクのような紫のような色の巻髪と、少しだけ吊り上がった目の女は、リリーの姿を見てクスッと笑い、その場から立ち去る。
「ごめんね、こっちの不注意だしさ、気を落とさないで」
「鯰・・・フェローサ・・・まさか！」
「おっと、そろそろ時間みたいだ、僕たちも急いでてね。それじゃあ、気を付けるんだよ」
鯰は腕時計を見ると、フェローサを追いかけた。
「本当に、あなたは鯰ね！」

「まぁ落ち着いて、ちょっとした事故だからさ」
「・・・ったく、ちょっとは心を鬼にして接しなさいよ」
「僕は鬼が嫌いなんだ」
　リリーは二人が見えなくなるまで、二人の会話をジッと聞いていた。あの二人が、チームAを代表する有名な二人だと知っていたからだ。
「来る途中に、チームAの鯰さんとフェローサさんに会いました」
　リリーはルナの病室の窓近くの席に座るオルガにそう伝えた。そしてそのとき何があったかも順々に伝える。それを聞いた雷帝や四津野は、どこか困った顔をしていた。俺とクロサクとルナはそれを聞いて目が点になっていた。
「あの・・・その二人って？」
「あぁ、柊は知らなかったな」
「鯰とフェローサ。チームAのなかでも特に実力派の二人だ。どんなときでも二人で行動し、チームワークのとれた完璧な戦術をこなす、まさに完璧な二人だ」
「それに鯰の空気を固め、相手に向かって放つ能力と、フェローサの爆弾の粉は相性が良い。」
「的確な場所を狙うことのできる鯰とフェローサの超火力・・・狙われたら終わりだ」
　三人して、鯰とフェローサを誉めちぎるなか、リリーはその罪悪感に頭をさげてしまう。
「ごめんなさい、みなさん・・・」
「いいよ。それに今度の殿堂杯でやつらが俺たちを狙ってくることはないだろう」
「もしも二人が攻撃してくるようなことがあれば、俺が握り潰してやるぜ！」
「雷帝さん・・・」
　雷帝は手のひらに電気を溜める。そしてその電気を握り潰した。やっと顔をあげる。
「・・・話は変わるが、次の殿堂杯のことで、」

オルガが話し始めて少し経つと、病室の扉がガラガラと音をたてて開く。
「おっと、作戦会議中のところ失礼します。」
そこには艦が立っていた。
「何の用だ？」
「僕は別にかまわないのですが、フェローサがちょっと怒ってましてね」
「アンタ達！誰でもいいから二人、かかってきなさい！艦は別に良いなんて言ってるけど、私はもう堪忍袋の緒がキレてるのよ！」
リリーはオルガの前に置かれたテーブルのところまでくると、その上の皿が割れそうなくらいの強さでテーブルを叩いた。
「・・・ということなんだ。さっきから僕は気にしなくていい、って言ってるんだけどね」
「そこのアンタ！勝負しなさい！アンタがやったんでしょ！」
フェローサはベッド横に立つリリーを指差す。
リリーはまた顔をさげてしまう。
「さぁ、来なさいよ！」
「怒るとシワができちゃうよ～、君ィ？」
雷帝はフェローサの手を下に下げさせる。
「何よ、アンタ？」
「あー、俺のこと知らないのか？まぁ、アンタの相手になってやるから、そんときにでも教えるぜ」
「知ってるわよ！・・・アンタが相手してくれるの。老いぼれだからって手加減はしないからね」
「俺は手加減するよ、老いぼれでも年上だしね。もう一人は・・・クロサク頼むぜ」
「俺スか!?」
「あぁ、お前だ。お前しかいねぇよ。俺との訓練の成果をみんなに見してやれ！」
「・・・わかりましたよ」
戦場Ｂ。

森のような空間に少し開けた部分が、数ヶ所存在する戦場。この木は全てここの戦場を管理する能力の能力で作られており、燃えても次の戦闘では何もなかったかのように生え変わっている。
「雷帝とクロサク・・・おもしろそうね」
「監督ー、席空いてるぜ」
キラは真ん中に空けておいた観客席に監督を座らせる。その観客席の下部分には雷帝から取り上げた酒の入った瓶が置かれていた。
「ありがとう、オルガ、キラ。・・・話は聞いているわ。なかなか大変はことになったわね」
「雷帝は手加減するって言ってたがよぉ～、ちと無理なんじゃねぇか？ここ最近、本気で戦いてぇなとか言ってたしよ」
「そこは雷帝しだいだな・・・そろそろか」
「ルールは二人のどちらかが戦闘不能、または審判が審議を下したものが負けで」
「どーぞ、どーぞ。好きにしてくれ」
「・・・それじゃあ、戦闘開始！」
フェローサの合図で戦場にドラの音が響き渡る。
フェローサはポケットから親指くらいの大きさの瓶を取りだし、フィールドにばらまく。それを鯰が固めた空気の中に入れる。
「爆弾、発射！目標は雷帝！」
爆弾粉を含んだ空気は一直線に雷帝の方へ飛んでいく。
次の瞬間、爆発が起こった。
「当たってないじゃない！なんで爆発するの!?」
「俺を、忘れるなよ！」
爆炎が晴れたとき、そこにはクロサクが片手にエネルギー弾を持った状態で立っていた。
「そんな爆発で、俺が死ぬと思うか？」
「チッ！・・・次よ！」
クロサクはその俊足でフェローサの前に現れる。
（こいつ！なんて早さで！）
「これで、仕舞いよ！」

「フェローサ、何をしてるんだ？」
　鯰はすでに次の策を始めていた。
　フェローサの前に現れた空気の塊は、空中でエネルギー弾をかまえたクロサクを包み込み、地面に叩きつけた。
「僕らの爆弾が不発したことなんて、これまでの何度もあったじゃないか。彼らを少しなめすぎだ」
「・・・」
「君はいつもそうだ。たまには冷静に戦うことも大事だ」
「・・・うるさいわね！次の爆弾で、仕止めればいいんでしょ！」
「そういうことだ！」
　顔をあげたクロサクに待っていたのはフェローサの蹴りだった。フェローサの蹴りはクロサクの頬に当たり、また顔を下げる。
「ほらほらほら！さっきまでの威勢はどこいったの！」
「上・・・だぜ」
「上？・・・まさか！」
　フェローサが気づいたときにはもう遅かった。フェローサの頭上に雷がたまっていた。
「どうぞ、くらいあがれッ！」
　雷帝の雷はフェローサの体に直撃する。フェローサは雷をくらって足をふらつかせた。
　その瞬間をチャンスと思ったクロサクはすぐに起き上がって、片手にためたエネルギー弾をフェローサの顔面目掛けて投げる。
「フェローサ！」
　鯰は空気でフェローサを包んで、自分の方へ引き寄せる。
　空気の膜はエネルギー弾を受け流し、フェローサを防御する。
「クロサク！避けろーーーッ！」
「・・・え？」
　フェローサを攻撃するクロサクの耳に雷帝の声が入る。その声の方向には、雷帝が放った雷撃『獅子』がクロサクのすぐ側まで近づいていた。
　鯰はフェローサを囮にして、雷帝と鯰の対角線上に入るのを誘って

いたのだ。
「うわぁぁぁぁーーーッ！」
「クロサクッ！」
　雷帝の雷を受けたクロサクはその場に倒れ込む。
「ありゃりゃ、あれはヤバいね」
「雷帝の獅子が直撃したか・・・すぐにリリーを！」
　雷帝は雷を食らったクロサクから残った電撃を放電し、少しでもダメージを少なくしたが、クロサクは・・・
「ぐ・・・い、痛ぇぇぇッ！思ってたよりも痛かったなー！」
　クロサクは痛がるだけで、すぐに起き上がった。
「驚いたな、雷帝の雷を受けてすぐ立ち上がるとは」
「しかも、雷帝の技のなかでもかなり強い電撃を放つ獅子を食らって・・・もしかしたら器が大きいのかもね」
　器とは能力を使う人間が持つ、能力値を溜める部分である。それが大きいほど、能力を使っても疲労を抱えずに済む。今回のように能力を浴びても回復しやすくなる。
「さーて、やりますよ。まだ一人残ってるッスよね？」
「降参だよ。」
　クロサクが戦闘体勢に入ったとき、鯰はすでに降参していた。フェローサがほとんど再起不能の状態、戦う理由もないだろう。
「ルールは彼女が言った通り、『どちらかが戦闘不能になったら』だ。・・・それじゃ、また殿堂杯にでも」
　鯰はフェローサを空気の固まりで運び、戦場から外へ出た。

殿堂杯前日

ある個室にただ一人だけ、閉じ籠ってキーボードを叩く人が一人。壁は全面本棚で、全て空きスペースなく埋まっている。
「柊　海都。能力は狐による妖術デスか・・・。あの御方と同じ能力、と」
男はエンターを強く押すと、パソコンをスリープモードに切り替え、その部屋から退出する。
右手には分厚いファイル。左手には懐中時計を持って。
「彼に会いたいデスね、フフフ・・・」
★
「うううう・・・風邪か？」
大きなくしゃみをする。誰かが噂をしているのだろうか。
（夏風邪じゃないかい？）
「確かにこの前、エアコンをつけっぱなしで寝てしまった。その日の朝はすごい寒かったし、それかもしれないな」
俺は両手に持ったゴミ袋をゴミ捨て場に捨てると、その近くにある水道で手を洗う。
夏、服も全員が夏服になり、扇子や手うちわで何とかしのいでいる。教室に帰れば涼しいが、外仕事になると暑くてたまらない。
「まさか、殿堂杯前に教室の大掃除なんて・・・」
（そして、アンタはこんな暑いなかゴミを捨てるためにゴミ捨て場へ・・・）
「運悪いな。」
（まぁ、仕方ないよ。アンタがジャンケンで負けたのが悪い）
「それはそうだけど・・・」
（あの雪女でもつれてくれれば良かったじゃない）
「監督が、女の子にこんな暑いなか外に出させるのは悪いってよ。」
確かに玲華がいれば涼しいだろう。
「アノー、すみません」
「な、なんだ!?」

帰る途中、玄関前で声をかけられた。そこには雷帝と同じくらいの身長の男が立っていた。
頭にはクリーム色の小さなアフロが乗っており、右手には分厚いファイルを持っている。こんな暑いなか、服は数百年前の有名作曲家が着てそうな豪華な装飾の衣服を着ていた。
「私はチームAのゴウトと言いマス。あなたが柊さんデスか？」
「そうですけど・・・」
（チームAか。最近よく会うね・・・）
「私と戦いませんか？」
ゴウトは勢いよく頭を下げる。下げた勢いで頭のアフロが揺れた。
（どうする？相手はこれでもチームAだぞ）
それでも戦ってみたいというのはある。
「いいですよ。ただ、ここじゃちょっと」
「ありがとーございマス！場所を変えまショー！」
戦場F。
ここはとある城の中のような空間が広がり、壁にはこの学校の印が描かれた旗が掲げられていた。床には玉座に向かって一直線にカーペットが敷かれている。
「ルールはどちらかがギブアップしたらでどーでショーか？」
「それでいいですよ」
（私もそれでいいよ。とりあえず最初はこの人の能力を見ることから始めよう）
「それでは、開始デース！」
ゴウトはファイルを近くのテーブルの上に置く。
そして手のひらを合わせた。
「いきマスよー！はぁッ！」
「この雷！まさか！」
見たことのある雷が俺とゴウトとの間に突き刺さる。
それは雷帝のものより弱かったが、雷そのものは雷帝のものと同じだった。
「私の能力はストック。見たもの、感じたものを三つまで使えるとい

う能力デス。これはあなたのチームの雷帝さんの能力デスね！ふんぬッ！」
今度は、半透明な刃を作り出して攻撃する。
これは鯰の能力か!?
（あの能力やっかいだね・・・でも、もう二つは見た。残り一つだ）
「はァァァッ！せいッ！」
空を切る空気の刃を避けると、俺は幻術を放った。
刃によって上半身と下半身を切られた自分を。
「痛いデスか！痛いデスよね！やりましたよ！エースさん！」
「やっぱりか」
俺はゴウトの目の前に来たところで、ゴウトにかけた幻術を解く。
「・・・はぁ？」
俺の拳はゴウトのみぞおちを的確に刺す。
そして、ゴウトはそのまま後ろに倒れた。
「な、なぜ、ここに・・・？」
「お前の見ていたものは全て幻だ。二度と、俺を狙ってくるんじゃねぇぞ」
「ひ、ひぃぃぃぃッ！オタスケーッ！」
ゴウトは分厚いファイルを置いて、戦場である城から尻尾を巻いて逃げてしまう。
（かっこよかったよ、柊）
「は、恥ずかしいこと言うな・・・でも、少しは強くなってるよな」
「遅いじゃないか、何してたんだ？」
教室に帰ると、リアが待っていた。その後ろに呆れるオルガが見える。
「えっと・・・そのですね・・・チームＡのゴウトってヤツに喧嘩売られまして・・・」
「ゴウト？・・・誰だ？そいつは」
「え？昔の音楽家風のクルクルした髪の雷帝くらいの大きさの・・・」
俺は手でゴウトの髪型を表現する。
「そんなやついないだろ。」

「まぁ、いたとしてもあの人数だ。知らなくても普通だ」
　そこにいたオルガもキラもリアも、全員がゴウトを知らないという。
「三つだけ他人の能力を記憶して使えるという能力の」
「柊。それは反則、というよりいてはならない能力だ。もし、それがバレたらすぐにここから退学してしまう」
「本当にいたんですって！それにこのファイル！」
　俺はリアにゴウトが忘れていったファイルを渡す。
　そこにはチームＯメンバー全員の情報が書かれていた。
「これは！・・・どうしてそいつはこんなものを」
★
「失敗したよ。久しぶりにさ」
「君が失敗するとは・・・二年ぶりだね」
「フェローサの雷の粉と君の後方での支援。そして僕の演技。全て成功したと思ったんだがね」
　一人の男がカツラを投げ捨て、ポケットからタバコを取り出して指先に灯した炎で火を付ける。潰れた前髪を手でかきあげ、頭を左右にブルブルと振って元の髪型に直す。
「後藤。君、あのファイルはどうしたんだい？」
「あれには、フェローサの作った爆発粉と僕の爆発魔法陣を入れてプレゼントしたよ、柊君のページを捲った瞬間、ドカンさ」
「それは面白そうなことしてくれるじゃないか」
「満足してくれればいいんだがねぇ」
　後藤と呼ばれた男は燃え尽きたタバコを踏み潰すと、笑い始めた。
「・・・笑うのもいいが、大切な資料はどうするんだ？」
「それなら大丈夫。ちゃんとコピーしてあるからね」
「さすが、チームＡを裏で指揮する者・・・。アキネがあの座から降りたら、次は後藤の番だろうね」
「フフフ、これも全て、僕の計画通りだ」
★
　俺たちは何が起こったのかわからなかった。

ファイルは粉々になり、教室は火の海へと姿を変えた。
「だ、大丈夫か。みんな・・・」
「こっちは大丈夫だ」
窓の方にいた雷帝や四津野は無傷。ファイルを間近で見ていた俺とリアはその爆発の衝撃を直に体験した。
俺はファイルが光ったと同時に、後ろに下がったため、少し火傷しただけで済んだ。だが、
「監督!しっかりしてください!監督ーッ!」
「おい、リア!しっかりしろ!リア!」
オルガと雷帝の声にリアは反応しなかった。
「・・・すぐにリリーを呼んでこい!」
俺のせいだ・・・。俺があのファイルを持ってきたから・・・。
俺の脳裏にゴウトの顔と声が過る。
「ルナといい、リアといい・・・どこまで、俺たちを攻撃すれば気が済むんだ」
「・・・ここまでされると、私も怒らずにはいられないな」
「この殿堂杯・・・確かチームAの隊長が出るよな。どうするよ?オルガ」
好戦的はキラ、四津野、雷帝。そして冷静沈着なオルガはついに眉間にシワを寄せた。
「チームOの作戦変更。チームAのリーダー、エースを全員で倒しにいく」
★
鯰に待っていてと言われたが、私は鯰のことが気になって後を追い、屋上の出入口の扉に隠れるように立っていた。
「あれは後藤だったかしら・・・でも、なんで後藤と鯰が?」
鯰のすぐ近くに後藤が立っているのがわかる。服装はオシャレを気取っているのか、どこぞの音楽家のような服を着ている。
とりあえず、おかしいの一言に尽きる。
「・・・・・・ドカンさ」
遠くて二人の会話はほとんど聞こえないが、その一言だけは聞こえ

た。ドカン？確か、アイツの能力は炎とか、爆発だったはず・・・。次の殿堂杯の作戦会議かしら？
　私がそんなことを考えていると、けたたましい爆発音が校内をこだました。
「爆発!?・・・いったいどこで！」
「ヒューッ！爆発したねぇ！やっと起爆してくれたか！」
「順調に進んでるね・・・次はルナの病室ですか」
　私は二人がやってはならないことをしていることがすぐにわかった。それに気づいたときには、アキネのところに向かおうと足が動いていた。
「待っていてと言ったじゃないか、フェローサ。」
　さっきまで２００メートルくらい先にいたはずの鯰が私の手を空気で掴む。
「あ、アンタが遅いから、き、来たのよ！」
「・・・たまには僕の言うことを聞いてくれよ。・・・聞いてくれないから、こうなるんだよ」
　手を掴んでいた空気は私の体を包み込んだ。
「鯰・・・」
「眠っていて・・・少しの間だけさ」
「そんなことしちゃって大丈夫か？明日の殿堂杯、君とフェローサで」
「いや、これも僕の計画通りさ。君が出るんだよ、後藤」
　殿堂杯まであと１５時間後・・・

殿堂杯開始！

殿堂杯。それは親善試合と言う名の地獄。
殿堂の証をもらった５人が三つのチームから選出された１５人と戦い、才能のある能力者の芽を摘むというものだ。
特に今回は殿堂のさらに上のランク、伝説（レジェンド）を取るために二人の能力者が本気で戦うという。
一人はチームＫに所属する、破壊を好む能力者、イーグル・ウィント。
そしてもう一人はチームＡのリーダー、エースだ。
控え室にて、殿堂杯前の最後の作戦会議が行われてきた。
「今回は全員本気で戦え。特に雷帝は酒を持ち込むな」
「へいへい。」
雷帝は机の上に、普段から持っている酒の瓶を置いた。
「雷帝はクロサクと共に左から。四津野は自由に行動していい、妹と戦ってもかまわない。そしてキラと柊は右から、できるだけ敵との接触を避けろ」
オルガはピンマイクとヘッドホンをつけると、控え室から出ていく。指揮役であるオルガは指揮専用のモニタールームで指揮をしなければならない。
「俺らも行くか！」
キラは上機嫌だった。それもそのはず。いくら格上の相手といっても戦場でチームＯとして戦えるのが久しぶりだったからだ。
俺と四津野はキラについていく。
「クロサク、一つ話がある」
だが、部屋に残ったクロサクと雷帝だけは違った。
「どうしたっスか？」
「もしも・・・
そこから先の話は聞こえなかったが、いつもの雷帝と違うというのはすぐにわかった。
真剣な顔で、クロサクに何かを言う雷帝・・・。なんだろう嫌な予

感がする。

「ついに始まりましたッ！殿！堂！杯ッ！この学園の強者共が戦闘を繰り広げる最高で最強の祭典！司会はワタクシ、学園放送局長、加村がお送りいたします！今回の戦場はＡ、Ｂ、Ｆの三つのステージで戦ってもらいます！戦場のどこかに置かれたワープ装置を使用することで、他のステージに移動することが可能です！ワープ装置の場所は指揮のみが知っております！」

「そんなことはいい！早く始めろ！」

「こ、これは失礼しました！今回の解説はチームＯの監督に来てもらうことになっておりましたが、急遽大ケガをしてしまい、代わりにチームＺ監督、ドンさんに来てもらいました！」

ドンは司会のマイクを力で奪い取る。

「全員！今日は、悔いの無いように殺し会え！敵は殿堂！チームＺよ。勝利したものには褒美を与えよう！」

その言葉を聞いて、俺はチームＺが一斉に喜ぶかと思ったが、誰もマスクの奥から歓声の上がることなく、静まり返っていた。冷静なのか、人間味のない人間なのかわからないが、俺はそれが不気味で仕方なかった。

「それでは、全員配置につけ！殿堂共はすぐに来るぞ！ゲホッ、ゲホッ！」

「大丈夫ですか？・・・もう歳なんですから」

「ええい！そんなの関係ないわッ！全員、試合開始だ！」

作戦通り、俺とキラは戦場Ｆ、王宮内の右の壁近くの道を進んでいく。

歩いていると、一人の男を見つけた。あの武装は確か・・・

「おぉ、大和じゃないか！」

数日前にあった大和が王宮内を歩いていた。前よりも重装備な大和はキラを見つけると、ゆっくりと歩いてきた。

「キラ！今日は味方として頼むぞ」

「おう！任せとけ！」

キラはその右腕に力こぶを作る。タンクトップから弾けそうな大胸筋はいつもより厚くなっている気がした。
「それで、そっちはどういった作戦でいくんだ？」
「ん？そんなの簡単だ！片っ端からぶっ潰す！それだけだ」
「相変わらずの脳筋だな、キラは。ちょっとは考えて動かないのか？」
「毎回考えているさ。どうすれば敵の顔面や急所を捕らえることができるかってな」
「・・・確か、柊君だよね？今日はよろしく頼むよ」
「こちらこそよろしくお願いします！」
「良い返事だ」
そんな話をしていると準備時間の終了を告げるサイレンがなる。
このサイレンがなり終わると同時に、ワープ装置から殿堂入り六人が現れるという。
「よし、来いーッ！殿堂ッ！」
「とりあえず移動しよう」
俺たち三人は王宮の二階にあるワープ装置のところへ走っていった。

「始まったスね」
「だな・・・」
クロサクと雷帝は戦場Ｂの森林地帯を歩いていた。
クロサクは緊張のあまり、少しだが震えていた。
「緊張してるのか？」
「雷帝こそ、いつもの雷帝らしくないっスよ。」
「酒を飲んでないときはいつもこうだ。・・・冷静に物事を考えたくないから酒を飲むんだ。案外、こんな面をしてるが怖がりなんだ」
「意外ですね」
怖がりとかそんなことを言うが、それでも雷帝の強さは滲み出ている。経験と実績、そして能力が雷帝の強さを示していた。
「クロサク・・・言ったことは覚えてるな」
控え室。

「雷帝・・・それって」
「もう一度言う。俺の余命は残りわずかだ。そして、もし俺が死ぬことがあったら、お前にこの力を継承しようと考えた」
「そんな・・・でも、まだ２８なんじゃ・・・」
「俺の種族は短命で、一般人の倍の歳を食っている。２８ということはつまり」
「５６・・・てことスか？」
「そうだ。そして俺は５７で死ぬ。」
「もしもということがあったら、俺はお前に力を渡す。そしてこの世を去ることにした。お前は唯一、俺の雷を受けて何事もなく立ち上がった男だ」
「・・・」
「つまりそれなりの器を持っているということだ」
「アンタは・・・アンタはそんな弱い人間だったのかよ！俺の尊敬する雷帝はどこいったんだよ！」
グオンッ！
何かが二人の上を通りすぎる。
「外したか・・・」
クロサクはそれが飛んできた方を恐る恐る見た。
そこにはイーグルの姿があった。
「話しているところをすまない。・・・俺のために死んでくれ」
「クロサク！逃げろ！」
雷帝はクロサクを突き飛ばす。
イーグルの右手は雷帝の右腕に触れていた。
「ふぅんぬッ！」
雷帝は近づいてきたイーグルに頭突きを入れる。
右腕は触った部分から粉々になっていく。
「ぐあああッ！」
雷帝は体まで上らせまいと、右腕を切り落とした。
電気に戻った右腕は空中で消え、その頃には雷帝の右肩からは新しい腕が生成されていた。

「雷の能力者、雷帝・・・。最後がこの人とは、俺も運が良いな・・・。ゲームで最後の最後に出てくるボス、ラスボスみたいなものか」
「クロサク！一度、逃げるぞ！」
　雷帝は左手でクロサクを抱きかかえると、その場から退散した。クロサクの視界には晴れた空と灰になっていく木の枝と葉が見えていた。
「オルガ、ワープ装置はどこだ！」
「ここから少し離れた場所にある。その道を進めば、着くが・・・！雷帝、上だ！」
　雷帝は上を見る。イーグルが木から木へと飛び移って追いかけてきていた。
「ッ！・・・ここで戦わないとか！雷撃、鳥！」
　電気で作られた鳥のような形の攻撃が、上にいるイーグル目掛けて飛んでいく。だが、イーグルはその攻撃をその手で消してしまう。
「覚悟をッ！ええいッ！」
　地面はイーグルの能力によって地盤沈下を起こす。それに二人は巻き込まれた。
「ッ！雷撃、蛇！」
　雷帝の手のひらから鞭のような蛇が飛んでいき、共に地盤沈下に捲き込まれた木の枝を掴む。
　左手に掴んだクロサクを上に向けて投げると、落ちていくイーグルに向かって雷を放つ。
　イーグルは雷を手のひらで受け止めると灰にした。
「・・・ハッ！ら、雷帝！」
　宙で気絶状態から目を覚ましたクロサクは、下に落ちていく雷帝とイーグルを見ることしかできない。
　雷帝はクロサクが起きたことに気付くと、手のひらに雷を作り、大きな鳥へと変えた。
「上で待ってろ！こいつを倒したら、すぐにそっちにいく！」
　雷帝の雷で作った大きな鳥はクロサクを乗せると、うえへと飛んでいく。

「雷帝ーーーッ！」
地面が崩れて、その下の階へ落とされた二人は瓦礫が降り注ぐなか、静かに見合っていた。
相手の力がわかっているからだ。二人とも、相手の強さを理解しているから動こうにも動けない。
そこで雷帝はあることを切り出した。
「ここにコインがある。これが落ちた瞬間が勝負だ」
「いいだろう。」
雷帝はポケットに入っていたパチンコのコインを上に向かって投げた。
コインが落下していくのがとても遅く感じる世界に雷帝は拳を構え、イーグルは手のひらを向ける。
そして今、コインは落ちた。

雷帝よ、永遠に

コインが落ちた。
次の瞬間、イーグルの周りに雷の牢獄が作られる。
「ッ！こいつ・・・」
「最初から正々堂々やる気はねぇ！お前を倒す！それだけだ！」
牢獄の四方から放たれた雷を避けたイーグルは、牢獄を能力で破壊して突破するが、その先にも雷帝の罠は置かれていた。
それは電気の貯まったコインだった。
「畜生！気づいたか！」
「こんな罠にはまるか！」
イーグルの手を雷帝は紙一重で避けていく。たまに、髪や服を攻撃することはあるが、その程度では体まで破壊できない。
「せいッ！」
雷帝は近づいてきたところを雷をまとった拳で攻めるが、イーグルはその拳を手のひらで受け止めた。
雷帝はすぐに自らの手を切り落として逃げる。
「雷撃、兎」
雷帝の足の裏から飛び出した兎はイーグルに向かって飛んでいく。だが、イーグルはそれを羽織っていたコートでかき消した。
「雷帝、もう終わりだ。」
雷帝の逃げた先は行き止まりだった。
イーグルは雷帝に少しずつ近づいてきた。
「終わりだな。雷帝・・・」
「あぁ、お前の終わりだ！イーグルッ！」
雷帝は両手を地面につけた。地面は光始め、地面から壁まで雷が壁材を押し上げ始めた。
「あの兎はダミーだ。これを発動させるためのな！」
雷はそのまま立っていたイーグルに襲いかかる。
避けようと後ろに下がったときにはもう遅く、イーグルに攻撃が当たり始めていた。

「ぐあああああッ！ぐ、だが、俺は負けん！」
「な、あのなかをやつは動けるのか!?」
「ぬぉぉらッ！こんなことで負けてたら、殿堂やってられんわーーーッ！」
手を伸ばして、その雷のなかから雷帝を掴もうとする。
雷帝はジリジリと近づいてくるイーグルを警戒して一歩ずつ下がる。
次の瞬間、雷の中から一気に飛び出したイーグルの手のひらは雷帝の右肩を触れた。
「ッ！・・・しまった！」
破壊に抵抗しながら、少しずつヒビが入っていく雷帝を見て、イーグルは少しずつ手を近づけていく。
「さらに促進させてやろう」
イーグルの手があと少しで触れそうなそのとき、
「でりゃぁぁぁぁぁぁぁッ！」
上に投げられたクロサクは片手にエネルギーを溜め、イーグルの伸ばした右腕目掛けて落ちてきた。
肘から曲がってはいけない方向に曲がった右腕はそのまま、下に落ちて燃えてしまう。
「このガキが！」
イーグルの逆鱗に触れたクロサクは、イーグルの重たい蹴りを食らって這いつくばる。
「あ、がぐ、がはっ・・・」
その蹴りによってクロサクの脇腹の骨が折れ、肺に刺さる。そして痛みや苦しみを吐き出せないクロサクの声が、壊れていく雷帝の耳に入ってくる。
「き、キサマ・・・」
クロサクが苦しみもがくのを見た雷帝の脳裏にとある二文字が過った。
「やるしか・・・ないのか」
雷帝は立ち上がると、崩れていく右肩をわざと左手で破壊した。

「何をしている！雷帝！」
　イーグルもその光景に思わず、重たい口を開けた。
「クロサク！お前とのこの数ヵ月間。なんやかんや、色々とあったが、俺の能力を使いこなせるのはお前しかいないということがわかった」
「ら、雷・・・帝・・・」
　クロサクは苦しみのなか、雷帝の方を見る。
　そのときの雷帝はすでに右肩から先がなく、心臓部や顔半分にまで破壊のヒビは達していた。
「頼むぞ！チームOを・・・みんなを！」
　雷帝は残った左手を倒れたクロサクに向ける。
　雷帝の足にまでヒビが入り始め、そこから雷が漏れ始める。
「俺の能力！承けとれ！クロサクーーーーッ！」
　クロサクは次の瞬間、体に雷が落ちたような衝撃に襲われた。肺に刺さった痛みが弱い痛みに感じるくらいの雷撃が、クロサクの能力値の器に異変を起こした。
　能力者は器を持っている。能力値はそこで作られ、そこに貯められる。器が大きければ大きいほど能力者としての才能があり、能力への耐性が強いということだ。
　雷帝の雷はクロサクの器を大きくし、そこに雷帝の元々持っていた能力値が注ぎ込まれていく。
「耐えろ！それさえ耐えれば！お前は進化できる！さらに上へと！」
　イーグルは目の前で起きたことが未だに信じられなかった。この五年間、この学校で様々な経験をしたが、こんなことが起きるのは初めてのことだった。
「能力を引き継いだというのか・・・？」
　煙のなか立ち上がる男は雷をまとい、さっきまでのダメージがほとんど回復し、最初にあったときとは全くの別人のようだった。
「これが、雷帝の力か・・・いくぞ！イーグル！」
　最初の一歩はとても弱そうだったが、その次からは違った。その一蹴りで、イーグルの顎をとらえていた。
「ぐあぁっ!?」

イーグルは瓦礫の山に飛んでいく。
「これがクロサクだというのか・・・」
「雷撃、跳弾！」
クロサクの右人差し指の先から放たれた、銃弾の形をした雷のエネルギー弾はイーグルの腹部を貫き、壁の亀裂を反射して膝を撃ち抜いた。
「ッ！足が！」
イーグルは転び、地面に叩きつけられる。
クロサクはまた指先から次の銃弾を放った。
「この野郎！」
イーグルは左の手のひらで銃弾を破壊すると、手のひらにエネルギーを溜めて放つ。
「エネルギー弾など、それなりの能力値さえあれば誰しもが撃つことができるものだ！・・・殿堂をなめてもらっては困る！」
イーグルのエネルギー弾は次の銃弾もかき消すように飛んでいくが、跳弾と名付けられた雷の銃弾は、エネルギー弾をも反射して地面や壁への反射を繰り返して、イーグルへと飛んでいく。
「跳弾は狙ったものを必ず仕留める銃弾だ」
「何ぃ!?」
イーグルは左の手のひらで破壊することができず、銃弾を左肩に受けてしまう。
「俺は雷帝から戦い方以外に色々なことを教わった。そして自分自身に自信を持つことを教わった！俺はお前みたいな根の腐った野郎には負けない！」
「ッ！調子に乗るな！」
イーグルの左腕はすでに動かなくなっていた。
「雷帝、この戦闘が終わったら、すぐにお前の墓を建てにいく。約束だ」
★
「戦闘終了！殿堂のイーグル・ウィント、戦闘不能だーーーーッ！」
会場が一度静寂に包まれた後、一気に歓声によって盛り上がった。

それを聞いて、隣にいたキラはそっと胸を撫で下ろす。
「雷帝からやクロサクからの情報は途絶えたけど、倒せたみたいだな」
「ですがカメラの映像に雷帝選手の姿がありません！クロサク選手と戦闘不能のイーグル選手の姿はあります！もうすでに違う場所へと移動しているのでしょうか？はたまた、どこかでカメラでとらえられないだけでしょうか？」
俺たちは司会の言葉に思わず、言葉が出なくなった。
司会は濁したのかわからないが、俺はその言葉選びに「雷帝の死」を考えた。
「う、嘘だろ・・・雷帝が・・・」
キラもそう考えたようだ。
「続いて、戦場Ｆの王宮前でも戦闘が行われているようです・・・なんと、チームＺのほとんどがすでに戦闘不能になっているではありませんか！相手は殿堂の二人！精神の具現化、阿修羅の使い手の修羅選手と、天使が一人、ツバサだー！対するはチームＺのアリス選手のみです！」
俺とキラはそれを聞いて、王宮の扉を見る。
そのときにはすでに遅かった。カメラと映像で少し差があるのか、扉は破壊され、破片がそこらに飛び散り始めていた。
「カァーーッ！いるねぇ、いるねぇ。チームＡとチームＯのお荷物がさァ！」
その男は後ろに六本の腕を持ち、三つの顔を持った阿修羅のような形の何かを出し、そいつの前で笑っていた。
赤い短髪は逆立つように立ち、上下黒ベースに赤いラインの入ったジャージと、動きやすい格好をしている。
見るに、後ろのそれが戦いそうだが・・・。
「知らない人もいるみたいだから、言っておくぜ！俺はチームＵの隊長、三年の修羅様だ！好きな言葉は正々堂々だ！よろしく！」

キラの能力

「逃げろ、柊！」
　キラは俺の襟を掴むと、窓から外へ投げ飛ばした。
「キラさん！」
「お前はエースを倒すための鍵だ。お前だけは逃げろ！」
「・・・わかりました！」
　俺はできるだけそこから遠くへ逃げることにした。オルガの情報だと、少し走った先に仲間の反応があるという。チームＺはアリス以外戦闘不能。ということはチームＡのメンバーだろう。
★
「チッ！逃がしたか・・・まぁいいや、あとで倒しにいけば良いしな。」
「あとで・・・か。お前にあとがあればな！」
「俺たちはお荷物と言ったことを、後悔するがいい！」
　先手必勝と、大和が肩に背負った砲台から、ミサイルを放った。
　大和の武器の弾は能力値によって威力や形が変化する。特に肩や腕につけたものは、自由にミサイルを放ち、自由に砲弾を放てるだろう。
「そんなミサイルなんて、俺の阿修羅の前では無意味だよ、残念だったねぇ」
　阿修羅は飛んできたミサイルを破壊する。
「いや、残念じゃねぇ」
　だが、キラはミサイルが壊れるその一瞬で、すでに修羅の後ろに回っていた。
「な、なんだって、ぐあっ!?」
　キラの拳は修羅に届き、阿修羅ごと地面に叩きつけた。
「お前が余裕ぶって目を閉じた瞬間を待っていただけだ。俺はお前が阿修羅に防御を任せるとき、余裕ぶるのを知っている」
「そして、俺がすでに次のミサイルを撃っているのを知っているかい？」
　修羅が顔をあげたとき、すでにそこにミサイルがあった。

「う、うわぁーーーッ！」
修羅はそれを防げずに、次の攻撃を食らってしまう。
前には大和、後ろにはキラ。修羅は絶体絶命な状況に立たされた。
「ち、畜生・・・うぅ、よくも・・・俺をコケにしてくれたな！」
「おうおう、殿堂様が泣いてるぜ」
「最後の〆といくか？キラ」
「おうよッ！遅れるなよ、大和ーッ！」
二人はこの攻撃で修羅を倒そうとする。だが、
「俺の嘘に踊らされて、楽しかったかい？」
二人は思いっきり、阿修羅によるカウンターをくらってしまう。
キラの拳は阿修羅の拳によって届かず、大和のミサイルは阿修羅の口から放たれたビームによって撃ち落とされ、そのまま大和の右肩に装備された砲台を破壊した。
「阿修羅、第二形態！ヒーローが強くなるのは常識だろぉ？」
「この・・・」
「野郎が・・・ッ！」
キラは左腕を負傷し、大和は右肩の砲台を破壊された。
「俺の阿修羅は強いぜ！そんなパンチと、そんなミサイルで死ぬと思ったか？」
修羅は阿修羅の手の上に座り、笑い始める。膝をつき、腕を押さえる二人を見て、バカにするような笑い方をする。
二人の堪忍袋の緒は今にもキレそうだった。
「大和、第二形態だってよ。だからどうしたって感じだよなぁ？・・・大和？」
「このくらいの傷、何てことはない・・・」
大和の右腕は上がらなくなっていた。キラの左腕の負傷が軽傷に聞こえるくらい、大和の右肩は砕けていた。
壊れた砲台や、腕につけた盾をぶら下げてこれから戦うとなると、とても戦いにくいだろう。
「キラ、早く倒すぞ・・・。これは本当にヤバイやつだ」
「無駄だよ。お前たちはここで死ぬんだ。まずはお前から倒してやろ

う！」
阿修羅は大和に向かって放たれる。
今、修羅は無防備だが、キラは大和を助けることを優先した。
振り上げられた阿修羅の拳をキラは右腕で受け止め、右足で阿修羅の脇腹を狙う。だが、阿修羅の他の腕がキラの右足を掴んだ。
「ハハハッ！そのまま、足を折ってしまえ！」
「ぐぁぁぁぁッ！」
キラはもしものときにと、護身用に持っていた設置型の爆弾を阿修羅に向かって投げた。
「無駄だ、阿修羅はあくまでも精神の具現化！透明にすることも可能だ！」
「違うぜ、透明になることを狙ったんだ」
透明にすることで、キラは阿修羅から逃げることができた。そのままの勢いで、修羅への攻撃を図るが、もう一度現れた阿修羅によって、攻撃は防がれた。
「おいおい、チームOの悪魔がその程度かよ。前に戦ったときは、真っ黒に肌の色を変えてな！」
「・・・俺はあの頃の俺を捨てた。海都、ルナ、クロサク。後輩ができて俺も、正義として戦わなくてはならなくなったからな」
「へぇ、お前にもそんなプライドがあるんだ」
「だが・・・今の俺には関係ない」
キラのつけたイヤホンの先、そこではオルガが指揮を送っていた。キラの能力発動の権利は常に、オルガが握っている。
オルガは周りの柊がいないことを教えていた。
「行くぞ・・・我が心と体、黒く染まれ。悪魔を受け入れる！」
キラの心臓部から闇が放たれる。それはキラを包み込み、闇が全て放たれたときには、肌が黒くなり、髪の毛と筋肉以外の凹凸を全て失った、アイススケートレーサーのような姿になっていた。
「この姿になるのも久しぶりだな。約一年ぶりか？」
「これが、キラの本当の能力・・・悪魔の契約か」
キラの能力はその身を悪魔に捧げることで、悪魔の力を扱えるとい

うもの。普段からのちょっとした魔法もこの悪魔の契約に入る。ただ、キラの悪魔の契約は体を売りすぎてしまうので、オルガから止められている。
「さぁ、始めるぞ・・・デリャァッ！」
キラの姿は一瞬で消えた。
「な、いつの間に！」
その場にいた全員が見失う速さで、修羅の後ろに現れたキラは修羅の阿修羅の攻撃が届く前に、修羅を蹴り飛ばす。
「あの状態になったキラの速度はまず見失う。・・・あそこのリーダー、オルガなら見えるんじゃないか？」
一人言を呟く大和は、使い物にならなくなった右肩の砲台を取り外していた。
「ッ！」
「殿堂だよなぁ？経験値はどこにいったんだい？」
「なら、俺の阿修羅はまだ第三形態を残している！」
修羅の後ろにいた阿修羅はその身を霧のような姿にし、修羅を覆う。
「これが第三形態！精神の装備（スピリットアーマー）だ！これさえあれば、お前なんて」
「それは知っている。予想範囲内だ・・・と、オルガなら言うだろうなぁ」
キラはオルガの指揮でその力を解放できる。普段はその能力の代償のせいで、力を制御されているが、今日のキラは一味違う。
「まぁ、俺は知らねぇけどな！」
阿修羅を纏った修羅ですらも、力を解放したキラの前では歯が立たない。
「な、俺が負ける!?ふざけるな！ありえない！絶対に俺が勝つ！」
「そんなプライド、俺がへし折ってやるわッ！」
二人の拳が真正面からぶつかり合う。
キラの腕にはその衝撃によってヒビが入ったが、修羅の腕はそれ以上のヒビが入り、割れてしまった。

「精神の具現化。壊れたということは、ヤツが心から敗北したということだ」
「修羅、戦闘不能！すごい、イーグルに続き、チームＺのほとんどを倒した修羅を倒すことに成功したーーーッ！」
　観客はその光景に歓声が止まない。目の前で、思ってもいなかったことが行われているからだ。勝てないと思われていた殿堂に二人が立て続けに勝ったからだ。
「いける、これなら・・・今年のチャレンジャーは違うぞ！」
　思わず、観客席で見ていたチームＡの監督が拳を上にあげた。自分のチームのメンバーによる勝利ではないが、それでも嬉しいのだ。
★
　そんななか、王宮の前では・・・
「さすが、殿堂に近い女戦士のアリス・・・」
　殿堂の一人、ツバサが苦戦を強いられていた。チームＺがどんどん倒れていくなか、一人だけ無傷で立つ女がいた。
「あれ？もうおしまい？それでも殿堂かな？」
「煽らない方がいい、僕を起こらせるのだけはやめておいた方が身のためだ」
「今の君の姿を見て、まだそんな口が叩けるのか？」
　片翼を折られた天使、そんな二つ名が相応しい体になったツバサはすでに大粒の汗と大量の血を流していた。
　アリスの武器は小さなナイフとちょっとしたハンドガン。そして左腕にはアリスの顔くらいの大きさの盾が付いていた。
　と、言ってもアリス自身はウサミミの特徴的なフードを深く被っているので、顔はほとんどわからない。
「なめるなッ！」
　ツバサは手から青く光る軌道修正可能な矢を三本放つ。
「もう飽き飽きだよ、そんな攻撃」
　アリスはそれをアクロバティックに交わし、一本を盾で地面に叩き落とす。そして軌道を変えて飛んできた二本の矢を銃で撃ち落とす。
「さぁて、次は君の番だ。まだ何人か殿堂がいるのにも関わらず、君た

ちのような若人の殿堂を参加させたことを後悔するといいさ」
「う、うわぁぁぁぁッ！」
「ツバサ戦闘不能！これで残り二人になった！」
★
　戦闘が終わると共に、アリスは森のなかに消えていってしまう。
「アリサ、もう十分でしょ？」
「ごめんね、有栖川。でも、久しぶりに戦えて嬉しかったわ。・・・で、次は？」
「残りは任せてもう帰ってきて。そろそろ、カラスが気づきそう」
「了解。それにしても、殿堂も弱いね」
「ちょっと失礼、お嬢さん」
　リタイアしに行く途中のアリスを誰かが後ろから止める。そこにいたのはチームＡの鯰と後藤だった。

千と万

一方戦場Ｂでは・・・

「戦場Ｂ、こちらでは完全な森林地帯のなかで二人の女子が戦っております！一人は殿堂の一人、相手の動きを止める力を持つ能力者、四津野　万理！そしてもう一人はなんと、無能力者の一人、その身体能力を生かした戦い方をする戦士、四津野　千理だ！」

「二人は姉妹。それに使用武器は剣と刀。さすが姉妹といったところだな」

私は、今日こそ妹に勝たないといけない。

私はここに来て大きな差を作ってしまった。

「チームＴ、２年生。四津野　万理」

私の前を通り、壇上に上がって表彰される。

「四津野　万理。今日より殿堂の一人として、能力者の代表の一人として、訓練や授業、あらゆる場面で代表として貢献できるように」

「ありがとうございます。」

あの一件があってから私と妹の間に高く分厚い壁ができた。

「おい、四津野！お前の怪物じみた身体能力はどうした！このままじゃ今回も負けてしまうぞ！」

「すみませ・・・」

「お姉ちゃん、今回も私の勝ちみたいだね」

「しまった！」

「ここで試合終了！やはり殿堂の一人、姉を越えてさらに先へと進むか!?」

「これで、三回目・・・二度あることは三度あるとはこれを言うのですかね」

私は弱かった・・・

けど今は違う！

今日こそは万理に勝つ！

今日までキラやオルガ、柊やルナや玲華ちゃんと鍛えてきた。能力者との戦い方をさらに勉強し、実行し、そして今、ここに立っている

んだ！
「お姉ちゃん、今日もごめんね」
　万理の能力は相手の動きを止める能力。具体的には万理が能力を発動した5秒間に、目に見えた動いているものを止める能力。
「情け無用！」
　万理が能力を発動したとわかったとき、その視界から消えればいいんだ。
　千理は万理の目が光った一瞬を見逃さなかった。
　千理は地面に胸を擦らせるくらいまで潜らせ、左手で万理の顎を上に押し上げた。
「目が上を見た今なら、攻撃できる！」
　だが、万理も体が仰け反り、千理の剣を避けた。
「甘いな、お姉ちゃんは」
　万理はすぐに千理を見る。
「そんなこと言ってられるのかな？」
　そのとき、万理の視界に千理と共に、もう一人の姿が入ってきた。
　それは万理自身だった。
「メデューサって知ってる？ここ最近、初めて知ったんだ。昔から本なんて頭いたくなるから読まなかったけど、たまには開いてみるもんだね」
「ま、まさか・・・」
「リアに頼んで作ってもらったの、この剣をね！」
　今日、千理が持ってきた剣はいつもの物と違かった。それは鏡のような相手がくっきりと写るくらいの仕上がりになっていた。
「でも剣じゃダメだったなー。だって、私の体も止められちゃったから」
　二人はその場で止まっていた。解除したくても、解除したら千理が来る。その場で止まっていることが一番平和で、一番安全だということを万理は気付いた。
「・・・負けたよ、お姉ちゃん」
「ここで四津野　万理選手リタイアだーッ！ついに、ついに姉妹対決、

姉が！四津野　千理が勝ちましたーッ！」
「やっとか・・・もっと正々堂々勝ちたかったけどなー。とりあえずさ、解除して」
★
「残りはこの俺だけか・・・」
「今日こそは、俺の槍が火を噴くぜ！」
「アレックス・・・お前が敵か」
　赤い槍を持ったアレックスと呼ばれる男が、狐の上に座るエースの前に立つ。
（エース、やれるか？）
「勿論」
　アレックスは槍を上で回しながら飛びかかる。
「食らえ！伸縮自在の炎の槍を！」
「お前じゃ到底、俺には敵わない」
「な、え？ぐぇぁぁぁぁーーーッ！」
　アレックスは次の瞬間、槍を折られて後ろのビルの二階に投げられた。
「さて、次は・・・お前か」
（あの槍、大丈夫かなー？）
「大丈夫じゃねぇの？ま、俺には関係ないけどな」
　エースの前に現れたのは柊だった。
　柊は横にタマを出し、すでに戦闘体勢に入っていた。
「お前が最後だよな？」
「・・・聞いたぞ、アキネから俺を倒せと言われてるらしいな」
「そうだよ。」
（アンタのところの副隊長、アンタ倒して隊長狙ってるみたいね）
「ほぅ・・・。この戦場に来てないのが残念だよ。目の前で君がボロボロになって死ぬところを見せられないのは」
　エースは自分の狐を体にしまうことなく、そのまま走ってきた。
　エースの狐は身に纏うタイプなのか、その拳に爪のようなものが見える。

「日の浅い小僧に、この俺を倒せるとでも？」
エースは俺の放った炎を裂いて、俺を攻撃する。
俺は間一髪でそれを避けると、エースの体に妖術で作った炎を叩きつけた。だが、エースには全く効いていない。
「お前は、狐術を使えないのか？」
「・・・何？コジュツって？」
（狐の術と書いて狐術。妖術はあくまでも妖怪専用のもの。狐術はさらに上、稲荷神などが使う力。私じゃ無理）
「憑き狐に聞かないとわからない・・・か。そんな狐のことも知らない小僧が俺に狐で挑むのか！」
エースは爪をしまい、手のひらから刀を作り上げる。
「これが狐術の一つだ。狐術は妖術や魔術、さらには錬金術までも超越する神の術！それもできぬ、狐はただの妖怪だ！」
俺はアレックスが持っていたと思われる槍の刃と柄の部分で、エースの剣に対抗するが、力では勝てるはずがなく、はじかれてしまう。
「狐術は全ての術を超越する！それを使えぬ狐も、憑かれた者も弱者だ！・・・狐術、雷剣（タケミカヅチ）！」
剣が振り下ろされると共に発生した雷は辺りを炎の海に変えた。
「狐術、鎌鼬！」
次はその剣が横に振られ、そこから斬撃波のようなものが飛んできた。斬撃波は俺の腕や足を掠める。
「狐術、業火！」
そして炎はさらに燃え広がり、俺の退路を閉ざした。
「さぁ、退路はない！目の前にいる俺と戦うのみだ！」
エースは剣を構え、炎のなか俺に向かって走ってきた。エースの羽織るマントは少しずつ燃え広がり始めたが、足の進みには全く関係ない話だ。
「いくぞッ！」
「あのとき以来だな、こうやって戦場で会うのは」
俺の前に現れた男は目から衝撃波を出し、炎のなか向かってくるエースを弾き返す。

「だが、今日は仲間だ」
「東条・・・シュウ・・・」
「やはり、殿堂杯に出させない方が良かったか。シュウよ、お前は裏切るのか」
「あぁ、裏切る。なぜなら、お前がこれまでにやってきた闇取引を全て知ったからな」
「ッ！アキネか。・・・だが、そんなことはもういい。監督よ、俺はすでに、新たな世界へと進むための切符を得てしまったからな」
「何!?」
俺の前で行われるチームＡ同士の会話。俺には訳がわからなかった。
「ときに小僧よ、この学校に存在すると言われる三神の話を知っているか？」
「三神？」
「知らぬか・・・。言わば、俺と小僧は狐の神によって力を得ている。シュウの目は破壊神、小僧のチームの榊原　玲華は創造神によって力を得ている。・・・わかるか？」
破壊神と創造神だけなら理解できる。だが、なぜそこにタマやエースの狐の類いが入ってくるのか、俺にはわからない。
前に破壊と創造の二神なら話を聞いた。そのとき狐は出てこなかった。
「俺は創造神を復活させる。それを目標にこの地位まで上り詰めた。そして、ようやく今日、手に入れた！殿堂の次、伝説の座をな！」
「伝、説？」
「それも知らぬか。まぁいい、ここで死ぬのだからな」
「来るぞ！」
「なぁ、アイツはいったい」
「今は、ヤツから逃げることを考えろ！ここにいたらいずれは死ぬ！」
俺たちはすぐに炎の海を走って、近くにあったワープゾーンに入る。
「チッ！逃がしたか。」

（だが、いずれかは我らのもとに来るだろう。ヤツの目的はお主の命だからな）
「ワープゾーンの同時通過は二人まで、次に入る場合は３０秒はかかる」
　俺たちがワープした先は戦場Ｂの森林地帯で、大木の根元の穴から出た。
「危なかった・・・ということか」
　俺は額の汗を拭い、頭を抱えた。
「あれほどに怪物だったとは・・・」
「チームＡの隊長って聞いて強いと思わなかったのか」
「予想以上ってこと。雷帝と同等かそれ以下かと」
「雷帝なんて酔っ払いに負けるヤツじゃない。ヤツは今、伝説になった」
「悪いけど・・・伝説って？」
「簡単にいうと、殿堂の上だ」
「理解できた。・・・そんなのに勝てと、お前の姉は言ったのか？」
「そうだ。なんで雷帝じゃなく、こんなヤツに」
「こんなヤツにとはなんだよ」
「こんなヤツはこんなヤツだ」
「・・・」
　森のなかに少しの間静寂が続く。戦っている人数も減り、今となっては俺とシュウとエースだけだろう。
「聞こえるか、柊」
　耳に付けた小型通信機からオルガの声が聞こえる。
「とりあえず生きてます」
「それは知っている。・・・いいか、驚かないでくれ。大事な話がある。」
「大事な話？」
「雷帝が死んだ。エースを倒す確率のあるものは残っていない。」

エースと雷

「ちょっと失礼、お嬢さん」
　止められたアリスは後ろを振り返らず、そのままどこかへ行こうとする。
「俺たちと話しようぜ？なぁ、アリスさんよ。いつもの話だぜ、いつもの。」
「・・・何？私はもう研究室に戻りたいんだけど。指揮のカラスから撤退命令来たし」
　アリスは歩みを止めない。そのまま、リタイアを申請する連絡用の機械へと向かっていた。
「・・・今はカメラのないところですから、話しましょうよ・・・」
　アリサ・ハズソードさん？
　鯰の呼んだその名前に、アリスは足を止める。
「な、何を言ってるの？私は有栖川」
「それはウソっぱちだろ？ホントはアリサ」
「それ以上、言わないで！・・・チームＺは名前を隠してるの」
「おや、変ですね。それにしては有栖川と名乗りましたよね？僕はあのＥ―ｖｉｌ事件で有名なアリサさんの名前を、”間違えて”　呼んだだけですが」
「おう、そうだったな。お前の名前は有栖川だったな」
　鯰と後藤の言葉にアリスは追い込まれる。
　アリスはこれ以上ないくらいに、鼓動が大きくなって、心拍数が増えていく。
「・・・何が目的なの？」
「目的？そうですね・・・あなたが甦らそうとしている創造神でしょうか？」
「・・・どこまで知ってるの？」
「さぁ、あくまでも知っていることだけですよ。」
　鯰の口から飛び出す攻撃はさっきまで冷静だったアリスを振り返らすまでになっていた。

だが、振り返る理由は・・・
「な、」
銃を撃つためだった。
「あなた達は知りすぎた・・・それだけ」
アリスはリタイアを申請しに走っていく。そして機械に向かって、
「チームZ、アリス。リタイアします」
と言った。
「おっと・・・チームZのアリス選手、リタイアです。やっぱり最初の殿堂二人組との相手で負傷していたみたいだ!」
「それじゃあ、二人ともごきげんよう」
ワープするアリスを見る鯰は不適な笑みを浮かべていた。銃弾を防ぐように作られた空気の膜は、銃弾を包み込んでいた。
「クソッ!逃げられたか・・・大丈夫か?鯰」
「あぁ、平気だ。・・・逃がしませんよ、青山への鍵」
★
「嘘だろ?・・・オルガさん、嘘だよな?」
「本当だ。解説は雷帝の姿は見つからないと言っていたが、雷帝が戦った相手の能力と、クロサクの話からして事実だろうな」
俺は途中からオルガの声が聞こえなくなる。オルガは雷帝が死んだと言っている。あの雷帝が。
「どうした、柊。何か」
「雷帝が・・・死んだ・・・。」
「・・・本当か、それは。」
「信じたくないが、本当だ・・・」
視界がしだいに見えなくなっていく。
「どうした、柊!おい、返事をしろ!」
「オルガさん!俺は、俺はいったい何をすればいいですか!?指示を・・・早く、指示をください!」
「落ち着け、柊。・・・これから先、戦場で誰かが死んだとき、お前は毎回そう言うのか?」
「・・・」

「俺は昔、雷帝から教わった。戦場で誰かが死んだら、それを踏み越えていけるような戦士になれ。ってな」
「踏み越えて・・・いく」
「そうだ。雷帝が死んだことを一番に悲しんでいるのは、最後まで近くにいたクロサクだと俺は思う。確かに昔の仲間や、俺たちも悲しいが、誰よりも悲しいのは、最後に雷帝が消える姿を見たクロサクなんだ」
　作戦会議のとき、クロサクは雷帝と組んで行くことになっていた。ということは、クロサクは雷帝の死ぬ姿を見ている。イーグルの能力は破壊。触れたものを消し炭にする。・・・イーグルに殺されたということになる。
「それで今、クロサクは何をやっているんですか？」
「クロサクは今、戦場Ａに向かっている。地下に突き落とされたが、戦場Ａへのワープ装置は近いところにあるみたいだ」
「戦場Ａは今行ってはいけません！」
「わかってる。でも、クロサクは雷帝のために行くんだ。いち早く、この殿堂杯を終わらせたいんだよ、雷帝のためにな」
「なんで、そんなにクロサクは強いんですか」
「・・・雷帝から戦い方を教わったからだ。」
　前に見たときよりも被害の大きくなった町中を走る。
　クロサクはエースを倒すことだけを考えていた。
「雷帝、良い場所に墓を作ってやるからな」
　雷帝のものはこの戦場にほとんど残っていない。あるのは、クロサクのなかにある雷帝の能力値だけだ。それさえもクロサクと混ざりつつある。
「単身乗り込んでくるとは大したヤツだ」
　炎のなかから、エースは現れた。着ている服に引火しているが、エースはそれをなんとも思っていない。
「ッ！ラスボスのお出座しか。」
　クロサクは人差し指から雷の銃弾を放つ。
　銃弾はエースの左肩に直撃した。

「やった！」
「その程度で俺がひるむとでも？」
エースは喜びで気を緩めたクロサクを蹴り飛ばす。
クロサクはサッカーボールのように弾みながら、地面を転がる。
「クソ・・・今のでわき腹が」
「お前のような小僧がなぜ、雷帝の能力を使える？そしてその能力値、雷帝を食べたとでも言うのか？」
「半分正解・・・ってところだ。教えられねぇけどな」
雷帝は近づいてきたエースを雷の檻で閉じ込める。
「これは、雷帝の！まさか、能力を受け継いだとでもいうのか！」
「ご名答、そして俺の勝ちだ！」
檻は雷をエースに向かって放つ。エースは苦しみながら、膝から崩れ落ちる。
「・・・やったか」
クロサクは倒れるエースの心臓部を触る。そして動いていないことを確認した。
「終わったか・・・」
クロサクはそれを知ると、エースの死体に背中を向けて、歩き始めた。
「終わったぜ、雷帝」
「終わった？・・・そうか」
クロサクはその声を聞き、後ろを見た。
死んだはずのエースが立っていた。
「おいおい、こいつゾンビとでもいうのか？」
「俺は、能力を受け継いだというのは見たことがない。なぜなら、能力の継承には十年近くかかるからだ。まさか、それを数十分、いや数分でやってみせたとでもいうのか？」
クロサクはエースが近寄ってくるのに恐怖を感じ、銃弾を撃ちまくる。
「く、来るな！」
「教えろ、お前の可能性を。そして俺の実験台となれ！」

エースは何も感じず、銃弾を受けながらクロサクに近づく。エースはクロサクの右手首を左手で掴むと、右手にエネルギーを集めた。
「狐術、」
「ちょっと待ったーーーッ！」
そこに現れたのは一人の女だった。
観客のほとんどがその姿を見たことがなく、戦場に現れたそれを見た誰もが、侵入者だと言い始める。
「まさか・・・お前は・・・」
「顔覚えててくれたんだ、うれしいね、エース」
八つの尻尾に頭から生えた先のとがった三角形の耳。着物姿に身を包んだそれは、いつも柊を近くで見守っていたタマだった。
「ヨーコ！」
「その通り！でも今は柊　海都の狐、タマでーす。みんなよろしくー！」

話は数分前に戻る。
タマはこんなことを言った。
（前に海都が倒れてるとき、私は外に出られたじゃん。あのときみたいに、私が戦うってどうかな？）
「できなくもないな」
「シュウ、聞こえるのか？」
「あぁ、そういう霊体は能力の波で聞こえることがあるんだ」
能力の波とは能力者から発せられる能力値が音波などの波になることをいう。特に音波になりやすく、高い能力値を持つ能力なら、他の能力者が考えていることを読み取ることも可能だという。
「特にその狐、俺達以上の能力値を持っている。だから聞こえてもおかしくないってことだ」
（ということは・・・）
「他にも聞かれてたってことか」
「新人戦とか、丸聞こえだった。で、その狐のいう作戦はやってみるのか？」

「もしやるなら、俺が倒れてないとできないんじゃないか？」
（いや、そうじゃなくて。前のクロードみたく纏うってことはできるんじゃないか？）
以前、クロードはルナを守るために、ルナの体に自分の身体を纏わせて守ったという。
「・・・できるのか？そんなこと」
（やってみなきゃわからない・・・よね？）

「キサマッ！まさかあの封印を解いて！・・・また閉じ込めてくれる、今度は二度とこの世界に戻れなくなるくらいにな・・・」
「やってみろよ。私から力を奪うだけ奪って逃げた負け犬が」

決着

ここは・・・

「確か俺はタマと交代して、俺の代わりにタマが戦うことになったんだっけ？」

目が覚めると俺は本棚に囲まれた部屋で倒れていた。

四方向の本棚の４分の１も埋まっていない。

「これは何の本だ？」

背表紙には「１４」と書かれている。

俺は恐る恐るその本を開いた。

およそ４００ページある、ライトノベルくらいの厚さをした本の１ページ目には「１４の記憶」と書かれており、その次からは自分が何をしたかが全て書かれていた。

「その名の通りってわけか・・・」

俺はその本を本棚に置くと、一冊の本が目に入ってきた。他の本とは段違いに薄く、本当に十数ページくらいしかない本を見つけた。その背表紙には「４」と書かれていた。

確かに今思い出してみれば、俺が四歳の頃、あったことをほとんど覚えていない。だが、ここまで薄くなるのか？

そして良く見ると、「３」と書かれた本も薄かった。

「どうして３と４だけが極端に薄いんだ。俺はこの二年間、何をしていたんだ？」

俺は気になって、３の記憶を開いた。

『９月１４日、誕生日』から始まり、およそ二週間経った先が１ページも書かれていない。そして、

「どういうことだ、これは・・・」

４の記憶の初めにはいきなり「兄がいなくなった」と書かれていた。

★

「やっぱり私の力を奪って、他の狐と契約結んでるだけあるな。こんなにもキツイとは思わなかった」

私は久しぶりにこの体を動かしたというのもあってか、力が弱く

なっていた。
　相手の狐はたぶん九尾クラスだろうと考えて、攻撃しては退くを繰り返して戦っていた。
　私の能力である、〝高度な〟幻覚は狐相手では正直、無意味なものになっている。でも、それは相手に幻覚を見せるときだけだ。
「隊長!どうしたんですか?!しっかりしてください!」
「エース隊長!起きてください!まだ戦えます!」
「殿堂の一人、エース!どうしたことでしょうか!さっきから挑戦者に押されております」
　観客や実況を騙すことはできる。
「楽しいか?そんなことをして」
「ときに人間ってのは、目から入ってきた情報と耳から入ってきた情報など、違う場所から入ってきた情報に惑わされて混乱することがある。戦ってれば、わかるさ」
　エースの攻撃をひたすら避けるだけ。それが今の私がやること。相手を混乱させるのは私の十八番。
　目から入ってくる情報による幻覚が使えなければ、耳から入ってくる情報による幻聴を使えばいい。昔、私を捕まえるためにやってきた岡っ引き達を集団催眠したときに習得した技だ。町の女に化けた私を捕らえようとしてきたから、町の全員に、来た岡っ引き達がどんどん殺されていく幻覚をかけた。町中が大混乱の波に襲われ、当然そんな空間にいる岡っ引き達はおかしくっていき、逃げれたってわけだ。
「んな、昔話今の状況で話してられないけどね」
「なぜ、逃げる?お前は何がしたい?」
「何って?海都にエースについて知ってもらいたいでたげだけど?」
「俺について・・・だと?」
　エースは足を止める。
「君にだけ教えるよ。海都にはある時の記憶が一切無いんだ。そこに何が当てはまるのかは私だけが知っている。そして君の中にいた私は君の記憶を知っている。・・・つまり」
「俺のこの消えた記憶には、エースといた記憶が当てはまるのか」

「正解だよ、海都。交代しよう」
　タマの姿は光が放たれると同時に海都の姿へと変わっていく。
「エース。お前はいったい何者なんだ？」
「・・・俺は少しの間、お前の兄だった。一年だけ、短い時間兄としてお前を可愛がっていた。それも、あのＥ―ｖｉｌ事件によって俺以外が知らないことになってしまったがな。あの事件の首謀者」
「何を話している、エースよ。戦いはまだ終わっていないぞ」
　後ろから何らかの力でエースの首を掴む。それはエースの後ろを四本足で歩いてきた。
「狐・・・」
　それはエースに憑き、エースを操っていた狐だった。狐の力によって、エースの首には掴まれたような跡が浮かび上がる。
「が、な、にを、する・・・？」
「エース、少し話しすぎたようだ。一度、息絶えてくれたまえ」
「に、げろ・・・柊」
　エースは最後にそう言い、膝から崩れ落ちた。
　観客や実況には未だにタマの幻覚が効いているのか、歓声が鳴り響いている。
「柊　海都・・・そして狐・・・お前ごときに事件を知る意味などない！」
「いや、知る必要はあるぜ。その事件の首謀者によって、俺の記憶が消されている以上は、その事件に関わってはいるんだからな」
「なら、仕方ないな・・・私は無意味な殺生は嫌いでな、普通なら逃がしておきたいところだが・・・君には死んでもらうしかないようだ」
　狐は気絶したエースの体の中に入ると、白眼を向いたエースを立ち上がらせ、俺に攻撃を仕掛けてきた。
「私の力はお前ごときが考える予想や予測に収まらない。消えろ！」
「お前の敵は柊だけじゃねぇ！」
　シュウは狐の隙を見て攻撃するが、狐の防御によって持っていた刀を折られてしまう。
「お前も刀を持たなければ、ただの人間も同然・・・はぁッ！」

エースの掌から放たれた衝撃波によってシュウは一直線にビルへと飛んでいく。
「邪魔が入ったな。だが、これでお前の盾は無くなった。さらばだ、能力者よ」
エースは胸の前で両手を合わせた。すると、周りの瓦礫が浮かび上がり、エースの頭上に集まっていく。
「くらえッ！」
エースは右拳を俺に向ける。頭上の瓦礫は槍のように細くなり、俺に向かって飛んできた。走り回っても追いかけてきそうなその槍は砕くしか防御方法はない。
「タマ、一ついいか？」
（こんなときに何？）
「昔、俺と意識を融合させたときがあったよな？今はどれくらい融合してる？」
（だいたい３５％くらいかな。・・・まさか）
「５０％・・・ダメか？」
（どうせダメって言ってもやるでしょ？いいよ、その賭け乗ってやる）
「行くぞ、タマ！」
５０％
体がビリビリと痺れたような感覚が包み込む。俺の体の左半分がタマの姿になっていた。
瓦礫の槍は目の前で崩れていく。
「これが５０％・・・」
「半分だからこんな感じ、力の感じはどうだい？」
「あぁ、最高だ。今なら、あの狐術？っての使えるかもしれない」
「試しにやってみるかい？」
「おう、えっと・・・まずは合掌だよな？」
「そう。そして、集中して・・・力がお腹の辺りに集まったら、狐術と言って」
「わかった・・・」
俺は目を閉じ、集中する。エースが攻撃を用意しているのがわか

る。だが、心はすでにそんなことを無視するくらいに集中していた。
「・・・今だ！」
「狐術！狐火”改”！」
俺の足下に現れた魔法陣は辺りを炎に包み込む、まるでエースが最初にやったような炎がエースを襲いかかっていた。
「こいつ！数分で、私の狐術をモノにしたというのか!?ええい、狐術、水流！」
「なら、狐術！　落雷”改”！」
エースは水を操り、自分に燃え移った炎と周りの炎を消すが、それが仇となって、俺が放った雷によってさらにダメージを受けた。
「おのれ、人間よ！その程度で・・・」
「狐術！水流”改”！」
「ぐあああああッ！・・・クソッ！私がこんな人間に負けるというのか！」
「よし、これでいけ、る・・・？」
目の前がぼんやりとする。何が起こっているのか、俺にはわからないが、ただ少しずつ体が動かなくなっていくのだけはわかる。
「バカめ！あの人間、狐術も慣れぬのにあれだけの能力値を使って！あれでは、体がもたない！・・・お前の負けだ！」
エースが飛びかかってくる。
「ご苦労様、柊君」
俺の目の前に人影が現れる。それは手刀で空を切ると、そこに空間の裂け目を作り、エースを入れた。
「し、しまった！この小娘！なぜ、戦場に!?」
「柊君の狐のお陰です。この幻覚を使わせてもらいました」
「おのれ、いつか必ず！ここに戻ってきて、キサマを噛み殺してくれるわ！」
「いつでもお待ちしております・・・エース隊長。いや、元隊長。」

殿堂杯が終わって

殿堂杯は終わった。
結果は殿堂、エースが消えたため、殿堂チームの敗北となった。
各チームの監督とサポーターは戦場に倒れた俺たちを担架で戦場から運ぶ。リア監督は出れないため、オルガとリリー、そして動けるキラや千理が、俺とクロサクを運ぶことになった。
そして・・・
終わってから一週間が経った。
俺たちはあらためて色々なものを失ったことに気づく。
何よりも辛かったものそれは・・・
★
『チームO、雷帝。ここに眠る』
英語でそう刻まれた墓石が青空と校舎全体が見える山の木々の無い草原に立てられた。
「ここに眠るか・・・何も残らなかったがこれでいいのか?」
墓石を作る係りの能力者が、墓石に刻まれた文字を読んで、そう言った。
「良いんです。これだけ・・・これだけで十分です」
リアは以前、雷帝から貰った小さな十字架のペンダントを握る。
「雷帝、安らかに眠ってくれ・・・俺がお前の代わりにこの能力で」
クロサクは拳を強く握りしめた。
「監督!」
墓の前で立つ俺たちの後ろを知らない男が走ってきた。
男は喪服で額から汗を流していた。
「兼城（かねしろ）・・・君?」
「知ってるんですか?」
「ええ。雷帝が昔、ＬＯＳＴ討伐部隊の隊長をやっていたときに副隊長を任されていた能力者。でも、どうしてここに?」
「隊長が!隊長が死んだと聞いて!」
兼城は墓石の前に立つと、我慢していた涙を溢した。

「もう・・・俺しか残ってないじゃないですか。あのときの約束、守ってくださいよ」
雷帝のお墓を作ってきた帰り道で、
「雷帝ってそんな大きな部隊の隊長だったんですか？」
俺は思いきってリア監督に聞いた。
「ＬＯＳＴ討伐部隊・・・この学校に現れたＬｏｓｔを倒すためだけに作られた部隊だ。その初代隊長を雷帝はやっていた」
「初代？」
「今は三代目。まぁ、三代目も死んだけどね・・・」
「三代目はエースだ。だが、エースの裏の顔がわかった以上、ＬＯＳＴ討伐部隊はどうなるか・・・話が変わったな、監督すまない」
「いいよ、全然。柊君も聞きたかったみたいだしね・・・。で、雷帝の話だよね。雷帝ら初代討伐部隊はね・・・

「雷帝さん！こっちにもヤツの卵が！」
「わかってる！・・・絶対に生き延びるぞ！」
「はい！」
雷帝達が討伐したＬｏｓｔは、そのときにはもう遅く、肥大化し大きくなっていた。
そして隊員の９割は死んで、残りの１割もすでに負傷しているものが多かった。
そんななか、あの人と雷帝は仲間を庇いながら戦っていた。
雷帝に関しては能力のお陰もあってほとんど無傷だったけど、兼城は左腕を失っていたんだ。
兼城は狙撃の天才で能力は銃弾に付属効果を付ける能力だった。ゲームで言うところの状態異常だ。火傷や毒、当たった一定の範囲を凍らせるということもできた。だが、どんなに目が良くても、左手が無ければ、それを押さえることも照準を合わせることもできない。だから隊員の死体を氷の銃弾で凍らせて、そこに銃を置いて撃っていたんだ。
「雷帝さん、これ以上は危険です！俺の銃弾も残りが・・・」

「諦めるな!もう少しで・・・もう少しで何とか・・・!」
雷帝が少し目を離した瞬間、そのＬＯＳＴは兼城と負傷者を襲ったんだ。
兼城は雷帝によって助かったが、他のみんなはその一瞬で死んでしまった。
結果、ＬＯＳＴは学校から逃げ、雷帝と兼城以外の全員は死んでしまった。
雷帝は次の日、辞表を提出して討伐部隊をやめたんだ。
「じゃあ、兼城さんの左手って」
「義手だよ。あのとき、兼城さんは三年生だっけな?」
「はい、残りの二年間、なかなか辛かったですね。チームＺの技術ですぐに慣れましたが」
兼城は笑ってみせるが、心ではまだどこか笑えない悲しみが満ち溢れていた。
「それで、クロサク君だっけ?」
「・・・何スか?」
「俺と戦ってくれないか?君の力が知りたい」
「いいッスけど」
「さぁ、雷帝さん、いや隊長。隊長が残した、最後の希望を俺に見せてください」

貸し出している戦場は一つもなく、クロサクと兼城はチームＯの練習場で戦うことになった。少し狭いが、兼城さんは狙撃銃ではなく、拳銃で戦うみたいだ。
「さぁ、かかってこい。先輩が相手なんだから、手加減はいらないぞ」
「なら、遠慮なく」
「それじゃあ・・・始め!」
監督はすぐに練習場から走って出る。
練習場の大きなガラス窓から中の様子は良く見える。
兼城は拳銃を構えると、まずは一発と引き金を引く。
銃弾はクロサクの足下に穴を開け、そこから炎を吹き出した。

「これが、俺の能力。どうだ？」
「雷撃、散弾！」
クロサクは兼城の質問を無視して、右人差し指から雷の銃弾を放つ。それは何発にも分かれ、兼城に飛んでいく。
「これなんてどうかな？」
兼城はわざと、自分の足下に向けて銃を撃つ。
すると、兼城の目の前に氷の壁が現れた。
「現役より、ちょっと小さいかな。でも、十分」
散弾は氷の壁に当たり、兼城に届かない。
「俺の銃弾は攻防どちらにも向いている。まぁ、数に限界があるから、そこが弱点だけど・・・ね！」
兼城は何の捻りもなく、クロサクに向かって銃を撃つ。銃弾は炎を上げ飛んでいく。
「雷撃、跳弾！」
「跳弾・・・てことは、ここまで飛んでくるか」
クロサクは燃え上がる銃弾を避けると、雷の銃弾を地面と壁に向かって三発放った。
兼城の予想通り、銃弾は兼城のところまで飛んできた。
「なら、俺もそれ、使わせてもらうかな」
兼城は飛んできた雷の銃弾に雷を付与させた銃弾を一発放った。
銃弾は、雷の銃弾を三角形を描くように跳ね、雷の銃弾を撃ち落とす。
「クロサク君。やっぱり迷いがあるね。隊長が死んで、辛いだろう」
「？」
クロサクは攻撃の手を止める。
「俺も辛いよ。俺が帰ってきたら、一緒に酒を飲もうって約束してたんだ。でも、それが叶わなかった。正直、俺はもう死んでもいい。それくらいの考えだよ」
「お、俺はまだ雷帝が死んだと思っていない！確かに、この目で雷帝が消えていくのを見た。だけど、雷帝はずっと俺の前にいるんだ。ついてこいって、その足を止めるなって！」

クロサクは前みたいにエネルギーを手のひらに込めて、兼城にぶつかっていく。
「・・・俺の思う迷いってのはどうやら、俺自身の迷いだったみたいだ。すでに君は、隊長の左腕みたいだ」
兼城の持っていた拳銃はクロサクの手のひらに込められたエネルギー弾によって、大きく弾き飛ばされ、壁で止まった。
「俺は現実を見すぎていた。死んだ＝この世から消えたと思っていたのかもしれないな。確実に、君の横には隊長がいるみたいだ」
「これを持っていってくれ」
クロサクはさっきまで兼城が使っていた拳銃を渡された。
「これは隊長が俺の初陣のときに渡した拳銃だ。護身用にでも持っていてくれればありがたい。」
「でも、これは兼城さんの武器なんじゃ」
「俺にはもう必要ないからな。隊長がいなくなった以上、ここに帰ってくる理由もない」
兼城は静かに振り返ると、学校の出口へと歩いていく。
そして、俺たちの声が聞こえなくなったところまで行くと、何かを言って校門から外へ出ていった。

★

「チームＡ隊長、東条　アキネ。前へ」
その頃、チームＡ専用体育館では、アキネの隊長就任記念が始まっていた。
壇上にはチームＡの監督が立ち、その前へアキネは行く。
「四年、東条アキネ。今日から君がこのチームを引っ張っていくことになる。リーダーとして、このチームを勝利へと導くことを期待する」
「ありがとうございます」
「そして、隊長補佐、壇上へ」
カツンカツンと足音が体育館に響く。壇上に現れたのは黒髪ショートの前髪を真っ直ぐ水平に切った髪型の女だった。アキネと同じ、この学校の制服を着て、手には制服と同じ色の黒い手袋をして

いる。
「二年、ロカ　セルナード。よろしく頼むよ」
「こちらこそ、あのアキネ様の補佐としてあなたの力になれること、光栄に思っています」
　チームＡの第一部隊の誰かか、アキネの弟であり殿堂杯で成果を残したシュウがアキネの補佐になることが有力だった中、全く名前が上がらず、あまり知られていないロカが壇上に現れたことに、チームＡのメンバーとそれを見ていた他チームのスパイはざわつき始めた。
「強すぎる武器は最後までしまっておく。それが常識よ。アキネさん」
　柱の影で誰かがそう言い残し、去っていった。
　その言葉はそこにいた違うチームのスパイ以外は聞くこともなかった。

ロカ・セルナード

次の日・・・

「アキネさん！今日はどうしますか？」

「あなた、そんなキャラだったっけ？」

壇上で見せた冷静そうなキャラとは変わり、元気なキャラへと変貌したロカに、思わず引いてしまう。

「だって、あのアキネさんですよ！女子の間では、強い、頭良い、カッコいい・・・注目のマトですよ！」

「そうなの・・・。そうだ、今日の予定が一個あったわ」

「何ですか？」

「あなたをとある場所へ連れていってあげる」

「で、ここに来たと」

チームOの授業中、教室に入ってきたアキネとロカを見て、全員が動かしていた手を止めた。と、言ってもはなから動かしていないのもいるが・・・。

「時間・・・大丈夫じゃないみたいね」

「チームA隊長になったアキネと・・・」

「その補佐のロカ・・・、なかなか可愛いね」

入り口に近い机で授業を受ける四津野は立ち上がり、ロカの頭を撫でる。

「えへへ、それほどでも～」

ロカの態度に、おもわずアキネはため息をついた。

アキネからすれば、補佐といえば冷静沈着で、もっと空気の読めるクールな性格の補佐を予想していたため、少し幻滅しているというのはある。

「あ、オルガさん、お久しぶりです！」

「・・・セルナード」

「知ってるんですか？」

「あぁ。・・・何でかは聞くな」

「はいぃ・・・」

オルガは俺に睨みを利かせる。
俺は口を閉じた。
「それで話があるんだけど。柊君、約束してたよね？エースのこと」
「・・・あ、そういえば」
「これより、あなたたちチームOとの停戦契約を結ぶ！」
停戦契約とは、結ぶことによって、授業や大会で戦うことなく（例外あり）、どちらかの人員が減ったときに、人員をそのチームに渡すなど、様々なところで役立つ契約である。一つデメリットがあるとすれば、成績、戦績点数は渡せないことである。
「よっしゃぁぁぁぁぁッ！」
「敵が減ったぞーーーッ！」
「ありがとう、柊。これはすばらしいことだ」
先輩三人が喜び、ハイタッチや握手をする。
俺たち後輩にはまだ停戦契約の凄みがわからないため、ポカンと口を開けていた。
「では、チームO隊長のオルガさん、ここにサインを」
オルガは渡されたボールペンで、紙の真ん中に名前を書く。後で聞いたが、本来はチームの監督であるリアが書くことになっていたらしい。
「ありがとうございます。それでは」
「アキネさん、ちょっといいですか？」
「ん？どうしたの？」
ロカがアキネの服を親指と人差し指で掴んで引っ張る。
「あの柊って人と戦ってみたいです。確か、エース元隊長を倒したんですよね？」
「倒したって言っても・・・」
あれは俺だけでなく、シュウやクロサクの力があってだから、一人で倒したわけではないしな・・・
「そうだね。それなりの実力はあるよ」
「ちょっと、アキネさんまで」
「じゃあ、いいですか？」

「・・・」
（いいんじゃないの？別に、この子殺意とかは感じられないし）
「わかりました・・・」
戦場Ⅰ。
中は白一色のドーム状の構造になっていて、何も障害物はなく、観客席と戦える分の広い空間があった。
「さーて、お手並み拝見といこうか」
アキネは観客席でロカを見る。
その言葉はたぶん、ロカに言っているのだろう。
「ルールはどちらかが再起不能になるか、降参したら勝負ありってことでいいかな」
四津野が俺とロカの真ん中に立つ。
「いいですよ。ま、私はあまり攻撃は苦手なんで」
ロカは制服のポケットから手袋を取り出して両手に身に付けると、体に三日月のような形をした何かを纏った。
三層ほどになるそれは肩、腰、膝部分を囲うように、空中に浮いて、ロカを守る。
（防御型の能力か・・・力をぶつけるより、数で戦った方がいいかもね）
タマがそう助言する。
「また、融合頼むぜ。タマ」
（了解）
タマの魂は俺の拳に炎を灯し、腰部分から五つの尻尾を生やした。
「狐・・・エース元隊長と同じですか」
「じゃあ、二人ともＯＫ？・・・試合開始！」
四津野は手を下げるとすぐに観客席へ避難した。
「いくぞ、タマ！」
小手調べに俺はロカの三日月のヴェールを回し蹴りで攻撃する。
そのとき、一瞬何が起きたのかわからなかった。
空間でも歪んだかのようにロカは俺の攻撃を避けた。避けたというよりも、攻撃がロカを避けた、というべきか。
「な!?」

俺は間合いを空ける。
「私の能力、このヴェールは相手の攻撃を逃がす」
「なら、真っ正面からの攻撃はどうだ！」
俺は飛び蹴りで、ロカの芯を狙うように攻撃するが、ロカのヴェールが空間を歪ませて、俺の攻撃を避けた。
このとき、アキネはロカの足元を見ていた。柊の攻撃に対して、ロカはあの床にある一辺およそ５０ｃｍの四角のタイルから足が出ていない。
「この子の能力。私よりも防御力は高いかもね」
「!?」
「私の能力はあくまでも空間を裂いて、それで攻撃を無効化させる。だけど、ロカのあのヴェールはその場で攻撃を受け流している。一切動かず、大半の攻撃に防御できる。・・・でも、あの防御は」
「攻撃回数には勝てない・・・はずだ」
俺はタマの案通り、攻撃を止めず、ヴェールの攻略を続ける。
数撃ってもそのヴェールは壊れたり、防御しきれなかったりしない。
「数打ちゃ当たる、そんな考えはいずれ、体力の限界で崩れ始める。・・・エース元隊長と手合わせしたとき、この防御を最強の盾と誉めてくれた」
ロカの言う通り、だんだんと疲れで体が重たくなってきた。
ただでさえ、タマと融合しているのに、こんなにも動いていると、疲れるに決まっている。
「キツイな」
（作戦変更なんてどう？範囲攻撃とかやってみない？）
「そうだな」
俺は一度距離を空け、集中する。そして
「狐術！狐火〝改〟！」
手のひらから一面を火の海にする炎を放った。
「なん、だと・・・!?」
上から見たロカの周囲は全く燃えてなく、火の粉一つ入りそうにな

かった。まるで、バリアでも張られているような。
「だが、タイルから少し足が出た。」
　アキネの言葉に、炎の消えた後のロカの足元を見た。アキネの見ていたと思われるタイルから片足が出ていた。
「あれだけやって片足だけなのか・・・」
「すごいですね。さすがエース元隊長を倒しただけあります」
　ロカは拍手をする。でも、どこかバカにされてるような・・・。
「さて、私も本気を出しましょうか・・今宵も月は赤く染まり始める。さぁ、さらなる防壁を築け」
　ロカの言う通り、ロカの纏う三日月のヴェールは赤く染まり、肩、腰、膝から感覚を狭め、上半身だけを守るような形になる。
「これを見て、『脚部のガードが消えた』と考えるか、『動けるようになった』と考えるかは、あなたのこれまでの経験しだいですね」
（来るよ・・・彼女の本気が）
「え？」
　ロカは少しずつこちらに向かって、一歩ずつ歩いてくる。それはエースのようなオーラを放つ。
（こんな可愛らしい小動物のような女の子が、こんなオーラを放つなんてね。融合状態の私にまで伝わってくるよ。気をつけて対処して）
「わかってるよ！」
　俺は立ち向かっていく。最初は左からと拳を出すが、やはりあのヴェールによって避けられてしまう。だが、あのヴェールの感覚なら、
「足を狙うまでだ！」
（ダメ！）
　俺の蹴りを待っていたかのように、飛んで避けたロカは体勢が少し崩れた俺に回し蹴りで対抗する。
「カウンター！」
　重たいハンマーで横から殴られたような衝撃が俺を襲う。俺はその勢いで、地面を転がり壁に激突する。
「これが、カウンターモード。デュフェンスモードより、防御範囲は狭

くなるけど、カウンターが追加される。カウンターは相手の攻撃を2、3倍にして返すことも可能。触れようが触れまいが、攻撃は必ず返される」
「ッ！・・・蹴りだったから威力はそこまでないが、もしもこれが狐術だったら」
（おそらく、死んでいたね）
「柊、再起不能！・・・というより、これ以上の戦闘訓練は危険と見なします」
「監督・・・時間か」
キラが時計を見たときにはもう遅く、授業時間を越えていた。
「タイムアップですか・・・柊さん、ありがとうございました！」
ロカは手袋を外し、壁近くで倒れる俺のところに歩み寄って礼をする。
そのときにはもう三日月はなく、さっきまで真剣だった顔は笑顔に戻っていた。
「あ、ありがとうございました・・・」
ロカは観客席にいるアキネのところに行くと、アキネに何かを言ったあと、一礼してどこかへと消えた。
（チームＡ・・・エースが消えても健在か）
俺は立ち上がると、観客席に待つチームＯ全員のところへ向かった。
★
ここは校門前、フードを被った男が学校に入ろうとしていた。
「君、何者かね？この学校の生徒なら、学生証を見せろ」
監視員が男を止める。
男はズボンのポケットからボロボロになった紙切れを見せた。
監視員は顔を真っ青にすると、
「失礼しました！どうぞ、お通りください！」
と言って、すぐに男から離れた。
男はズボンに紙切れをしまうと門を通過し、校内へと入っていった。

「久しぶりだな・・・この施設」

インタビュー

「久しぶりだな、この施設」
　赤い染みだらけのマントを羽織った男はフードを目深にかぶり、校内をまわる。
　肩にはこれまた赤い染みのついたボンサックを背負い、とある場所を目指して歩く。
　まるでダンジョンを進んでいるかのように・・・。
「アンタ、あやしいね」
　湿布やら包帯やらを付けた巻いた髪をした女は男を不振に思ったのか、声をかけ、男の足を止めた。
「おい、フェローサ」
「黙ってて。アンタ、この学校の人間じゃないよね？この学校に何の用？ヘタしたら、アンタの周りに撒かれた粉が火を吹くよ」
　男はフードの中から、辺りを見る。周りに粉が浮いているのが見えた。
「・・・やっかいだな」
　男はついにフードを取った。
「アンタは・・・・！」
「俺は勅使河原　八野地。伝説の一人と言えば理解できるか？」
　粉はあくまでも空気に舞った状態で、男に近付こうとしない。なぜなら、勅使河原が空気をとある能力で操っていたからだ。
「ッ！」
「チームＯの監督に用がある・・・案内してくれないか？」
「それなら私がやりますよ」
　フェローサは現れた女に嫌な顔をする。
「げ・・・アリス」
　三人の前に現れたのはチームＺのアリスだった。
　フェローサが嫌な顔をするのはチームＡ内で殿堂杯以来、あまりアリスに関わるなと言われているからだ。
「どうしましたか？私の顔に何か付いていますか？」

「ひぇ・・・」
　フェローサは顔を近づけてきたアリスによって仰け反り、後ろに倒れた。
「誰でも良い。・・・頼んだ。」
「わかりましたー。・・・それではまたどこかで」
　アリスはフェローサに手を小さく振ると、勅使河原と共に、歩いていった。
「なんなのよ、アイツ・・・」

「ところで勅使河原さん」
　ただただ黙り込む勅使河原にアリスは話しかけた。
「どうした・・・」
「どうしてまたここに戻ってきたんですか？やっぱり雷帝さんが気になって？」
「・・・それもあるが、違う理由でだ。」
「理由は・・・話すわけないですよね。まぁ、いいですけど」
「・・・リアに新規メンバーの戦闘訓練の講師をしてくれと言われたからだ」
「話すんですね」
「あまり有害ではないからだ、アリサ。」
「なんでもお見通しってわけですね・・・」
　アリスは勅使河原の方を見た。勅使河原はポケットから手を出し、アリスに手のひらを向けている。
「波動・・・波を使った能力。いつでも殺す気満々ですね。」
「有害ではないと思っているが、無害とは思っていない。その短刀、お前ならいつでも抜いて俺を殺せるだろう？」
「さすが二代目伝説の栄光を得て、この学校を去っただけでもあります。・・・話もこれまでですか」
　アリスの目の前にはチームOの教室があった。
　何があったのか授業中だというのに他の教室と違って盛り上がっている。

「チームOだな。ありがとう。礼は後で返す」
「どうも。暇だったらチームZにいつでも来てくださいね。楽しみに待ってますから」
そう言うと、アリスは来た道を戻っていった。
★
「新聞部だぁ？」
「はい！今日は元チームA、エースを倒した柊さんをインタビューしにきました。」
首から提げたカメラが特徴的な女子が訪ねてきた。新聞部なんて俺と無縁そうな言葉がチームOの教室に入ってくる。
「・・・悪いがそういうのは」
「いいんじゃねぇの？別によぉ。」
「キラ！」
「だってよぉ、新聞になるくらいすごいことをこいつはやったんだぜ！」
「・・・それを言われると仕方ないな。取材許可するよ」
「ありがとうございます・・・」
話がどんどん進んでいく。どうやら、俺に選択肢は無いようだ・・・テーブルと椅子を真ん中に二つ残し、他を壁際に寄せると、そこに俺は座らされた。
前の席に新聞記者が座る。
「じゃあ質問一つ目です。柊さんの能力って具体的にはなんですか？試合中では、いきなり美人さんに変身したり、炎出したりしてましたけど・・・」
（美人!?・・・わかってるね。）
「俺の能力は狐術？ですかね・・・具体的にっていうとあまり説明しにくい能力なんですけど」
「狐術ですか。エースさんも狐術って能力名でしたね。エースさんと何か関係があるのですか？」
「エース・・・あの人は昔、俺の兄だったみたいです。記憶は残っていないのですが」

「なるほど・・・血の繋がりがあったということですね？」
「・・・」
俺はそこが気になっていた。あくまでも義理の兄だったのか、血の繋がりがあった兄なのか・・・。タマに聞いても「それはどうかな～～～。」とか、「まぁ、そこは悩みなよ」と言って、話から逃げるだけで、話そうとしない。
「・・・正直なところ、その部分はわかってないです。その記憶ってのも十数年前のことですから」
「なるほど・・・えっとでは二つ目です。試合中に見せたあの変身。あれで出てきたあの狐の尻尾が生えた女性はいったい誰なんですか？今、噂では試合上は普通に流れてましたけど、裏でルール違反だとか言われてるみたいですよ」
「まぁ、ルール上変身といえど、能力本質の違う者への変身は能力窃盗とか言われそうだからな・・・」
キラの説明が入る。
能力窃盗とは、他の能力者の能力を伝承や習得以外でコピーする。他の能力者に成り済まして能力を扱うなどのことをいい、ルール上では、それがわかった瞬間、退場となり、今後数ヵ月間は試合に出れず、成績も0点になってしまう。ひどければ学園追放まで存在するとかしないとか・・・
「えっと、それは」
（私が出ればいいんだよね？）
何を解釈したのか、タマが俺の代わりにまた全員の前に現れた。俺はまたあの全面本棚の部屋に閉じ込められる。
（おい！タマ！）
「おぉー！・・・えっと名前は」
「名前のない狐です。主の海都にはタマなんて残念な呼び方で呼ばれてますが」
「タマさんですね。やっぱりいつ見ても美人ですね」
「いやー、それほどでも。やっぱり一人の妖狐として美を保つことが大事なんで」

（何が一人の妖狐なんだか・・・）
「なるほど、柊さんの能力の源はあなたですか？」
「はい、そうです。海都なんて、私がいなければただの一般人ですから」
久しぶりになんでこんなヤツと契約をしてしまったのかと考えた俺だった。
「そうなんですか!?・・・でも、あなたという強い能力を体に宿すことのできる柊さんもすごいと思いますよ。私がそんなことしたらオーバーヒートしちゃいそうですし」
新聞記者の言葉にタマが納得したことがわかった。確かに普通の一般人だったら、こんな壮大な能力値、体が壊れてしまうだろう。でも、俺はあってすぐにタマを宿して戦えた。
なぜ、そんなことができたのか未だに謎が多い・・・。
「えっとタマさん・・・？」
いつの間にか、俺が椅子に座っていた。
「うわ！・・・驚きますよ、いきなり光ったかと思ったら柊さんに変身するなんて」
タマ、急にどうしたんだ？
（ちょっと考えさせて・・・）
「えっと、ちょっとタマに変身するのに限界が来たみたいで。」
「やっぱり変身って、あまり長時間は保てませんよね」
タマは黙り込む。記憶の本棚にはタマと昔あったとか、そんな記憶は無かったし、能力者に関係あることも書かれていなかった。・・・なら、すんなりとタマを体に入れられたんだ？
「えっと、柊さん？」
「あ！す、すみません！」
「大丈夫ならいいのですが・・・じゃあ最後の質問をしてもいいですか？」
「大丈夫ですよ？」
「じゃあ、最後の質問です。柊さんは最終的に何を目指してますか？殿堂入りとか、Ｌｏｓｔ討伐部隊の参加とか」

「・・・ところで新聞記者」
オルガが話に割り込んできた。
オルガは剣をどこからか取り出すと、新聞記者に向ける。
「な、なんでしょうか!?」
「さっきから気になっていたんだが、お前何者だ？思い出したが、この学校に新聞部なんて部活はない」
「・・・今回、初めて作られまして。新聞部初の相手はこの前、格上の相手を倒した柊さんにしようかな・・・と」
「そうか・・・ところでその右耳に入れたその機械。お前はインタビュー中に音楽を聴くなんて趣味があるのか？」
「こ、これは・・・もう、いいです」
新聞記者は立ち上がると、耳につけた機械のスイッチらしきボタンを押す。
「スパイか・・・」
「怪しかったよね、途中から」
キラと四津野がオルガに便乗して立ち上がる。
「どこのスパイだ？Ａか？Ｚか？」
「・・・ッ！」
新聞記者は胸元から球体を取り出す。それは地面に当たると光を放った。
「閃光弾!?・・・逃がすな！」
スパイは教室の出口へと向かう。
「待て！」
キラは体を悪魔の契約で黒く染め上げ、光を無効化する。
だが、スパイは体勢を変え、どこからか取り出したナイフで攻撃する。
「ッ！」
スパイはキラの隙を見て、教室の扉を開けた。だが・・・
「ドンッ！」
そこに立っていた何かにぶつかって倒れてしまう。
「教室で騒ぐとは良い度胸じゃねぇか・・・」

それは倒れたスパイの胸ぐらを掴んで無理矢理起こした。
「そのセリフ！・・・・まさか！」
「おい、嘘だろ？」
「・・・帰ってきたのか、ヤツが」
「「勅使河原隊長！」」
先輩三人が口を揃えて名前を発した。
「勅使河原・・・隊長？」

勅使河原が来た

「て、勅使河原だって・・・？」
インタビューに来ていたスパイの女は、倒れた姿勢から立たずに、蜘蛛のような動きで、教室の壁際まで両手両足を使って退く。
「この蜘蛛女・・・新しい仲間か？」
「そいつはスパイだ！」
「ほぅ・・・タイミングが悪かったな」
俺にもわかった。勅使河原の周りに広大な魔力が渦のようになり、能力値へと変化していくことが。
「さぁ、ここで身体を捨てるか、ここで得た情報を捨てるか・・・キサマはどっちを選ぶ？」
「ひっ！」
「・・・なんてな」
勅使河原は手をポケットにしまい、女に背を向けて離れた。
「俺はもう人を殺めることはやめた・・・。帰れ、メモ帳のページをここに捨ててな」
「・・・そいつ、気絶してるぜ」
勅使河原が手をしまったときにはもう遅く、女は白目を向いて気絶していた。
「お久しぶりです、勅使河原さん」
「お久しぶりって。まだ5ヶ月くらいしか経ってないだろ」
勅使河原は卒業まで座っていたと言われる、教室の角に近い席に座る。
普段からあの席の周りはきれいで、あの机とイスの上だけはホコリが被っていなかった。
キラや四津野が楽しく話しているなか、割り込むようにオルガが入ってきた。
「どうして戻ってきたんですか？」
オルガは勅使河原の机に一枚の紙を出した。
そこには「退学届」と書かれていた。

「そうだったな、俺は退学したんだったな・・・」
「あの、退学届って？」
　玲華はリアに聞く。
「あれは一定の成績を持っているものや、能力者として罪を犯してしまったものだけがこの学校の校長に出せるもの。あれを出したらまず、ここには戻ってこれない」
「へぇー・・・」
「俺は確かに伝説になってこの学校から消えた。ここに来た理由ってのはリアに呼ばれたからだ。もう一度、帰ってきて、とな」
「監督、勅使河原がどんな人間か覚えてないんですか？自分の成績の、戦績のために仲間を犠牲にした」
「犠牲？・・・まだそんなことを言っているのか」
　勅使河原は立ち上がるとオルガの顔の前に拳を出す。
「・・・」
「あなたほどの力があれば、あんなことは・・・
★
「オルガ、戦況はどうなっている？」
「はい、左で雷帝とジョー、右で四津野とキラが戦ってます。今のところ、リーダーのところに来ている敵はいません。そのまま敵フラッグへと前進して大丈夫です！」
「わかった。いくぞ、梨花」
「はい！」
　殿堂から伝説へのランクアップがかかった大勝負。相手はチームZ内でも最強と言われる六人と指揮を執るアリス。
　全員が気合いを入れ、戦闘に挑んでいた。
　あなたと共に前進していた一人、梨花さんの能力は完全な防御能力で、味方を守ることだけの能力だった。
　最強の矛と最強の盾。とても良いチームだった。
　あの頃は梨花さんの通信機が壊れていたのもあってか、俺があなたに指揮を出し、あなたが梨花さんに伝えていた。
「リーダー、二人の方に敵が近づいてきています！」

「了解、梨花気を付けろ。」
「はい」
　それが梨花さんの最後だった。
「リーダー！雷帝の情報によると、敵は能力無効の銃弾を使うみたいです！」
「ッ！能力無効の銃弾か！・・・梨花！敵は・・・！」
　あなたは周りを見ていなかったのもあってか、梨花さん自身があなたの盾になっているのに気づかなかった。
　あなたのその能力上、ある範囲なら人が近づいてきているのくらいわかっていたはずだ。
　おそらく、銃を撃ったのも・・・
★
「あくまでもそれはお前の想像だ。俺の波は銃を撃ったのまでは感知できない」
「ありえない。あなたは以前、チームＺのスナイパーが遠くから狙撃しているのを察知し、対応したことがあると記録書に書かれている。」
「そんなこともあったか。記憶にないな・・・」
　今にも戦闘が始まりそうな空気にリアが割り込む。
「そこまで！ここで仲間割れをしてもただただ無意味な争いが始まるだけよ。勅使河原も先輩としてちょっとは落ち着きなさい」
「・・・すまない、監督。」
　あれから一時間してやっと教室は静かになった。
　勅使河原とオルガは自分の席に座り、勅使河原の周りにいた俺たちも席に戻った。
「柊ー、勅使河原さんの能力知りたいか？知りたいよな？」
「確かに気になりますね。強いってのはオルガさんの話からわかりましたけど・・・」
「じゃあ決まりだな。勅使河原さーん、ちょっといいッスか？」
　キラは勅使河原の名前を読んで手を振る。勅使河原はイスから立ち上がると、不機嫌そうにこっちへやってきた。
「なんだ？キラ」

「こいつと一戦やってもらってもいいですか？」
「な、何言ってるんですか！」
「先輩はそうでもしないと自身の能力を見せてくれないぞ」
「ほう、面白いことを言うやつもいるんだな・・・四津野、俺の使ってたグローブあるか？」
「ありますよー、なかなかのレア物ですからね～」
　と言って、四津野は自分のロッカーから赤いグローブを取り出した。
「ありがとう。・・・じゃあ、場所はこの教室でいいかな？」
「それは、俺の能力的に」
「いや、なんだろうがこの教室に被害が出ないようにできるからな。キラ、四津野、あと・・・そこの黒いのと女！机を片付けてくれ！」
「黒いの・・・」
「女？・・・まぁ、名前知らなくても仕方ないか」
　四、五人によって外へ出された机とイス。それによって、教室は広くなった。
「来たぞ、勅使河原名物、教室の授業。俺もやりてーーー！」
「柊と言ったな。俺の特訓を甘く見ない方がいいぞ。オルガが出す弱っちい特訓とはレベルが違うからな」
「はい！」
（と言っても、まさか一年の私たちに本気は出さないよね？）
「四津野、開始の合図を頼む！」
「了解！・・・それでは、特訓開始ィーーー！」
　四津野の合図と共に始まった特訓。
　勅使河原は開始早々、俺に来いと合図をする。
（行くしかないみたいだね）
「本気でいきますよ！タマ！完全融合（フルフュージョン）だ」
（了解、フルって言っても５０％でしょ）
　俺はエース戦で見せた力を発揮させ、勅使河原に攻撃する。
「狐術、狐火、焔！」
「さらに進化しているのか！柊！」

火力の上がった炎が勅使河原に向かって飛んでいく。
だが・・・
「何ッ！」
炎は勅使河原の前で直角に曲がり、壁に衝突する。
「良い炎だな。しかし、まだ波が整っていない」
「波？」
勅使河原はあの一瞬、炎を受け流すような仕草をしていた。あそこに勅使河原の能力がある。
「一点集中より、数で！」
俺はタマの力で分身すると、あらゆる方向から炎を撃ち込む。
「安直な考えだな」
今度は天井に向かって飛んでいってしまった。
「アイツの能力ってこの前のロカと同じ能力ッスか？」
「違うな、クロサク。あくまでも勅使河原の能力は波を操る能力だ。
「波？」
「世界には色々な波がある。人に見えなくても勅使河原さんには波が見えている」
「前に聞いたけど、勅使河原さんは大半の攻撃の波は分かるらしいよ。例外は何を考えているかわからない能力者の近接攻撃だけだって」
「いや、アイツの能力は接近戦に弱い。そこに柊が気づくかだ。」
（わかったよ、柊。あの能力の弱点が）
「本当か、タマ！」
（えぇ。まずは勅使河原に近づかないとだけどね）
「・・・本気で言ってんのか？あの訳のわからない結界に近づけと？」
（あくまで波を操る能力。大丈夫よ）
「大丈夫かな・・・。まぁ、勝てるならいいけど・・・なッ！」
俺は一気に勅使河原に向かって走り出した。
「一か八かってやつだ！狐術！分身の幻術！」
「勅使河原さんに近づくのは危険だ！」
キラの声が聞こえたそのときには遅く、俺には天井が見えていた。
「へ？」

「確かに俺は近接攻撃が苦手だった。だが、この数ヵ月で俺は克服した。梨花を失ってな」
何が起こったのか俺にはわからなかった。その一瞬で俺と分身は中に舞い上がり、タマとの融合も解かれていた。
「柊！」
「柊。もう少し、その狐術を磨け。お前ならもっと先にいける。下手したら殿堂も取れるかもな」

天使襲撃

「勅使河原、ちょっといいですか？」
「おぉ、監督。どうした？」
　屋上の隅、学校付近を見ていた勅使河原は屋上でリアと会っていた。
「教室での柊との戦闘を見て思いました。あなたは柊をどう思っていましたか？」
「・・・あの狐。どこかで見たことあると思っていた。柊はあくまでもあの狐を動かすための器だ。どうでもいい」
「面白いことを教えましょう。あの狐、本当はエースの憑き狐なんですよ」
「そんなことはすぐにわかった。エースは俺が消える前に既に憑き狐を変えていた。あいつは強さこそ正義だったからな」
「・・・違います、狐のことを話に来たんじゃありません。柊　海都君のことですよ！」
「？だから俺は言ってるだろ。アイツはあくまでも、あの狐の器に過ぎないとな」
「じゃあどうしてあんなことを言ったんですか？お前ならもっと先にいける・・・なんて」
「・・・知らん。そう思っただけだ」
「見つけたぞ、勅使河原！」
　屋上に何かが舞い降りてきた。
　それは白い翼と、手に鋭い槍を持ち、長く白い髪をマフラーのように首に巻いている。
　服装はその姿とは真逆で上から下まで黒一色だった。
「チッ！ここまで追ってきやがったか」
「勅使河原、これはいったい。キャッ！」
「リア！・・・クロノス！お前、どこまで俺をストーキングすれば気が済む」
　クロノスと呼ばれた男はリアに向けて、槍の先からエネルギー弾を

撃つ。
勅使河原はそれを見て、今にも堪忍袋の緒が切れそうだった。
「俺をストーカー呼ばわりか。・・・おとなしく、キサマの仲間を出せばいいものの」
「渡さねぇと何回言えばいい、百回か？千回か？」
「なら、そこの女に聞こう」
「堕天使、オルガ・アーガイルを渡せ！」
★
「何ですか・・・あれ？」
玲華が空を指差す。
曇り空から現れたそれはまるで船艦のような形をしていた。
「天空母艦・・・どうしてここに」
「知ってるのか？オルガ。」
「・・・天空母艦　ティアラ号。それは天空兵、言わば神に遣える天使を乗せた船艦だ」
「天使だぁ？オルガ、何を言ってんだ。天使なんてもんいるわけねぇだろうが」
「悪魔が何を言ってんだかねぇー。ぷーくすくす。」
「とりあえず、みんなは安全な場所に避難しろ！柊、四津野、玲華の三人は病室にいるルナとリリーを頼む」
「了解！」　「わかった！」　「うん！」
オルガは通信機を俺たちに渡す。
「俺たちはあの天空母艦ってヤツを壊せばいいんだな？」
キラはそう言い、指間接を鳴らした。
「無理だ。例え、この学校全ての技術を詰め込んでも、あの船艦に外から穴一つ開けることはできない。あの船艦の周りは何層ものバリアが張ってあり、あれに攻撃すればその攻撃が何十倍にもなってここいったいに降り注ぐ」
「おい、なんでそれを知ってんだよ」
「それは・・・」
俺はあの船艦の整備技士であり、仲間に指示を出していたからだ。

★

「見ろ、勅使河原！これが天空母艦　ティアラ号だ！これをお前にまた見せるときが来るとはなぁッ！」
「チッ！また壊されに来たか」
「勅使河原、それって？」
「一度、アイツにオルガのことで喧嘩を売られてな。そのとき、艦内から穴を開けてやったんだ。あのときのアイツの顔ときたら」
「キサマ！何をごちゃごちゃ言ってやがる！早く渡さねぇとこの学校をこの船艦でぶち壊すぞ！」
　クロノスは槍の先を勅使河原に向ける。
「はぁ～。お前なぁ、あのときも言ったが、今俺がオルガ・アーガイルを持っていると思ってるのか？オルガは俺の荷物じゃねぇんだぜ」
「お前がチームの隊長で、そのチームにオルガがいることは知ってんだよ！だから、オルガを出すことくらい容易いことだろう？」
「どこからその情報を手に入れやがった」
「さぁね、風の噂ってやつさ」
「相変わらず、腹立たせるのがうまいな。お前は」
　話していると、船艦の方から二人の天使がやってきた。
　一人はクリーム色のセミロングくらいの髪に骸骨を肩に乗せた男。
　もう一人は人と比べると少し長いくらいの舌を出した大きな耳のような髪の男だった。
「クロノスさんよぉ、ミッションてのはなんだい？なんでも聞くぜ？命に関わること以外ならなーッ！」
「準備完了ですよ。いつでもいけますよ。」
「ダビデ、ガロ。お前たちはこの学校を荒らせ！荒らすだけ荒らすんだ！」
「荒らし！良い響きだーッ！」
「わかりましたよ。ダビデ、いきますよ」
　二人は翼を広げ、病院の方へ飛んでいく。
「試しにあそこからだ！」
「はしゃがないでくださいよ」

「リア、通信機を貸せ」
勅使河原は通信機をリアから渡されると、ダイアルを回し、オルガと連絡を取ろうとする。
「ん？オルガさんからかな？」
そのとき勅使河原からの通信に出たのは俺だった。
「オルガさん？どうしました？」
「俺だ、勅使河原だ」
低い声で名乗る勅使河原。それに動揺して俺は通信機を落としそうになる。
「て、勅使河原さん？どうして俺の通信機に・・・ってこれ、オルガさんのやつじゃないですか！」
「アイツッ！・・・今病院の方向に天使が二匹ほど飛んでいった。メンバーがそっちにいるんだろう？全力で守れ」
「天使ですか!?わかりました！」
俺は返事をして通信機の電源を切ったそのとき、
「獲物発見！やるぜ！ガロ！」
二人の天使が窓を突き破って病院内に入ってきた。
「ヒィャッハーーーッ！お前ら！オルガを知っているかー！」
「会って早々、自己紹介をしないとは、礼儀が悪いですよ。あ、失礼しましたよ、僕はガロで、こっちのうるさいのはダビデだよ」
「ダルク・ビンセント・デスティアーノ！テメェが略すんじゃねぇ、ガリガリ野郎」
「うるさいですよ、ダビデ」
「グヌヌヌ、あとで覚えてやがれ」
天使が内輪揉めをしているなか、四津野は立ち止まり、剣を抜く。
「二人とも下がって。ここは私がやる」
「先輩！俺も」
「後輩を守るのが先輩の仕事・・・でしょ？」
「あーあ、何をカッコつけてんだか」
四津野の言葉を聞くと、玲華はあくびをしながら四津野の前に出た。

「アタシ、ここ最近能力使えなくて鈍ってんの！戦わせなさいっての！」
「玲華」
「何？年齢が年齢だから戦っちゃダメと？・・・生きるか死ぬかのところでそんなことを言ってるつもり？」
「いや、私はお前が戦うことに大賛成だ」
「俺たちを忘れてるのか！」
ダビデは持ってきた槍を振り回しながら、こっちに向かって飛んでくる。
「うるせぇ！アンタはここで止まってな」
玲華は能力でダビデの槍を凍らせる。
「な、氷!?」
「そして、砕く！」
玲華の能力で凍った槍は四津野によって粉々になってしまう。
「に、人間ごときが！」
「アタシ、久しぶりに戦えて・・・手加減できないみたいだ」
玲華の足元から床が凍り始め、天使二人の足元にまで広がる。そして、氷は二人を捕らえた。
「な、なんとかするんだ、ガロ！テメェの天銀は残ってるだろ！」
「この寒さで、銀が凍ってるよ・・・。僕の体も凍る寸前だよ・・・」
ガロの手から何かが落ちる。それは銀色の液体だった。
「さて、四津野さんお願いします！」
四津野は既に氷で覆われ、頭だけが出た二人のところへ氷の床を歩いていく。
「お前ら、氷像になる準備はできてるか。」
「に、人間！許さねぇ、絶対許さねぇーーー！」
四津野の剣は二人を砕き、上半身と下半身が分かれてしまう。その断面からは血が出ず、赤くなっていた。
「ルナのところにいくよ！みんな！」
「了解！」「うん！」
俺たち二人は返事をすると、スケートリンクのような凍った廊下を

転ばないように慎重に進んでいった。
俺はそのとき、ガロの手からこぼれた液体を踏んでいたのを知らなかった。
★
「ハーッ、ハッハッハーッ！どうした勅使河原よ！お前の力はこんなものか？」
「ッ！・・・こいつ、前に会ったときよりもあの銀が強化されてやがる」
俺の壊波はクロノスの身に纏った銀色の何かによって防がれてしまう。あれはスライムのように滑らかで濁りのない銀色をしている。まるで伸縮自在の盾だ。
「この天銀は我ら天使の魔力技術による集大成！盾から武器、あらゆる物へと変化する最強の天銀だ！」
バカ笑いをするクロノス。波が通用しない以上、ヤツを倒すにはあの天銀を剥ぐしかない。
クロノスの攻撃に対応しているなか、俺の持っている通信機に緊急通知が入る。
「勅使河原さん！天使二人は倒しました！」
「了解、ただちにお前のチームの負傷者を連れて、安全な場所に逃げろ。上の船は俺が壊す」
「了解です！」
「壊すか・・・言ってくれるじゃねぇか！」
クロノスは少しずつこちらへと歩いてくる。
「待て」
屋上の扉が開かれ、今一番この場に来てはならない男が現れた。
「久しぶりだな・・・オルガ」

オルガの意思

久しぶりだな・・・オルガ。
天銀を纏うクロノスを見て、オルガは本気になる。
そして勅使河原はあの防御を崩せるのはオルガしかいないと信じ始めていた。
犬猿の仲。そんな関係の二人だが、今は共闘する以外の名案は無かった。
「いくぞ、オルガ・・・。ここはやるしかないみたいだ」
「みたいですね。くれぐれも足を引っ張らないように」
「お前こそな！」
オルガが最初にクロノスに攻撃する。オルガの天銀を使った攻撃は唯一の天銀を破壊する手段と言っても過言ではない。
そして装甲の開いた部分を、俺はオルガの持ってきた槍で攻撃する。もちろん、コーティングはされているが材料は天銀だろう。
「ッ！」
クロノスはおもわず、体勢を崩してしまう。
「今です、勅使河原さん！」
「指図すんなっての！」
槍はクロノスの天銀で作られた装甲にできた穴に、吸い込まれるように突き刺さる。
「チィッ！勅使河原！テメェだけでも殺さねぇとタダじゃすまねぇ！」
クロノスは俺の持っている槍に天銀を纏わせ、それに気づいたときには俺の手首まで浸食されていた。
「勅使河原さん！」
「離しやがれ！」
「あとは、母艦の中で話そうぜ。茶でも飲みながらよ」
「ッ！・・・オルガ！テメェはコイツらを天国へ引き返させるための第一の鍵だ。絶対に死ぬんじゃねぇぞ！」
俺はそう言うと、光に包まれ母艦に乗り込むことに

成功した。
★
「大丈夫なのか？ルナ」
「うん・・・まだ少しだけ頭が痛いけど、大丈夫だよ。私も戦える」
（ルナ、さすがにそれは不可能だ。まだ俺の魔力侵食が完全治っていない。）
「それでも戦わないと、それに・・・ずっと寝てるのは嫌なの！」
（ルナ・・・なら、まずは俺の魔力に馴れろ、いいな？）
「・・・うん！」
「さーて、ルナも復活したことだし、あの船を破壊しますか」
四津野は剣の切っ先を船に向ける。
そのときだった。
四津野はその事態に気づき、すぐに窓から離れ、俺たちの方へ走ってくる。
次の瞬間、窓の外が光り、壁が破壊された。
爆風が病室内を駆け巡り、俺たちを壁まで吹き飛ばす。
「こ、攻撃してきた・・・」
俺たちが生きていることに安心し、通信機のダイアルを回す。
「早く勅使河原さんに繋がらないと！勅使河原さん！勅使河原さん！」
四津野はダイアルを勅使河原さんの持つ通信機に合わせ、何度も通話ボタンを押す。だが、通信機から聞こえるのは砂嵐のような雑音のみが何度も繰り返される。
「勅使河原さん・・・まさか・・・」
「元気にしてたかよ、天使の長さん」
「これはこれは勅使河原よ。よくぞ、我がティアラ号に来てくれた」
俺の前に座る爺さん。これが天使の長、クロノス達に指揮をする親玉だ。名前はザザエルだっけな。
「で、この学校にこの母艦ごとやってきた理由はなんだ？テロなら小さな戦艦一隻でいいだろ？」
「ワシはここに取引をしにきたのじゃよ。ここにいるアリスというも

のになぁ。」
「アリス？」
　アリスと聞いて出てくるのはチームＺの一人。だが、なぜあんな若い能力者が？
「あの娘が唯一、この学校の裏を知っているようでな。そこであの娘と取引しにきたのじゃよ」
「この学校の裏を知って、お前らに何の得がある？俺には何の得にも」
「全てはこの学校の、いや、能力者が産み出されるきっかけとなった人物の情報を得るためじゃよ」
「なんだと？」
「その名はクリエイター、創造主、創造神・・・色々な名前があるが、その能力は後に破滅を作り出す。この能力者戦争で鍵になる」
「・・・理解した」
「ワシのしたいこと、それは能力者戦争にて勝利することだ。その戦争によってこの地球のほとんどの能力者が消え、ワシらは・・・ゲホッ！ゲホッ！」
「無理しない方がいいぜ、もう歳なんだろ？」
「無理してないわい！・・・クロノス、お前はオルガを捕まえてこい。ワシはこいつとでも話しとるわ」
　クロノスはビシッと敬礼をすると、俺を鼻で笑い、後ろへと去っていった。
「なーに、年寄りの話し相手になれってことじゃよ。それにお前にはこれから先のこの学校について知る必要がある。
　星英能力者専門学校についてな・・・
★
『オルガ・アーガイル！今すぐこの戦艦の前に姿を現せ！お前たちの隊長、勅使河原の命はこちらが預かっている！いつでも殺せる準備はできているぞ！』
　戦艦から響く放送はオルガへの放送だった。
　オルガはチームＯの教室の席に座ったまま動こうとしない。
　チームＯ全員が教室に集まると、すぐに会議が始まった。

「オルガ、どうするんだ？」
キラは深刻な顔をしてオルガにこの現状を問い質す。だが、オルガは聞く耳を持たず、目を閉じたまま席に座るだけだった。
そして放送が止み、戦艦から何かが校庭に降りたのを確認すると同時に、ＬＯＳＴ討伐部隊が襲いかかる。
その後の光景は見るに堪えなかった。
無惨にも一人の天使に攻撃が効かずに敗北していく部隊員と戦闘兵器。そのなかにチームＡのキラの好敵手であるヤマトも見える。
ヤマトの撃ったミサイルは天銀によって防がれ、天使の目の前で爆発する。
「キラさん！ヤマトさんが・・・」
「ッ！・・・オルガ！キサマァァァーーーッ！」
キラはついに怒りの限界を迎えたのかオルガの胸ぐらを掴んで床に叩きつける。
「どこまでお前はアホなんだ！お前一人のせいで既に何人もの犠牲者が出ているんだぞ！それに勅使河原さんも！」
「・・・俺だって」
「はぁ？」
「俺だってなんとかしたいんだよ！だけど、アイツと戦ってわかった！俺は弱い！お前よりも！四津野よりも！柊よりも！クロサクよりも！ルナよりも！玲華よりも！このチームの中で誰よりも弱い！俺は弱いからこれまで指揮をしてきた！そうに違いない！俺が、あんなぶっ壊れた野郎の前に立っても死ぬだけだ！」
キラはオルガを殴った。
オルガはその勢いで後ろに倒れる。
「キラさん！」
「俺は、指揮が誰だろうと戦う！どんなに弱くてもな！気に入った指揮が他のチームならチームだって変える！たが、俺はここにいる！それはお前が強いからだ！お前ほど全員の戦闘を見て、色々な戦闘の経験をしている頭のいいお前に指揮をしてもらいたいんだ！」
「お前・・・」

俺はキラの言葉を聞いて一歩前に出た。
「オルガさん、俺はオルガさんを弱いなんて思ったことないです。訓練のとき、俺の攻撃の良い点、悪い点を理解して指導してくれる。あんな芸当できるのはオルガさんだけです」
オルガは目を服の袖で拭うと、充血した目で俺たちを見た。
そうか、俺にはこんなにもすばらしい仲間がいたんだな
「わかった。指揮を出そう。全員、通信機の準備をしろ」
★
「おい、君・・・ってオルガ・アーガイル！なぜ、ここにいる！」
「なぜって？こいつに呼ばれたからですよ」
俺は天銀を槍へと変化させると、通信機で全員に指揮をとる。
柊と四津野は左から、キラとクロサクは右から、ルナと玲華は（少し心配だが）背後を取らせるように移動させる。
俺が出てきたことに驚いているのか、討伐部隊は銃撃を止め、俺に戦場を進ませる。
「オルガ、お前が出てくるとは思わなかった」
「取引のために顔を出したんじゃない。お前を倒すためだ」
あの天銀の鎧を崩せるのは天銀のみ。俺があの鎧を砕かなければならない。
「ほう、研究員も同然のお前が、俺の敵として前に出るか。いいだろう、かかってこい」
「いくぞ！」
天銀は固まっても天銀相手には無意味だ。中和され、やがて柔らかく液体のように流れてしまう。
「ッ！・・・やはり、天使相手では分が悪いか」
こいつがあのときみたく単細胞な野郎なら、ここで俺だけを殴るために天銀を硬め、剣や槍にでも変えてくる。少しでも鎧が薄くなった瞬間、全員で一斉に攻撃をする。
「な、なんだと・・・」
ヤツの鎧は数ミリ薄くなっただけで、手には股から肩まで守れる程度の盾と俺の持っているものに近い槍が生成されていた。

「いやー、ここ最近は盾に槍というものが自分の流行りでね。さぁ、ここからだ」
攻撃的になったクロノスの槍は俺の槍を弾くように突き飛ばした。
俺は一度、後ろへ退いてから槍を構え突き進む。俺の槍はクロノスの盾で受け流され、その一瞬でクロノスの槍は俺の腹部分に穴を開ける。
「ッ！」
ここまでか・・・いや、ここまで近づいた！
「食らえ！俺特製の天銀酸だ！」
俺は護身用に持っていたクロノス達の知らない天銀酸を投げる。
「こ、これは！」
「天銀酸・・・。この小瓶一つしか持ってないが、これさえあれば十分だ」
天銀酸。それはただ天銀に酸を合わせたものだ。天銀に酸を混ぜることで他の天銀物質につけると溶けるということに気づいた。もちろん、これで武器を作ることは不可能だが、いざというときに使えるだろうと思い、取っておいた。
天銀酸は思ったとおりにクロノスの盾ごと鎧を溶かす。
「お前らの欲しいのは俺じゃない。俺の頭脳だ。そうだろ？　この単細胞が」
「き、キサマーーーッ！」
「冷静さを欠いた。それがお前の敗因だ。全員！一斉攻撃！」
三つの方向から現れたチームＯ戦闘班の全員はクロノスにおもいっきり攻撃する。
最初にクロノスを攻撃したのはキラだった。
「これが・・・チームだ・・・。」
立っているのですら危うかった俺は気を失ってそのまま後ろに倒れた。

ザザエルの契約

多くの歓声と共に、オルガはリア監督の持ってきた担架で保健室に運ばれる。
腹部にできた穴は、気を失ったのを良いことに玲華の力で無理矢理凍らせて塞いだが・・・。
校庭に残された俺とルナとクロサクは、その場でただ待つことしかできない。あの船に乗り込むなんてまず不可能だ。
「オルガさん大丈夫かな・・・」
(今は待つだけだ。そして彼を信じるしかないだろう)
「だよね・・・海都、どうする?」
「どうするって言われても、監督にここで待ってろって言われたしな」
クロサクはずっとキョロキョロ辺りを見ている。
きっと待てない性格なんだろう。
「クロサクも待てない感じ?」
「いや、何か変なんだ。討伐部隊のヤツらもみんないなくなって、なんで俺たちだけここに残されるんだ?もし俺が監督なら教室に戻るように指示する」
「確かに・・・奇妙だ。一度、監督に」
俺はそう言い、通信機を取り出す。すると、通信機に監督から連絡が入る。
「三人とも。オルガは大丈夫、心配しないで。それと指示遅れてごめんなさい。今日は自由行動にするわ。オルガが心配なら、保健室に来ても良い。船が気になるならずっとそこで船を見ててもいいわ」
「了解です。ただ一つ気になることがあって」
「勅使河原のこと?」
「はい・・・」
「彼なら大丈夫だわ」
★
「おいおい、なんだこれは・・・」
俺がザザエルのおっさんの後をついていくと、目の前に大量のカプ

セルが現れた。カプセル全てに何かが入っているのを俺は察知した。
「フォッフォッフォ・・・気になるか？これはただの戦闘兵器じゃよ。今、天使は数が少なくなりつつある。特に戦闘向きの天使はなぁ。じゃから、ワシらは天使型戦闘用アンドロイドを作り上げた。全てに意思があり、全てにワシへの忠誠をプログラミングしておる」
「こんな武器があるのに、創造主が必要なのか？」
「これはあくまでも秘密兵器じゃよ。まずは創造主に侵略してもらい、残党をこれでやるってことじゃ」
「・・・なるほどね、理解した。
　ようするにじいさんはこれをアリスに渡すために来たんだろ？
「な、・・・何を言っておる！これはあくまでも秘密兵器！人間に渡すということはな、ない！」
「図星だな？アリスに頼まれたんだろ？たくさんのアンドロイドを」
「なぜ、そう言い切れるんじゃ・・・？」
「俺の能力はすでにじいさん、アンタを囲んでいるからだ」
「な!?」
　波はじいさんを囲み、ここいったい、全ての機械を覆っていた。じいさんの言動一つ一つに波が反応し、それで嘘か本当かを図っていた。
「情報さえ、聞き出せれば結構。じゃあな、じいさん！」
「ま、待て！ヤツを捕まえるんじゃ！」
「俺の手を固定するだけじゃ、俺は止められない」
　そのとき、俺は波を荒ぶらせた。機械を覆っていた波はすでにその機械へと攻撃し、機械を破壊した。
　じいさんや、天使軍のヤツらは爆発で体勢を崩し、立ち上がれなくなる。
「なぜ、お前は立っていられるんだ？」
「・・・では、なぜお前らは這いつくばっているんだ？」
「グヌヌヌ・・・、キサマァ！」
　ザザエルはその老体に鞭を打ち、忘れられていた天使の羽を羽ばたかせる。

「その体とは真逆に良い羽持ってんじゃねぇか」
「バカにするでない！これでも司令官をやっている者じゃ！死ねい！化け物！」
ザザエルは天銀で作り出した鎌で俺の首を狙う。
だが、自然が生み出した波の前では無力だった・・・
★
空中に浮いていた母艦が少しずつ下へと落ちてくるのがわかる。隙間からは煙も発ち始めた。
「お、おい、柊。アイツ、こっちきてないか？」
クロサクが母艦を指差す。少しずつだが、煙の上がる母艦はこちらへと頭を向け、降下し始めているのがわかる。
「ルナ！逃げろ！」
「うん！」
俺はまずルナに逃げるように伝え、自分はゆっくりと3歩ほど下がったあと、全力で走り出した。
「ルナ！クロサク！潰されたくなければ逃げろー！」
（男らしくないね。男ならもっと胸張ってさー）
「お前は死ねって言ってるのか！タマ！」
船は火を吹きながら、校庭に船頭を突き刺す。
船頭が校庭を抉りながら数キロメートル進んだ後、校舎数メートル先で船は止まった。
「はぁ、はぁ・・・大丈夫か？」
「私は大丈夫。」
「俺もだ。・・・それにしても、どうしてさっきまで飛んでたコイツが落ちてくるんだよ」
「それは俺が墜落させたからだ」
火の上がる船のなかから、黒くなった勅使河原が男を背負いながら現れた。
その男はひどく年老いていた。
「この人は？」
「ザザエル。天使に指揮をしていた、いわばこの船の親玉だな」

「生きてるんスか?コイツ」
「辛うじて息はある。コイツには色々と聞きたいことがあるからここから持ってきた」
「持ってきたって・・・」
「とりあえず、みんなよく頑張った。ミッションクリアだな」
　勅使河原はザザエルを保健室へと運ぶ。俺たちは船をずっと見ていた。そしてこの船を見て、あの人が改めて強いというのを確信した。
「さーて、天使の親玉さんよぉ。この落とし前はどうつけてくれるんだい?」
「ひ、ひぃ〜〜〜。ゆ、許してください、な、なんでも話しますからー」
　ザザエルは勅使河原の顔を見るなり、ベッドから逃げ出して部屋の隅で土下座をする。これが天使の親玉と聞くと、少し残念にも見えるが・・・。
「今、なんでも・・・って言ったよな?じゃあ聞くぜ。具体的にアリスとはどういう契約を結ぼうとしてたんだ?」
「せ、戦争のコマとして戦ってもらおうとしてたんじゃよ。そして創造主のことを聞くためにきたんじゃ。」
「・・・で?」
　勅使河原はザザエルの後ろの壁を蹴って威圧する。
「そ、それだけ、それだけです!あの船のなかにあったアンドロイドはあくまでも人間の代わりにと持ってきたものです!人間よりは劣りますが、数としては結構な数を・・・」
「わかった・・・。」
　勅使河原はそれを聞くと壁から足を離し、近くのイスに深く腰掛けた。
「それじゃあ、最後に聞きたい。オルガが欲しかった理由はなんだ?」
「そ、それは・・・」
「俺が説明する・・・」
　扉を開け、そこにいたのは傷だらけのクロノスだった。クロノスは今にも溶けそうな天銀を杖のような形にして自分の体重を支えてい

た。
「今現在、天使のなかにオルガほどの研究員はいなかったんだ。この天銀もオルガの作ったものだ。臨機応変に形を変えることができ、こんなにも使いやすい物質を作る者は、今の研究員誰を見てもいないんだ。そこでこの技術と戦闘員としての力を見て、もう一度帰って来て欲しかったんだ。俺たちの戦力増加のためにな。・・・そうだろ？ザザエルのじいさん」
「お前、生きてたのか・・・」
「ここの設備はいい。やはり人間はすごいな・・・」
　次の瞬間、クロノスの体重を支えていた杖は液体のようになる。そしてクロノスは病室の床に倒れた。
「く、クロノス！」
「人間の知恵と技術あっても、天使を治すことは不可能か・・・。あばよ、ザザエルのじいさん・・・」
　クロノスは金色の光に包まれると、その身と魂を天国へと帰した。
「あぁ・・・あぁ・・・クロノス。」
「じいさん。最後に聞いて良いか？」
「な、なんじゃ。止めでも刺すのか？」
「違う、アリスについてだ。アリスとはいったい何者なんだ！」
「アリスは・・・あの事件の・・・生還しゃ・・・」
　銃声が病室を轟かせた。
　ザザエルは脳天を撃ち抜かれ、俺たちの前で倒れた。
「それは言わない約束だろう？・・・ザザエルさん」
　開けたままの扉の先にはアリスと思われるウサギのフードをかぶった女が立っていた。服を着ていてもわかるスラリとしたボディーラインとクリーム色の髪だけが唯一の特徴だった。
「あ、あ、・・・」
「それじゃあ、ａｕ　ｒｅｖｏｉｒ・・・フフフ」
「待て！」
　勅使河原と四津野はすぐに廊下へと飛び出る。廊下の先には誰もいなかった。

ザザエルの体はクロノスと同じように消えていく。
「クソッ！」
勅使河原は思いっきり壁を殴った。そのときできた波でさえ、アリスを捕らえることはできなかった。

月夜

「隊長、お茶が入りました」
「どうも、ありがとう。ロカさん」
　天使の戦艦の落ちたその日の夜、久しぶりに月が見えていた。きっと、あの戦艦がこの学校を囲うバリアを破壊したのだろう。透明な他の世界の者からの侵入を防ぐためのバリアを・・・。
「今回の天使の討伐のために、ＬＯＳＴ討伐部隊の隊員のほとんどが亡くなったみたいですね」
「そうだな・・・。まぁ、あの部隊の志願者は多いものだ。いずれ、いつも通りの人数になってるだろう」
「はい・・・。それにしても月が綺麗ですね」
「それは私への告白かい？ロカさん。この年になると女の子でも美人さんならいいかなって・・・そんな雰囲気じゃないね」
　私が振り向くとそこには、三日月のヴェールが発動した状態のロカが立っていた。
「いつからお気づきに？」
「今回の一からかな。君の声のトーンが違うからさ」
　私は机の引き出しからナイフを取りだし、ロカに向かって投げる。あのヴェールはナイフを受け流す。何事も無かったかのように。
「やっぱりそのヴェール厄介だね」
「ありがとうございます。」
「でも・・・そのナイフにとある仕掛けが施されていたのに気づかなかったみたいだ」
「・・・なんのことでしょうか？」
　ナイフを受け流し、ロカの後ろにある扉に刺さることまでは私の予想通り、そしてナイフのソングホールにワイヤーが縛ってあったことにロカは気づいてないみたいだ。
「戦闘経験は私の方が上みたいね」
　私はワイヤーを下へと無理矢理下ろす。
　ロカのちょうど肩の上を通ったワイヤーはヴェールに関係なく、ロ

カの腕を切り落とした。
「な!?」
しかし、私の考えはすでに読まれていた、というよりは最初から体に細工がされていた。
「知ってしまいましたね。私の秘密を・・・」
私はすぐに自身の能力で、異空間の中へ姿を消した。
「あの子、まさかアンドロイド?」
★
『チームA　隊長、東条　アキネ。一週間も行方不明!』
新聞の大きな見出しが俺たちの視線を釘付けにした。
情報によると、アキネが一週間前の夜、チーム内の会議が終わったあと、隊長事務室にて姿を消したらしい。
事務室では争った痕跡として、ドア付近に刃物で切ったような跡が確認されているようだ。
(どうしたんだろうね・・・アキネさん)
「・・・気になるな」
俺はすぐにチームAの教室のある校舎に向かう。
(あまり口を出さない方がいいと思うよ。上の人間が暗殺されるなんて良くあることだし)
「アキネさんがそう簡単に殺されると思うか?」
(そう言われると・・・思わないね)
きっと何か裏がある。そう思いながら俺は曲がり角を曲がった。
その先にいたのは、
「ロカさん!?」
「あ、あなたは!」
アキネの隊長補佐のロカだった。
「心配です・・・。何も言わずにいなくなってしまい」
話を聞くと、ロカがトイレに行ってアキネから目を離した隙に部屋から消えてしまったらしい。そのときすでにナイフを刺したような跡があったと言っていた。
「普段ならどこかに行くときは書き置きをしていくのですが、その夜

は何もなくて・・・。最初はイタズラかな?とか、書き置きを忘れたのかな?とか、そんなことを考えていたのですが、さすがに3日過ぎたところから不審に思い始めまして。そこで新聞部の方に依頼したんです」
「ロカさん・・・」
　ロカは今にも泣きそうだった。顔はずっと下を向き、俺の目を見ることなく、ベンチに座っていた。
「アキネさんを探すのはどうですか?」
「チームメンバー全員で探しました。でも、隊長の『た』の字も出てこなかったんです。・・・ごめんなさい、こんな話聞いて貰っちゃって・・・。また全員で探してみようと思います」
　ロカは立ち上がると、静かに教室へと歩いていった。
　その後ろ姿はとても小さく感じた。
(・・・海都はなんとも思わないのかい?)
「何がだよ。俺だって人間だ。ロカさんを見て、同じ思いになるよ」
(ほぉ・・・それは「アキネが死んだ、ばんざーい」って思いか?)
「な、タマ!何てことを!」
(私にはわかる。彼女が犯人だってね)
「どうしてだ?」
(まぁ、一つしか証拠は見つかってないけどね・・・
　ロカの説明は新聞記事と違う部分が一つあったんだ。これは記者の確認不足や、記入ミスかもしれないけどね。新聞には壁のキズについて、『刃物で切ったような跡』と書いてあった。でも、ロカは『ナイフを刺したような跡』があった、って言っていた。
「なるほど・・・確かに刃物で切ったと、ナイフで刺したじゃ全く別になる・・・のか?」
(実際にやってみるかい?)
　そう言って、タマは幻想のナイフを出し、近くの木にキズをつけた。
　一回目はナイフを上から下へとキズをつけ、二回目はその横にナイフを刺すようにキズをつけた。
　確かにその跡は別物だったが、それはあくまでもタマがつけたキズ

だ。壁についたものを見ていないからなんとも言えない。
「うーん、判断できないな・・・」
（まぁ、次尻尾を出したとき、問い質してみるってのはどう？・・・まぁ、標的になるのは海都だけどね）
「それってリベンジマッチって聞けばかっこよくないか？」
（負けたら恥ずかしいけどねー、フフフ）
「言ってろ。」
「今の話聞いたぞ、柊。」
　声は木の上から聞こえた。
「あ！」
　そこにはキラが座っていた。
「寝てたら可愛い女の声が聞こえたからな、何かと思って見てみればお前とロカが話てんだ。そして、そのあとのお前の狐さんとの会話。なかなか面白いこと話してんじゃねぇか」
「いやー、これはですね・・・ハハハ」
　俺はそっぽを向いて誤魔化すが、キラは目を輝かせながら、俺の両肩を掴む。
「その予想が当たってたら、チームＡはどうなる？」
「どうなるってのは・・・？」
「簡単だ。戦争勃発だ。スパイのロカ率いる相手チームとチームＡ全員の戦争だ。とても面白いことになりそうだな」
　キラはこれまでにないような悪い顔を見せる。それは本当の悪魔のようだった。
「まぁ、今となっては味方。もしものときはチームＡ側について戦わないとかもなー。ま、戦争の準備でもしとけや、四津野から剣術でも教わってさ」
（剣術って・・・。私、無視されてる？）
　キラはそう言うと、両手をポケットにしまって町の方へとがに股で歩いていった。
（また面倒なことになりそうだね）
「俺、一年生だよな」

（もう秋も終盤だし・・・ね？）
「・・・」
俺はその日、ずっとベンチで横になっていた。
ルナがやってきたのはその数時間後の話である。
★
「・・・ここは？」
私はやっと異空間から出て、とある場所に辿り着いた。
高い草が生えた草原。私は木の生い茂る林の方へと草を掻き分けて進む。
「寺・・・」
そこには古びた寺があった。
寺の壁にはたくさんの札が貼られ、出入り口と思われる部分は札が切られていた。
「ここってまさか、タマの？」
ここは柊君に憑いている妖狐、タマがいた寺だと思われる寺。昔、元チームＡ隊長のエースが書いた日記帳を読んでいるなかで出てきた昔飼っていた狐を閉じ込めた寺と似ていた。
「ん？なんだ？客人か？」
「あ、あなたは・・・！」
そこにいたのは私の空間に吸い込まれて消えた男だった。
「エース。チームＡの元隊員だが？そうだよな？チームＡ隊長の東条アキネさん？」
囲炉裏の中で燃える薪がパチパチと音をあげる。
鍋のなかには味噌汁があった。
「エース隊長・・・」
「隊長？隊員はお前だろう？」
「・・・エース。聞きたいことがある」
「なんだ？」
「ここはいったいどこだ？」
「ここは大黒八尾寺（だいこくのはちびでら）。ここには八尾狐がいた。稲荷神、九尾になれない狐がな。だが、若い男にあってその狐はその男に憑くことに決めた

んだ。だが、その男はその狐をここに捨てた。それは八尾狐よりも九尾狐の方が強いからだ。まるで強い武器を持った瞬間、弱い武器を捨てるようにな」
「その若い男ってのは、エースですか？」
「そうだ。恥ずかしながらな」
　エースは私の前で出来立ての味噌汁を啜る。そして熱そうな仕草をする。
「その後、九尾を憑けた男はその九尾に魂を喰われ、九尾のなかで九尾の一部になった。とても気持ち悪かった。ニキビとかイボとか、そんな気分だった。・・・続き聞きたいか？」
「・・・はい。」
「なら、何かを恵んでくれ。そうだな・・・、もう一度あの世界に戻るためのチャンスとかな？」
「・・・わかりましたよ。話を聞いてからですけどね」
「ありがたいな。で、続きか。あるとき男は捨てた八尾に助けられた。そして今、記憶を取り戻してここにいる。エース、いや
　柊　山岳・・・としてな。

柊とタマ

柊　山岳・・・それが本当の名前なんですね。
私は山岳からもらった味噌汁を飲む。
とても深みのある味。まるでこの場所でずっと研究しながら至高の一品を作っていたような。
「おいしいです。」
「ありがとう。・・・それでは、準備をするか」
山岳は壁にかけてあったコートを羽織り、薪を割る斧を肩に担ぐ。
「準備って？」
「山を下る準備だ。ここは熊が出る。実際に俺は戦ったからな。その味噌汁のなかにある肉、それは熊肉だ。」
「え!?」
「・・・冗談だ。さすがに能力を失った俺じゃあ熊には勝てない」
「能力を・・・失った？」
「俺たち、柊はたぶん『能力を誰かから受け継ぐ能力』なんだ。柊は八尾狐から、俺は二匹の狐から能力を得た。能力者が決めた法律ではそれは有罪なんだろうが、そういう能力は仕方ないと思っている」
「チームOのクロサクやルナは？」
「あれは例外だ。二人は能力を使えるだけの素質はあった。俺たちには受け継ぐ以外、能力を得る方法はない」
「大会のとき言っていた『能力を受け継ぐのを見たことがない』というのは？」
「あれは他の人間がということだ。俺の予想では十年は余裕でかかると言うまでだ」
私は囲炉裏の火を消して靴を履く。
山岳はとっくに用意を終え、扉を開けて待っていた。
「遅いぞ。夜が明けるまでに、俺たちは学校に着かなければならない。あの学校に嵐が来る前に・・・」
「嵐？」
「嵐だ。特大のな」

私たちは外へ出ると、寺の前の草によって消えた道なき道を歩くことに決めた。

★

ロカと話したその夜。

「尻尾か・・・」

尻尾で思ったが、タマの尻尾は何度数えても八つしかない。

「タマー。」

「どうしたんだ？」

タマはここ最近、夜になると俺の体から出てはココアを一杯飲み、また俺の体に入る。

俺はその飲んでいる間を狙った。

「タマの尻尾、どうしたらあと一本生えるんだ？」

「あれ？話さなかったっけ？」

「たぶん、話してない・・・あれ？」

「もー、覚えててよ。そうだな・・・えい！」

タマは立ち上がると、急に俺を押し倒した。

はだけた着物からタマの胸元が見える。

「海都との子供を授かることができたらかな？」

「ま、また冗談だよな？なぁ？」

「・・・むー、悪かった、悪かったよ。冗談だって」

タマは帯をきつく絞め、イスに座ってまたココアを飲み始めた。

「でも、君ともう少し力を合わせて、強者を倒すことができたら生えるかもしれないなー」

「それは・・・冗談じゃないな？」

「うん！」

「強者か・・・。勅使河原さんとか？」

「確かに！あの人は強いね」

オルガとか、キラとか、四津野とかたくさん強い人はいる。だが、何よりも俺が思う強い人。それは・・・

「監督・・・かな」

「・・・え？」

「え?･監督だよ、監督!･あの人は強いだろ!･火災のなか、火をデータ化したり、爆発を被害なく一人で防いだり、能力値で動かす船を一人で長期間動かしたり、たぶんあの人は強いよ!･」
「うーん、強いかな･･･。確かにあのでーた?ってのは面白い能力だけどさ」
「もしも最後卒業するときに戦うならあの人だな」
「･･･」
　タマは黙り込み、ココアの無くなったマグカップの底をじっと見ていた。
「そうだね。･･･それじゃ、私はもう寝るよ」
「そうか、おやすみ。」
「おやすみ･･･」
　タマは何かを隠しているようだった。俺の外に出ている間はタマの心の声は何も聞こえない。
　だから外へ出たとき、タマはまれに悲しい顔をする。
「今日は一日授業なしで特訓だ。この前の戦績もあってか、戦場の一つを貸し切ることができた」
　リアは入ってくると、鍵を片手にそう言った。
　キラは喜んで、リアから鍵を貰うと四津野と共に部屋から走って出ていった。
　チームOは話を聞くと、あまり戦場の貸し切りができないようだ。最高でも二時間だという。
　先輩方が喜ぶなか、勅使河原はずっと窓の外を見ていた。何かを考えているようだった。
「柊」
「ど、どうしました?･」
　俺はオルガに肩を叩かれ、振り返った。
「あの人が窓の外を見てるときは話しかけない方がいい。･･･訓練は一年組で準備体操してからやるように」
「はい!･」
　オルガは壁にかかったチームO専用の研究室の鍵を取ると教室か

ら出た。
（オルガも何か考え事かね・・・研究室の鍵持っていったし）
「そうなのかな・・・」
戦場Ｚ。
障害物のブロックが十何個か床から生えている戦場で、普段はチームＺやＬＯＳＴ討伐部隊の隊員が使っている場所だという。
「全面真っ白って落ち着かないですね・・・」
「まぁ、ルナはずっと寝てたしな。みんな、準備体操するぞー」
俺たちはクロサク、ルナと集まり、準備体操を行う。
そして一通り準備体操をした後、全員いつもの戦闘体勢になる。ルナはクロードの剣を持ち、クロサクは雷を纏う。
「ちょっといいか？」
準備後、初めて口を開いたのはクロサクだった。
「どうした？クロサク」
「俺は雷帝の力を受け継いだ。けど、俺はまだ自分が弱く感じる。この力を最大限に引き出せていないような」
「クロサク・・・」
「だから、今日は俺対お前ら二人で特訓したい！雷帝は前に二人相手に手加減したという！だから！」
「・・・そんなこと言わなくてもいいよ。むしろ、雷帝が手加減をしていたなんて聞いたら、クロサクを殴りたくなってきた。ルナもいいだろ？」
「私も、あの事件を経て強くなったってことを証明しないとね」
「じゃあ・・・かかってこい！」
クロサクは手のひらに電気を貯め、俺たちが来るのを待つ。
「いくぞ、ルナ！」
「うん！」
俺たちがクロサクへと走り始めたそのとき、
『これより、チームＺの戦闘訓練を開始します！目標はチームＯメンバーの全滅！開始！』
という放送がサイレンと共に鳴り始めた。。

俺たちは攻撃の手を止め、放送のあったスピーカーの方を向く。
「なんだ・・・？」
（嫌な予感がする・・・。）
タマは何かを察知したのか、俺とすぐに融合した。
「どうした、タマ！」
（いつでも戦える準備をして。他にも伝えて）
「あ、あぁ！・・・みなさん、戦闘準備をしてください！こちらに何かが向かってきているようです！」
サイレンは止み、戦場の真ん中の穴が開く。
『アンドロイドS、チームOを殲滅せよ』
アンドロイドS、それはフードを目深に被り、服の間からわずかに肌色をちらつかせていた。
（人間？いや、機械だ！）
「これより、チームOメンバーを排除します」
アンドロイドは一斉に俺たちに襲いかかってきた。数はざっと数えて10体は越えている。・・・12体くらいか。
「ッ！ルナ、クロサク、大丈夫か！」
「私は大丈夫、でもクロサク君の方に3体向かっていった！」
俺とルナは1体を対処する。武器はサーベルのような細い剣を両手に持つものがいれば、短刀のような短い刀を片手に持つものもいる。同じ部分があるとすれば、どれも素早い動きで俺たちに攻撃するという部分だ。
「雷撃”飛び魚”！」
クロサクは電気で魚の形を作ってミサイルのように飛ばす。
それはアンドロイドの体に刺さって放電する。
「どうよッ！」
先に走ってきていた2体はそれで止めることができたが、それを踏み台にして現れたサーベル持ちの1体の攻撃を防ぎきれずに、クロサクは左肩を少し切られてしまう。
「うぐぁッ！・・・チッ！」
クロサクは舌打ちをするとすぐに電気で槍を作り上げ、アンドロイ

ドの頭めがけて投げる。槍はアンドロイドの首を貫いた。
「はぁ、はぁ、はぁ・・・。柊、大丈夫か」
俺とルナは2体、キラと四津野は3体倒していた。
クロサクが肩に切り傷を負ってしまった以外、ケガはなかった。
「・・・なんでチームZが俺たちを」
「前々から気になっていたけど、まさか攻めてくるなんてね。・・・宣戦布告と受け取ってOK？」
四津野はそう言い、戦場を出ようとする。
「あれ？」
戦場の扉が開かない・・・。まさか、
「閉じ込められたみたい・・・」

コミュニケーションと連携攻撃

教室に戻ってくると、榊原だけがいた。
「他は戦場か。・・・なぜお前はここにいるんだ？」
「そんなのアンタには関係ないだろ？」
「・・・そうか」
「・・・」
話が続かない。榊原は無口な部分が多く、俺たち年上に礼儀の”れ”の字もなく、ちゃんとした敬語を使ったときを見たことがない。
「ところで、お前は誰か、尊敬する人っているか？」
「尊敬する人ね・・・逆にアンタは？教えてくれたらアタシも教えるよ」
「尊敬する人か・・・」
質問しといてなんだが、尊敬する人なんて考えたことがないな。しいていえば・・・
「監督だな」
「監督ね・・・アタシはそうだな。案外、四津野の言葉でここに来た感はあるけど、アンタの姿には尊敬してるかな」
「意外だな。」
「ふふ、冗談だよ。アタシが尊敬する人なんていないよ」
「わかってた。俺は尊敬されるような立場じゃないからな」
「・・・尊敬ってさ」
「ん？」
「どうすれば尊敬されるような人になるのかな」
「・・・難しい質問だな。俺はカリスマ性だと思うが」
「アンタ、自分の首を閉めてどうすんのさ」
「・・・やめだ、やめ。戦場にでも行くぞ」
「わかったよ」
俺は教室の電気を消すと、榊原を外に出して鍵を閉めた。
「忘れ物はないよな？」
「とりあえず生徒手帳だけ持ってればいいでしょ？」
「なにこれ・・・」

俺たちは戦場の扉を見て、開いた口が閉じなくなってしまった。
魔法初心者の俺たちでもわかる大きな魔法陣はその扉を固く閉ざしているのがわかった。
「魔法陣・・・それも普通のものではない・・・」
「中にみんながいるんだよね？これじゃあ、中のみんなが出れないじゃん！」
榊原は魔法陣へと向かう。
「待て！」
榊原の氷は大きな槍へと変わり、魔法陣を貫こうとする。だが、魔法陣はその槍を砕き、榊原を通路へと跳ね返す。榊原の軽い体はおもいっきり遠くへ吹っ飛ばされた。
「ッ！・・・この魔法陣が！」
俺は両腕でまた魔法陣へと立ち向かう榊原を押さえた。
「落ち着け！お前じゃ、この魔法陣は突破できない。」
「アンタなら突破できんのかよ！」
「俺でも・・・無理だ・・・ッ！」
榊原は俺の脇腹を肘打ちして腕から抜け出すと、今度は剣で魔法陣を切ろうとする。
「無茶だ！監督が来るのを待て！監督なら魔法陣を解けるはずだ！」
「監督なんかいらない！アタシならこのくらい！・・・うわっ！」
また榊原は跳ね返された。
「諦めろ！」
「諦めねぇよ！アンタは、仲間が心配じゃねぇのか！」
「仲間！」
「もしも、今この戦場で仲間が死にそうだったらどうするんだ！助けられるかもしれないだろ！」
俺はもしもの可能性を考えた。この前の事件といい、ルナや監督が襲われた事件といい、今回のと関係あるかもしれない。
もしもそうなら・・・
「榊原の言いたいことはわかった。だが、魔法陣は」
「複雑なものほど強い魔力でできているんだろ？」

「お前・・・」
「ここに来てから勉強した。能力のこと、魔法のこと・・・この世界の異能力、超能力ってやつ。アタシのこの能力を知るためにな」
一年生組はキラや四津野が授業を聞いていない間、一生懸命勉強していた。特に柊や赤井を抜いて榊原は成績優秀だった。
俺はそれを知っている。
「お前が勉強熱心なやつってのは俺が知っている」
俺は天銀で剣を作り上げると、魔法陣の各所を差した。
「榊原、魔法陣の弱点勉強したか？」
「それ以上の魔力か、魔法陣じたいを書き換える、上書きされることだよな？」
「そのとおりだ。じゃあもう一つ。俺の指揮に従うか？」
「アタシが最初従いたくないと言ったの覚えてるか？・・・でも、今なら従ってやるよ！」
「よく言った。・・・いくぞ！」
榊原が魔法陣の表面を削る。そして俺が魔法陣を無理矢理書き換える。
「はぁ・・・はぁ・・・まだ？リーダーさんよ！」
「あと少しだ」
「具体的に？」
「・・・あと一発で終わらせる！」
「了解！」
そう言った一発目で、榊原の手に握られた氷の剣は折れ、跳ね返される。
「ッ！」
「榊原ッ！」
俺は榊原が最後に傷付けた魔法陣の一部分を書き換えると、魔法陣は灰になって崩れた。
最後の一発が魔法陣にトドメを指したのだろう。
「やったじゃん、魔法陣」
「あぁ、ありがとう。」

冷たい床に倒れている榊原は手を上げた。俺はその手を握る。
「あんなにも強固な魔法陣を傷付けるなんてな」
まるで俺たちが魔法陣を破壊するのを待っていたかのように誰かが歩いてくる。
「さすが私のチームのメンバーだよ」
顔を上げると、そこには監督が立っていた。
「監督？」
「途中から見てたんだけどね、あんな無理矢理魔法陣を破壊するなんて思わなかったよ。あ、私がやったんじゃないよ？私は解除はできても生成はできないから・・・まぁ何よりも、榊原と君があんなにも連携できるなんて思わなかったよ。話すことが嫌いなリーダーと、敬語の使えない後輩・・・なかなか面白い組み合わせだね」
俺たちは監督の言葉にため息をついた。特に榊原は疲れから立ち上がることすらできなかった。
監督は扉の鍵をデータとして作り上げ、扉を開ける。
重たい扉は自動で開く。
「みんな！」
全員生きていた。周りには壊れたロボットの部品が転がっている。形状からしてアンドロイドに近いものか、人の顔のような物も見えた。
「疲れましたよ、監督。これも特訓ですか？」
「いや、これは完全にチームZのやったことだ。私は関係ない。・・・とりあえず教室に戻ろう。すぐに報告書を作成して、放課後の会議に提出する。五人は手伝ってくれ。口を動かすだけでいいから」
「了解。・・・監督、これも頼む」
「キラ、これはなんだ？」
キラは立ち上がると、ずっと手に持っていたものを見せた。
手の中には赤い宝石のような輝きの石が握られていた。
「アンドロイドの着けていたグローブの手の甲に付いていた石だ。どこかでこれと同じものを見たことがある。」
「わかった。あとでデータ解析してみるよ。今は報告が先だ」

（あの石・・・）
「どうした、タマ？」
（・・・いや、なんでもないや。・・・そうだ！海都、帰る前に石を拾ってくれない？）
「別にいいが」
俺は全員が部屋を出ていくなか、一人壊れたアンドロイドの体を探し、手の甲にキラの持っていた物と同じ石を見つけた。
「あった。これでいいか？」
（うん、ありがとう。）
俺は石をハンカチで包むとポケットの中に入れ、部屋を出ていった。
部屋は証拠としてリア監督によって施錠されたが、放課後の会議終了後の確認で部屋を開けたとき、
そこに壊れたアンドロイドは一つも無かったという。
★
「失敗しましたね。」
薄暗い部屋で一人がモニター前に座る人間に話しかける。
「まぁ天国産にちょっと意志を施した程度だ。そう簡単に本物は倒せないよ」
「石・・・。私のグローブに付いているものですよね？あれ付けるのと付けないのとでは違いが出るものなんですか？」
「君が能力を使えるようになったのも、あの石の成果だ。彼らアンドロイドはあれで動けるようになっている。君の体もそうだろう？」
「私の体は半年前の戦闘で動かなくなってしまいましたからね。・・・チームＡの監督は壊れた人間は捨てますから」
「そうね・・・。」
モニター前に座る女は立ち上がると、後ろで見ていた女の肩を掴む。
「楽しみにしてるよ。君の力がどこまで素晴らしいものへと進化するか。その石の使用者一人目としてね」
ロカ・セルナードさん・・・

剣を手にした日

「クロード、ちょっといいかな？」
　私は昼休みにクロードと話すことに決めた。
　私たちは海都、タマのようにあまり話すことがない。前まで長い間寝ていたのもあったし・・・。
　何よりも一緒に戦う仲間として、コミュニケーションを取るというのは大事だし。
（なんだ？昼の間は戦わないのなら少し寝かせてくれないか？）
「ちょっと話したくてね。ほら、私たちあまり話してないじゃん？」
（・・・わかった。で、何か話題はあるのか？）
「話題・・・えっと・・・そうだ。クロードは吸血鬼なんだよね？やっぱり十字架とかダメなの？」
（ダメだな。昔、十字架のような形をした剣を振る男に会ったが、あのときは苦戦を強いられたものだ）
「男って？」
（オシャレな男だ。背中に十字架の形がはっきりと・・・思い出すだけで死にそうだ、違う話はないのか？）
「えっと、じゃあ・・・」
（・・・正直、お前と仲良くなれるとは思えない。）
「え？」
　クロードは私の前に思念体として現れて椅子に座ると、私の持っている剣を机の上に置いた。
「俺は正直、なぜこんなことになってしまったと思っている。能力とはなんだとな。前にお前の体に俺の心臓が入っていると聞いたとき、本当にあの女を憎んだ」
「確かに、あの人はひどいことをしたと思う。死んだって考えると、今こうやって生きているってのはすごいことだけど、他にも方法はあったんじゃないかなって」
「・・・俺は一つ考えた」
「何？」

「お前にこの剣を渡して、俺はこの世を去る。そうすれば、お前は自由に生きれるんじゃないかって」
「それはできないよ。クロード聞いてなかったの？私たちの魂は二人で一つ。たぶん片方が消えたらもう片方も・・・」
「そう言い切れるか？今の状態は、海都とタマのような二つの魂と言えるんじゃないのか？」
「でも、海都は言ってたよ。夜になると、タマは実体になって現れるって」
「・・・俺は無理だ」
「そうだね・・・でも」
「赤井さん、ちょっといいかな？」
　私が気を落とすクロードを励まそうとしたそのとき、リア監督が来た。
「どうしました？」
「ちょっと四時限目早めに始めるっての聞いてなかった？」
「あ！もうそんな時間でした？」
　私は腕時計を見た。時間はすでに四時限目の開始時刻を越えていた。
「すぐにむかいます！」
（・・・）
　クロードはそれから数時間黙ったままだった。

　教室。
　久しぶりに全員が集まっている。いつもは保健室と教室を行き来しているリリーもそのときは教室で、薬箱のチェックをしていた。
「それで監督。四時限目をいつもより十分も早く始めるって、いったい何事だ？」
　監督は黒板前に能力で映像を映し出す。
　そこに映っていたのはチームＺのメンバーの教室だった。
　一人の女の声しか響いていない教室。全員が黒板を見ていた。何よりも不気味なのは全員がさまざまな種類の仮面や被る、またはフー

ドを目深に被るなどして表情が見えないということだ。
「これはチームＺの授業風景だ。私が極秘で撮影した。」
「これってバレたらヤバイんじゃ・・・」
「それほどのことが今から始まろうとしているんだ・・・。
　今、チームＺのメンバーはＬＯＳＴ討伐部隊、派遣戦闘員などあらゆる場所で戦っている。特に今見てもらったのはチームＺの中でも戦うことしか考えていない集団だ。あのなかで聞こえた声、あれはリーダーのコードネーム、アリスだ。本名はわからない。
　ここ最近、今の教室にいた戦闘員が怪しい動きをしている。以前に発生した戦場Ｚでのアンドロイドの襲撃もこれだと思われる。
「監督ー。」
　キラが挙手する。
「どうした？」
「なぜ、ヤツらは俺たちを襲撃したんだ？ヤツらに関わるようなことはしてないと思うのだが？」
「おそらく、チームＺがあることを成功するために私たちが邪魔なのではと考えた。チームＡはリーダー、東条　アキネを失ったことで今、あのチームを動かせる人材は０に近い」
「チームＡの監督がいるじゃんよ」
「・・・キラ、知らないのか」
　オルガはため息をつき、キラを見た。
「あそこの監督は東条　アキネが消えた次の日にアキネを探しにいって帰って来ていない。そう、新聞が取り上げていた。」
「学生新聞を見るヤツなんて真面目なヤツしかいねぇよ！新聞を読むのが一般常識だと思うなよ、真面目野郎」
「呆れたものだ」
「続けていいかな？・・・で、チームＺの今の作戦、目標であることも私は知っている」
　この学校の初代校長にして、この島を能力によって作り上げた創造主、クリエイターの復活だ。
「クリエイター・・・だと？」

勅使河原だけがその名前を聞いて反応した。
「どうした？勅使河原」
「・・・ザザエルも言っていた。クリエイターってな。確かあのときは、戦争に勝利するための鍵みたいなことも言ってたな」
「勅使河原、あとでそのことを教えてくれないか？」
「わかった」
「・・・話を戻すが、クリエイターの復活がチームＺの目標だ。クリエイターの復活はこの世界の終末そのもの。そこでチームＡと結んだ契約が鍵になる。我々、チームＯはチームＡと手を組み、クリエイターの復活を阻止する！」
話が飛び過ぎたせいで、クリエイターのことを知っている勅使河原以外は、話を理解できずにポカンと口を開けていた。
「質問いいか？」
オルガが挙手する。
「俺が勉強不足なのは先にあやまる。そのクリエイターってのは復活させてはいけないものなのか？」
「オルガー、チームＺだせ？どうせ、悪者に決まってる。オルガさんはチームＺのこと、悪者と思ってねぇのか？」
キラはオルガの質問を聞いて煽り始めた。
「オルガ、キラの意見に根拠は見えないが、ザザエルはクリエイターを能力者戦争の鍵、破滅を作り出す者とまで言っていた。あの生きるか死ぬかの状況で嘘を言うとは思わない」
「・・・わかった。ようするに根拠のある悪ってことだな」
オルガはやっと理解し、納得したようだ。
「・・・どうした？ルナ？」
「あの映像の声、聞いたことがある。あれって・・・」
ルナの額から顎にかけて嫌な汗が一粒流れた。
「有栖川　剣城さん・・・？」
作戦会議は終わって、リア監督はすぐにデータを消した。普段は会議の書類やデータはファイルして、チームＯの全員が見れるようにしているのだが、今回だけは他に流出してはいけないのですぐに消した

らしい。
「ルナ、有栖川　剣城って誰なんだ？」
「ここに来る前に廃れた博物館あったでしょ？そこで出会った女性なんだけど・・・。でもまさかあの人がここにいるなんてね」
「有栖川・・・アリスの本名は有栖川だったのか」
「でも、この前の殿堂杯にいたアリスって人と声が違うんだよね。あのとき聞いたのはもっと優しい声だったような」
「声か・・・」
　そんな話をしていると寮前まで来ていた。もちろん、男子と女子で寮の入り口は違う。
「それじゃあ、また明日！」
「じゃあな」
　私は寮に入ってすぐにある人に止められた。
「待って。赤井さん」
「あなたは・・・」
　そこに立っていたのは、数週間前に教室に来て柊と戦ったロカさんだった。
　ロカさんも終わったばかりなのか、いつものチームＡの優等生が着る制服を着て、鞄を提げていた。
「ちょっと話がしたいのだけど・・・いいかな？」
「どうしました？・・・やっぱりアキネさんのことですか？」
「うんうん、違うよ・・・」
　チームＺのアリスさんの話なんだけど。
　私はそれを聞いてすぐに剣を抜いた。
「警戒しないでください。そんな棒切れでは勝てませんから」
　私は剣を振り、ロカを攻撃した。だが、剣は空を切った。まるでロカの前で空間が歪んだような・・・
「これって！」
「カウンターモード。」
　私はロカの周りに浮いた三日月の形をした何かに当たって吹き飛ばされる。それは強くはないが、私を玄関から突き出す程度の力は

あった。
「ごめんね、赤井さん。私はチームＡのメンバーとしてあなたを殺したくないんだけど、アリスさんが命令を出す以上、やるしかないんだよね」
　私はあることが気になった。なぜ、この事態に誰一人として駆け付けないのか、周囲に人の気配が全くないのか。
「あなたと柊君以外、今日はほとんどの能力者が戦略会議や補習授業に参加している。もちろん、あなた達の先輩もね」
　ロカは不気味な笑みを浮かべながらこちらへと一歩ずつ歩いてくる。
「さぁ、始めましょう？どちらが死ぬか、戦闘をね？」

ルナとロカ

「きゃあぁぁぁッ！」
私は階段横の草花の生い茂った坂を転げ落ちる。
私はロカのカウンターに逃げることしかできなかった。
攻撃はあの三日月の盾によって跳ね返される。海都はあれによって負けた。海都が負けたんだ、私には無理だ。
（希望を捨てるな、ルナ。お前ならいける）
「でも・・・ッ！」
今さっき、転んだときにできた傷から血が流れる。良く見たら履いているタイツのところどころが割け、穴が開いていて、そこから血が出ているようだ。
（大丈夫か？）
「平気、平気。私が寝ている間、みんな傷だらけのなか殿堂杯で戦っていたんだ。これくらい何ともないよ」
こんなこと言ったけど、クロードには聞こえてるんだよね。心のなかで誰かの助けを呼んでいることを。
携帯は鞄のなかで、鞄は玄関の靴箱の前で・・・。
「まだ生きてるんだ。死んでいいんだよ、楽になった方がいいよ」
「死なないよ。死ぬのはあなただ！」
ロカの三日月の盾は大きさを変えられ、私の前で大きく膨らむと私を突き飛ばす。ここに私の攻撃が加わることで威力を増して、剣で切られたような痛みが私を襲う。
なら、
「あなたを剣で攻撃するのは止めた。クロードから教わった吸血鬼の魔法であなたに勝つ」
私は剣を鞘に納めると、膝から流れる血を指で掬った。
（ルナ！まだそれは未完成だ！剣で戦え！）
「クロード、たまには私を信じて」
（・・・わかった。お前を信じる）
私はその血で手の甲に円を書き、そのなかに五つの鋭角がに接する

ような星を書いた。
「あなたのそのカウンターは、私が攻撃することで発動する。だけど、発動する条件はあくまでも剣で切る、拳で殴るといった打撃だけだ。現に、その能力を持っているあなたは海都の炎の攻撃を違うデュフェンスモードで防いでいた」
「あのときは彼の力を見たかったからデュフェンスモードで対抗しただけ。別にカウンターでも防いで攻撃することは可能だよ」
「じゃあ、これはどう？」
　私は石畳に付着した血がロカの足元まで広がっていることに気づくと、それを導火線のようにして、魔法を発動する。
「血の魔術（ブラッディ・マジック）、爆発（エクスプロージョン）！」
　手の甲にできた魔法陣は赤く光り、ロカの足元は爆発した。
「即座にデュフェンスモードにしといてよかった・・・」
　だが、ロカはデュフェンスモードによって、その攻撃を逃がす。でも私の考えは当たっていた。
　石畳の血痕は爆発で消える。
（血の魔術で使った血は消滅する。次の手は考えてあるのか？）
　手の甲の魔法陣は残っている。それに相手が動かないタイプだからまだ作戦を練る時間はある。
「次はどうするの？・・・何もないならこっちから行くよ」
　ロカはどこから取り出したのか、短刀を手に持つとこちらへと走ってくる。
　あの早さから、三日月の盾はカウンターモード状態。
　私は膝の血を手で払い、辺りに散らす。
「血の魔術、針鼠（ヘッジホッグ）！」
　その名の通り散らばった血痕からトゲが飛びだし、ロカの攻撃を防ぐ。赤いトゲはカウンターで破壊されるとロカの制服に赤い染みを付けた。
　あと二回は使える。
「血の魔術で扱われる魔法陣は繊細だ。線が薄くて細いものは1、2回、濃く太いものは最高でも5回使うことができる。だが、濃すぎて

も魔法が発動するかは丸と中の形の正確さで決まる。全てが繊細で、なおかつ大胆でなければならない。これが血の魔術の性質だ。形はお前の書きやすいものでいい。だが、できるだけ角が多いものがいいな。三角よりも四角の方が力は発揮しやすい」
「じゃあ、星とかどう？」
「・・・お前は、もしものときにそれを正確に書けるのか？」
「星ならいける。私が緊張したとき、手のひらに書いていたのが星だから。ほら、緊張したときに手のひらに人って書くと緊張がほぐれる的な・・・」
「あくまでもお前の書きやすい形だ。好きにしろ。」
　ロカは短刀に付いた血を三日月の刃に擦り付ける。刃に付いた血はなぜかわからないが消える。
「血を使う魔法、戦っている限り血は流れる。私のかあなたのかはわからないけど・・・ね！」
　ロカの短刀での攻撃は止まず、既に届く範囲まで潜り込まれていた。
（剣に持ちかえろ！まだ間に合う！）
「ッ！」
　ついに攻撃は届き、胸の上を切っ先が通る。
　切り傷から血が吹き出す。
「ほら、流れた」
（ルナッ！）
「血の魔術、痛み分け（シェア・ザ・ペイン）」
　血の魔術の本で見たカウンター魔法。
　禁じ手の一つに近いが、今受けた傷を相手にも付けるというもの。
　だけど・・・。
「わかってた。あなたのその皮膚の下は機械だってこと」
　ロカの皮膚の先に見えていた色は赤ではなく銀だった。
　そして今の魔法で魔法陣は消えてしまった。
「もう一回使えるって予想は外れたけど、当たった」
　私は意識が朦朧になり、その場に倒れる。

「あとは頼みます。・・・キラさん」
ルナの数メートル上を通る太い枝の上から、悪魔の黒く重い拳がロカのカウンターをすり抜けて頭を襲う。
「っぁらッ！」
ロカの首はその威力に耐えきれず、首から外れて地面に叩きつけられる。
「ルナ、よくわかってたじゃねぇか。俺が会議に出てなかったってことが」
「キラさん・・・面倒事は嫌いだから・・・」
「とりあえず、すぐにリリーを呼ぶ。だから、その血の魔法で少しでも治してな」
「そう・・・します・・・」
キラさんはロカの頭を踏みつけ、ストレスを発散すると学校へリリーを探しに向かった。
私はその傷を治す魔法と出血を止める魔法を知らなかった。
しだいに意識が薄れ、起きたときにはベッドの上に横になっていた。
★
「壊れて回収できず・・・か。」
「まぁ、その程度だったってこと。所詮は機械だ、アキネを殺せただけで十分」
アリスはパソコンの電源をつけ、研究室の奥にあるデータベースに、ロカが壊れる前に送ってきたルナの戦闘データを保存する。
「ルナ・・・メビウスプログラム実験台の一人。メビウスプログラムの可能性」
「まぁ、私にはもう必要ないけど。ついに完成するんだ、第二のメビウスプログラム、創造主様がね。創造主様の体と私の魂を使うことで、創造主様は復活する！これが第二のメビウスプログラム、心臓と体ではなく、魂と体の共鳴だ！これが成功すれば、アリサ！世界は私たちのものになる！」
「有栖川・・・今日はあなたの担当ね。チームＡとＯのメンバーに悟ら

れないように任務を進行して」
「わかってるよ、創造主様のためにね」
有栖川は机の上のアリスの生徒手帳を取ると、部屋から出ていった。
「・・・次は、彼かな」
★
次の日の新聞の一面でチームＡの隊長補佐、ロカ・セルナードが死んだことが大きく取り上げられていた。死因は校外での戦闘による戦死。対戦相手や戦闘開始と終了時刻、その他色々なことが書かれていなかった。それもそのはず、監視カメラの情報は、リア監督によって削除され、戦闘が行われた日は夜遅くまで会議や補習授業が行われていたからだ。
そしてチームＯだけが、ロカの死を詳しく知っているという結果になった。
昼食を終えた帰り、俺はシュウに会った。二週間で仲間を二人失ったシュウの顔はどこか暗かった。はなから、あまり口を開けないが、その日は声をかけても、無視してその場を離れるだけだった。
そしてロカという駒を失っても、チームＺの計画の進行は止まることを知らなかった。

シュウ、立つ

俺は何を信じて生きればいい・・・
チームＡ隊長、東条　アキネ。隊長事務室にて行方不明。
チームＡ監督、グリフォン。行方不明。
チームＡ隊長補佐、ロカ・セルナード。校外戦闘による戦死。
周りの重要人物が消えていくなか、俺は一人残されてしまった。俺は何かに助けられて生きてたんだなとあらためて感じた。
超能力なんて持っていても、守るべきものを守れなかったら意味のない力だ。・・・姉さんが言っていたな。
「おい、シュウー」
前から柊が俺の名前を呼びながらこっちへ来る。
「・・・シュウ？」
今の俺にこいつと和気あいあいと話せるような力はなかった。
悪いことをしたな、と後悔をしながら俺はその場を離れた。
（お前はそんなに弱いやつなんだな）
柊の憑き狐の声が聞こえるが、今の俺には言い返す気力も残っていなかった。
俺は外に出て噴水の見えるベンチに座るとため息をつく。こんなにも寂しいのか、孤独というのは・・・
「東条　シュウさん・・・ですね？」
前から、手に俺の刀くらいの大きさの刀を持ち、奇妙な仮面を付けた男一人が話しかけてきた。その後ろにもそれをコピーしたような同じ姿の男が二人。
「そうだ。」
「我々はチームＺ、創造主の使徒です。あなたをチームＺへと招待しに来ました。今のチームＡでは負の道を進むに過ぎません。ぜひ、チームＺに入っていただきたい」
チームへの招待。校則上、ないわけでもない。むしろその手があったな・・・。しかし、
「俺はな、いくら雑魚になってもチームＡのエリートの称号だけは手

放したくないんだ。姉さんが死んだと確定するまではな！」
「三人相手に刀を握りますか。チームZの戦闘班をなめないでください」
「三人か・・・ちょうど俺も三つ能力があるから同等だな」
刀への能力エネルギー強化付与と瞬間移動のための足への能力エネルギー移動はできた。そして目に能力エネルギーを移動させている最中に突如、大きな槍でも刺されたような痛みが俺に襲いかかった。
急に首から胸の中心にかけて痛みが走り、目から涙が溢れだす。
（ッ！・・・こんなときに）
俺は目の下を手の甲で拭う。手の甲に太めの赤い線が一本通っていた。
「どうやら、三つの能力を同時に使うことは不可能みたいだな・・・さらばだ、東条　シュウ！」
能力三つ使えずとも、お前みたいなモブキャラなら、何人でも余裕だ。
俺の刀はヤツの腹を通る。
「ッ！一人殺られた！」
「次はお前だ。」
姉さん、ごめん。反省してなかったみたいだ・・・。
「やーい、やーい！シュウのバーカ！」
俺が能力に目覚める前、人よりも体が弱く、運動も勉強もできない、いじめられる対象のような子供だった。
「またウチの弟を！」
「げッ！シュウの姉ちゃんだ！逃げろー！」
「お、お姉ちゃん！」
「シュウ！大丈夫？怪我はない？」
「大丈夫・・・だよ」
姉さんはあの頃から心配性で、俺がいじめられているとすぐに駆けつけて、俺を助けてくれた。俺の体を見て回ってケガがあったら、すぐにポケットから消毒液、ハンカチ、絆創膏を出して応急措置をして

くれた。
「俺・・・いつかはお姉ちゃんを守れるような男になりたいな・・・」
「あはは、シュウにできるかな？もっと強くならないとね、まずは私に腕相撲で勝てないと」
「勝てるよ！・・・今は無理だけど・・・」
そして姉さんに着いていくように、この学校の中等部に入って能力の勉強をした。この体に生まれた三つの能力はその証。
「君、すごいね。普通、能力ってのは一人１つなんだが。君は三つも使えるのか」
そしてチームＡの監督に声をかけられ、やっと姉さんを守ることができると思った。しかし・・・
姉さんを守れなかった。
「もう・・・いない、のか・・・。」
俺は四肢バラけた三人の死体の真ん中で、刀の頭に両手を添えて杖のようにしていた。
「シュウ！」
そこに柊がやってきた。俺が彼の呼び掛けに無視したことが気になって、俺を探しまわっていたのだろう。すでに肩に落ちた雨が肘まで浸透していた。
「柊、俺にチャンスをくれないか？」
「ほら、入ってきて。・・・まぁ、みんな知ってると思うけど」
俺は壇上に立つ。以前見た顔ぶれが唖然としてこちらを見る。
「チームＡ兼チームＯの作戦に参加することになった、東条　シュウだ。よろしく頼む」
★
学校まであと少し・・・まさか向かう途中でＬＯＳＴが暴れているとは思わなかった。
さすがエース。ＬＯＳＴを簡単に倒すなんて・・・。
「おい、東条」
「なんですか？」
「お前、俺が消えたチームＡはどうなってる？」

「それが・・・」
　私は頭角を現したロカがチームＺのメンバーだったことを話した。エースはロカの名前を聞いて、何か思い当たる伏があるのか、目を閉じて自分の唇を触っていた。
「・・・確かに腕は良かった。１、２年って感じではなかったな。確かにお前やお前の弟みたいな天才もいる。だが、アイツはどこか違う何かを持っていた。まるで死を実感して、そこから何かを得たような・・・」
「それでロカは人間ではなく、アンドロイドでして」
「ん？それは知っていたぞ。」
「え？」
「前にアイツと戦ったんだ。まだ九尾に完全に侵食されていない頃な。そのときに、アイツから機械のような音が聞こえてな。ほら、動物って野生で生きていく中で聴覚とか進化していくだろ？それでわかってた、でもチームＺのメンバーだったとはな」
「で、今はそのチームＺが悪事を・・・」
「じゃあ、目標はそれだな」
「目標って？」
「チームＺを倒す・・・ってところだな。チームＯもいるんだろ？あそこには俺の弟がいる、なんとかなるさ・・ほら、見ろ！明かりだ、もう近いだろうな」
「急ぎましょう」
★
「準備はできたか？」
　監督が全員に聞く。
　全員は通信機を二つ腰に装着し、フードのある服を着て、各々が普段装備する武器を持っていた。俺やキラは武器を持たないが、普段何も持たないクロサクは雷帝のものと思われる短刀を持っていた。
「何かあればすぐに私とリリーのところに通信を入れてから来てくれ、すぐに治療はする。・・・では、行くぞ」
　夜、廊下をできるだけ音をたてずに歩く。チームＺは俺たちとは別

に教室以外に専用の教育、訓練施設を持つ。理由はチームＺだけが、能力者兵器として政府から援助を受けているからだろう。
「・・・緊張しますね」
「ルナはあまり実戦に参加してないからな。まぁ、いつも通りで良いと思うよ。十分な戦力だし」
「・・・大丈夫ですかね。」
「？・・・全員、一度止まれ」
　先頭を歩く監督が手を挙げ、「止まれ」と指示を送る。
「・・・どうやら、相手もそこまでアホじゃないみたあだ、見ろ。警備兵だ。」
　施設前に設置されたアンドロイド型の警備兵。こちらにまだ気づいていないようだ。
「二体か・・・誰かあれを静かに壊すことはできないか？」
　アンドロイドまでおよそ１００メートル、この場から壊すことはクロサクの雷や、シュウの眼で余裕だが。
「陽動作戦なんてどう？誰かが出ていって、二体の眼を欺いてさ」
「四津野その役やるか？」
「じゃあ誰か二人、暗闇に潜り込んでヤツらを倒してね」
（本当にそれでいいのかな・・・）
　タマやその他何人かが心配するこの作戦。
　四津野が茂みからアンドロイドに歩み寄る。
「やぁやぁ、どーも。あ、私、知ってます？ちょっとあなたのところのリーダーさんに用がありましてね」
「見かけない顔だな、名前はなんだ？」
「いやー、私。チームＯの四津野　千理といいましてね」
「アイツ！名前を言ったらあの服装の意味ないじゃんか」
「チームＯだと！排除し・・・ろ・・・ォ」
　アンドロイドが武器を構えたときにはもう遅く、アンドロイド二体の頭は、キラとシュウによって壊されていた。
「ナイス、四津野。」
「キラＯｋ！シュウもやるじゃん」

「暗殺訓練はチームＡ内でもやっていたので」
キラは悪魔の契約による鎧を外し、四津野とハイタッチをする。速さなら二人が適任だというオルガの軍配がこの結果をもたらした。
「よし、行くぞ！作戦開始！」

潜入開始

何事もなく、施設内を進むチームＯ＋α。
先頭で四津野、キラ、シュウが道を開け、俺やルナ、クロサク、玲華が、指揮役のオルガ、治療役のリリーを守り、監督のデータ解析で遠距離から扉のロックを解除していた。
チームＺの警備兵はほとんどアンドロイドで、人間は少なく、今のところ血は一滴も流れていなかった。
「案外、楽勝なんじゃないの？」
「油断するな。チームＺの本領は地下だ。地下５階に及ぶ秘密施設。アリスや創造主ってやつはきっと地下５階にいる」
（それにしても変だ・・・。）
「どうした？」
タマは何か嫌な予感を感じていた。
（まるで人の気配がない。）
夜だし、みんな寝てるんじゃないのか？
（いや、さっきから妖気を辺りに張り巡らしているが、この階と上の階に誰も人の気配がないんだ）
「そんなレーダーみたいなことができるのか？」
「柊、どうした？・・・もしかして狐が何か察したか？」
「はい、言っていいよな？」
（もちろん）
「タマによると、地上の階全てに人が一人もいないみたいです」
「何？」
「やはりか。さっきから監視カメラを見ているのだが、おかしいことに地上階の監視カメラ全てに私たち以外の人の姿がないんだ」
監督はすでにほとんどの監視カメラをハッキングしていた。
「そして地上と地下で、まるで別の建物のように回線が分断されている。普通なら全ての回線が建物１つに固まっているはず。おかしい・・・」
「・・・まぁ、進んでみればわかるでしょ。・・・監督、エレベーター

とか階段って？」
「それが・・・」
「この建物に地下へとつながるエレベーターも階段も見つからないんだ。」
　私のデータ解析はすでにこの建物のカメラ全てをジャックし、全ての映像がこの画面で見れるようになっている。だけど以前に私が盗んだデータと全く違うんだ。建物の部屋の区分や壁、床。火事になった後建てられた建物のデータと一部以外全く別のものになっているんだ。
「・・・ということは、ここにチームＺの地下研究所がないという可能性も」
「なきにしもあらず・・・かな。」
　いきなり足踏み状態になった俺たちは一階の壊れたアンドロイドの残骸だらけのなか、立ち往生してしまう。
「よし、ここに立っていてもなんだ。手分けして探すのはどうだ？タマも監督も地上階に人はいないと言っているんだ。危険な場所はないだろう。」
　キラの提案に監督は賛成し、
「わかった、それでは班を分けて行動しよう。私とリリーはここでみんなの通信機にデータを送る。残りは地下へと続く道を探して」
　三つの班に分かれることにした。
「手分けして探すと言ったが・・・なんでお前と同じ班なんだよ」
「監督の采配だ。俺は知らん」
　監督によって決められたチーム。キラは納得できず、原因であるオルガに怒りをぶつけていた。
「まぁまぁ、喧嘩はやめましょうよ。」
　それを止めようとするクロサク。内心、クロサクも納得していなかった。
「他が心配だな。柊とルナ・・・とかな」
「大丈夫だろ、お前よりは戦力あるはずだぜ。」
「お前もその力には制限がある。使えなくなったらただのサボり魔に

なるな」
「んだと、お前の天銀(それ)も無くなったら終了じゃねぇかよ！」
「天銀は消耗品ではない。それに今日のためにこれだけ用意してきた」
　オルガは来ていたコートを広げる。そこには十個の小瓶があった。
「瓶１つに１００ｍｌ、この剣がおよそ１００ｍｌだ。」
「結局使い捨てじゃねぇかよ」
「使い捨てではない。・・・あれはなんだ？」
　廊下の奥からこちらへと歩いてくる人を三人は見た。
　黒いローブにペストマスク。手には大鎌を持ち、不気味さの塊のようだった。
「あれは・・・チームＺのリーダーさんか？」
「カラス・・・。要するに敵だ。」
　チームＺのリーダー、カラスは一瞬でキラの前に現れ、その鎌でキラの腕を切る。
　瞬間的に悪魔の契約の効果で守ったキラは勢いに負け、廊下の壁に叩きつけられる。
「ッ！」
　オルガはそれを見て、剣をカラスの首目掛けて振るうが、カラスは鎌のグリップ部分で剣を防ぎ、鎌の切る方とは逆の先端でオルガの腹を押す。
「クロサク、今だ！」
　キラとオルガに気を取られたカラスは、クロサクが電気を溜めていることに気づかなかった。
「食らえ！」
　溜められた電気は銃弾のように一直線にカラスへと飛んでいく。カラスはすぐに避けようとするが、廊下の幅目一杯の大きさの電気の銃弾を浴びて、その場に倒れる。
「いくら強くても能力者でない以上、能力値のエネルギーの塊を体に食らえば耐えられずに死ぬ。」
　だが、クロサクの予想は外れ、カラスは立ち上がった。

「嘘だろ？・・・溜めが足りなかったのか？」
「クロサクッ！油断するな！」
カラスの大鎌の刃はその一瞬で、クロサクの右腕を切り落とした。
クロサクの声は廊下に響き渡った。

「きゃぁッ！」
「ルナ！・・・ッ！こいつら強い！」
白いローブに身を包み、短剣を振るう小柄な女と、黒いローブに身を包み、ロカのような手袋を付けた２ｍ近い身長の男が俺、ルナ、シュウの行く手を阻んだ。
シュウは男一人を相手にし、俺とルナは女を相手にしていた。
二人係りで攻めても、女の服に傷一つ付けることができない。両手に持った短剣が、ルナの剣を守り、俺の放つ炎を跳ね返す。
（あの短剣、もしかしたらロカの手袋に付いていたものと同じものが付いているのかもしれない。）
確かに短剣の刃に赤色に光る宝石のような装飾が施されているのが見てわかる。
「ッ！こいつのガードを抜けることができない！」
シュウは男を四方八方から攻撃するが、太い腕の周りを囲うリングや、胴体を包むように囲う三日月のヴェールがシュウの刃を通さない作りになっていた。
「オモチャ・・・」
「人を玩具呼ばわりか。」
俺たちは目配せをすると、奴らの攻撃を避けて逃げることにした。
とにかく、監督達のいるロビーに行ってはならない。それを第一に考え、俺は狐火を廊下にばら蒔きながら走っていた。
女はその身軽な体で炎を避け、男は炎などの障害物を壊しながらこちらへ向かってきていた。
途中で俺たちは階段を上り、二階へと行く。もちろん、俺たちの排除を目的とする奴らも階段で二階へとやって来る。
「シュウ、ここからどうするよ」

「広い場所で奴らを迎え撃つ。データが正しければこの先に広い食堂があるはずだ」
「はぁ、はぁ、ま、待って、キツイ・・・」
シュウは能力でスピードを上げ、俺はタマの力で体力、筋力を強化させているが、ルナは俺たちの走りについていくのは精一杯だった。
クロードから教えてもらった血の魔術とかなんかで、ちょっとはマシになったらしいが。
「あともう少しだ。・・・見えたぞ！入れ！」
シュウは入り口のドアを破壊すると、食堂のテーブルを壁のようにして隠れる。
「ルナ、大丈夫か？」
「だ、大丈夫・・・でも、もう走れない・・・かな」
ルナは息が上がり、すでに足が震えていた。
「つまり、ここで奴等を倒せということか・・・。柊、今度はお前があのデカブツの相手をしろ。俺がすぐにあの女を倒す」
「わかった。」
シュウはやつらが食堂に足を踏み入れるのを息を殺して待つ。俺も手に能力値を溜める。
「出てこい！テメェらはもう籠の中の鳥なんだよ！」
「・・・（もう少し、もう少し入ってこい）」
シュウは俺とルナに聞こえるくらいの小さな声で願う。そして、
「オモチャ、ドコ？」
「バカ！押すんじゃないよ！」
チャンスが生まれた。
俺は大男を、シュウは女を狙う。
女は大男に押され体勢を崩したことで、出遅れてしまう。
シュウの刀は女の片足を捕らえた。
「ッ！」
女はその場から転がるように倒れ、立ち上がれなくなる。大男は状況に付いていけず、パニックになってしまう。
「狐術、螺旋炎」

手に持った狐火の火炎弾を相手に連発する新たな狐術を生み出し、男に炎を浴びせるが、既にヴェールを張られ防御される。
「これを食らいな！」
女は持っていた短剣を俺に向けて投げる。
短剣はシュウによって弾かれたが、二本目を防御できずに、軌道に出たシュウの腹に刺さる。
「ガッ！」
「どうよ！エリートさんよぉ！」
「・・・だが、武器は失った」
無能力者から武器を取れば、疲れはてた能力者でも簡単に倒せる。
平手打ちのように振られたルナの剣に、女を気絶させる程度の力は十分にあった。
「あとはそのデカブツだ・・・な？」
男はまるで電池を失ったオモチャのように、手を振り上げたまま止まっていた。
「・・・なるほどな。ようするにこいつはこの女の操り人形だったということだ。この男はどうでもいい、女は連れていくぞ」
「別に連れていかなくても・・・」
「死んでいないなら、それを捕虜、人質として使うべきだ。使い道はいくらでもある。それが嫌であれば、自分で死を選ぶだろうな。」

チームZの掟

「私を殺せ！」
　俺とルナとシュウを一度、監督のいるロビーへと帰った。この女を監督に渡すためだ。女の手と足には手錠が付けられていた。
　監督のデータ解析はその人の秘密や、思考を暴くためにも使うことができる。現に遅刻したときに使われた。
「殺さない。死んだら情報は得られないからね。今、あなたはリリーの治療を受け、死にたくても死ねない状態にある。舌を噛みきってもまた新しい舌が生えてくるから安心して」
「ッ！」
「えっと、あなた・・・フフ」
「何見てんだよ・・・」
「ごめんなさい、あなたの秘密見ちゃった」
「今関係ないだろ、それ！」
　女は顔を赤らめ、監督に吠える。
「ごめんごめん。でも、あなたみたいな可愛い子もいるのね。いつも殺伐としてるから」
「私たちが被ってるこのマスクは人に顔を見られないようにという理由もあるけど、それぞれ色んな理由があるんだ。見られたくないから、他人に表情で感情を悟られたくないから、行動を読まれたくないから・・・私は自分を隠すためにしていたんだ。本当はこんな殺伐とした殺すことしか考えてないチームにいたくはないんだよ」
「私、確かにあなたを可愛いと言ったけど、あなたに慈悲は無いわ。チームZメンバー全員にね」
　データ解析を終了した監督は言葉を女に吐き捨てて、女から離れ、俺たちにデータを渡した。
「三人とも、このデータを元に頼むよ。私はもう少しだけ、彼女から情報を炙り出そうと思う」
　そして女の近く戻るとまたデータ解析を始めた。
「なかなか酷いことを言うものだな、お前のところの監督も」

「ブラックジョークじゃないかな?・・・・そうであって欲しいな」
「そうかもなあ”ッ」
「大丈夫か?」
「平気だ。このくらい」
　腹の傷が痛むのか、シュウは腹を押さえていた。
「とりあえずデータ見よ、地下へ行く方法があるかも」
　ルナは小型通信端末を取りだし、データを送信する。
　受信した端末の画面にはルナの言った通り、地下へと続く階段が写し出されていた。
　だが、そこの近くで二つの動くマークと一つの動かないマークがあった。それはオルガとキラとクロサクだった。
「クソ・・・がァッ!」
　苦戦するオルガとキラ、そして二人係で止まらないカラス。そして倒れたまま身動きをとらないクロサク。
　二人はクロサクを庇いながら戦っていた。
「クロサクに近づけさせるな。今、監督が三人をこちらへ向かわせるように指示した。すぐに応援ならくる」
「なら良いけどよォ!こいつの攻撃を防ぐのはもうキツイぜ」
「お前も弱音、吐くんだな」
「俺だって弱音の一つや二つ吐くさ」
「応援が来るのか・・・やっかいだな」
　二人はカラスの声を聞き、すぐに距離をとる。そしてキラは足元のクロサクを見て少しだけ前に出た。
「私はカラス。チームZのリーダーだ」
「そんなことは知っている。そしてお前らが悪行を働こうとしているのもな」
　カラスは鎌の刃を地面に付けて、マスクの奥でため息を吐く。
「悪行?人の敷地に土足で入り込み、警備員を殺す君たちこそ、悪じゃないか?」
「ッ!」
　キラはカラスの言葉に舌打ちをする。

「もちろん、私たちの警備兵は心のないロボットだが」
「黙って話を聞いてればよォ、まるで自分達のやってることが正しいことのようにいいやがって・・・」
「何を言っている?全て正しいことだ。創造主の復活は平和を意味する。もちろん、今回の作戦は私の指揮の範囲外だが」
カラスはもう一度、鎌を構えるとキラを攻撃する。
「私はあくまでも侵入者の排除が目的だ」
「クソッ!こんな細い体のどこにこんな力があるんだよ!」
キラは鎌を防ぐことができずに、左手の装甲を剥がされた。悪魔の契約によって装備された黒い鎧は左腕の部分だけが剥き出しになる。
「キラさんッ!」
やっと三人が到着する。
柊はクロサクを見ると、すぐにベルトを使って止血をする。すでに多量出血で危険な状態だが、リリーのところへ運んだときに最低限の処置はしていないと、リリーも能力での治療は厳しいだろう。
「クロサクはすぐに運びます。ルナも着いてきて」
「ちょっと待って、クロードが」
「クロード?おい、そこの女!」
カラスは鎌をルナに向ける。
「今、クロードと言ったか?クロードはどこにいる!」
ここだ、カラス。
カラスの声に、クロードは霊体となって前に現れた。
カラスはそれを見て、
「クロード!どうしてそんな体に!」
と言いながら、クロードの足元へと向かう。
「殺されたんだよ、それで今は幽霊さ。」
「・・・クロードを知ってるんですか?」
「クロードは私の友人だ。ここ数ヶ月姿を現さないからどうしたのかと心配していたんだ」
「良く言うな。お前のところのアリスってやつのせいで、この体になったんだ」

「アリスが?・・・話してくれ」
クロードはカラスに全てを話した。ルナの側にずっといたことからアリスの発明したメビウスプログラムまで。「アリス・・・。私の部下が酷いことをした。どうやら、悪は私達だったようだ。アリスからはこう聞かされていた。創造主が甦れば、この学園は平和になり、能力者、無能力者同士で争わなくて済む・・・と。」
「カラス・・・。」
「なら、部下を止めるのが、リーダーの役目じゃないか?なぁ、オルガ」
「そうだな・・・。キラにしては正しいこと言うじゃないか」
「俺にしてはとはどういうことだよォ・・・」
「そのままの意味だ」
カラスはペストマスクを外し、俺達に顔を見せた。
「これでいいだろう。私は君たちの味方だ」
「いいのか?」
「かまわない。私は平和のためにチームZのリーダーをやっていたからな」
『あなたがZを裏切るとは残念です、カラスさん。』
その声が聞こえたときには遅かった。カラスの胸に穴が開き、血が流れていた。
「クソ・・・」
『今、私は地下にいます。エレベーターで降りてきてください。エレベーターまでの道はカラスの血が教えてくれるでしょう・・・では地下で会いましょう』
放送はそこで終わり、カラスの血が廊下の奥、突き当たりの部屋の、扉の隙間を入っていった。
「あそこか・・・。準備はいいか?」
オルガの言葉にここにいた全員が返事をする。一人を除いて・・・
「・・・こいつはどうするんだ」
霊体として俺たちの前に出ていたクロードは、膝立ちで死ぬカラスを指差していた。
「クロード・・・」

ルナはカラスの血を持っていたハンカチに染み込ませ、袋のなかに入れた。
「彼の流した血は私たちの力になる。残念だけど、この戦いが終わったら墓を作ってあげよう」
「・・・わかった」
扉を開けると、自動で電気がついた。そこは会議室のような場所で、壁際にテーブルとイスが積み上げられていた。
そして普段議題を書くであろう黒板が真ん中で分かれ、エレベーターの扉が見えていた。
「こんなところにあったのか・・・。」
「いくぞ・・・」
エレベーターに乗った俺たちは一番下のボタンを押すと、エレベーターは静かに動き始めた。
「いよいよ・・・だな」
「クロサク大丈夫かな・・・」
クロサクとカラスは放送を聞いてやってきた監督によって運ばれた。
カラスは生き返らないが、クロサクはまだ息はあった。
(そういえば、海都も腕切られたときあったよね)
あったな、そんなこと。シュウとの初試合で殺されかけたんだよな。
(あのときは大変だった。何日も目が覚めない状態が続いたから、もう心配したよ)
心のなかでタマとそんなことを話しているうちにエレベーターの扉が開いた。
そこに待っていたのは大きな部屋と、その先に待つ巨大な獣のＬＯＳＴだった。

アリスの目的

「罠だッ！」
　すぐにそう気づいた俺たちはエレベーターから真っ先に飛び出た。獣型のＬＯＳＴはエレベーターに向かって突進し、エレベーターを破壊した。
　胴体や頭は犬や狼といったものに近く、尻尾の先にヘビのような頭がついていた。そして何よりも恐怖を感じたのは、目が３つあり、口から大きな八重歯が出ていたことだ。
「ッ！退路を絶たれた。」
「オルガ、これはマズイぞ」
　エレベーターから下り、左に避けたキラとオルガはすぐに周囲を確認する。
「ルナ！」
　逃げ遅れたルナがエレベーターの近くで足を抑えて倒れている。
　俺はすぐにルナのところへ向かい、ルナを抱えるとその場から逃げるように壁際を走った。
「大丈夫か？」
「ちょっと足ひねった・・・かな」
　俺を見たＬＯＳＴは俺に狙いを定めて飛び込んでくるが、間一髪避けたため、壁に激突する。
（この獣・・・海都、こいつの腹のなか不味いことになってる）
「どうした、タマ」
（腹のなかに、何人もの死体を抱えている・・・。どういう意味かわかる？）
「要するに、人間（俺たち）はエサってことだろ？」
（正解！）
「クイズやってる場合じゃねぇよ！」
　ＬＯＳＴは俺を追いかけ、少しでも間合いが狭まれば、爪と牙で俺に襲いかかろうとする。
「うらぁッ！」

俺たちを狙っていたため、他に反応できなかったのか、横からのシュウの攻撃をまともにくらう。
「ったく、ルナをこっちに！」
「わかりました！」
俺はルナをオルガのところに連れていくと、キラと共にＬＯＳＴに攻撃する。
「ｐ、α、ｐ、α・・・」
ＬＯＳＴは変な鳴き方をする。まるで何かを呼ぶような・・・
「柊、気をとられるな！今は目の前の敵に集中しろ！」
「・・・は、はい！」
ＬＯＳＴはオルガとシュウの斬撃と、キラと俺の炎によって動きが鈍くなる。そして討伐から数分後、途中から女のような悲鳴をあげ始めた。
だが、こちらも無傷とはいかない。
キラは右腕を負傷し、オルガは天銀のほとんどが使い物にならない状態になってしまう。
だが、
「これでどうだァーーーッ！」
キラは右腕の骨を折りながらも、ＬＯＳＴの首目掛けて鋭い攻撃を放つ。
「Ｐ、αααααααα！」
ＬＯＳＴの頭は悲鳴をあげながら胴体と離れて首に落ちた。そしてＬＯＳＴは灰になって消えた。
「はぁ・・・はぁ・・・やっとか。」
「ＬＯＳＴ、いくらこの大きさでも侮れないな・・・」
『見事だよ、チームＯ』
再び放送が入る。
「アリス・・・」
『この先の扉を進め。罠はない。だが、タイムリミットはある。それは、私があなたたちの監督に止めをさすまでだ』
「何!?」

『今、私は一階に来ている。もうすぐ地上で待つ四人のところへ行くだろう・・・では、』
放送が終わり、キラは左拳で地面を殴る。
「キラ、今は地面に怒りをぶつけている暇はない。急ぐぞ」
「・・・今はお前の命令に従ってやる。考えが一致したからな」
俺たちは重たい体で扉を開け、先へと進んだ。
★
「お前は・・・」
「チームOのみなさん、こんばんは。私はアリス。この事件の首謀者です」
監督や玲華の前に現れたアリスは手ぶらで、季節的にはまだ遠いフードつきのコート羽織っていた。もちろん、アリスの顔はフードを深く被っているためか、あまり良くは見えない。
「今、あなたたちの仲間は地下からの脱出を試みています。入ってきたエレベーターはＬＯＳＴによって破壊。扉の先は出口なんてない大迷宮。あとはあなたたちを倒すだけですね」
「アリス、見えないか?監督の前に私たちがいることを」
そう言い、監督の前に四津野と玲華の二人と、監督を庇うようにリリーが立つ。
「そう・・・私の能力の前では無力なのに」
アリスは手のひらを3人に見せるように、手を前に出す。
「何?・・・ぐぁ!」
次の瞬間、3人は地面に這いつくばるかのように倒れる。全員が立ち上がろうと必死に抵抗するが、まず腕や足が動こうとしない。
「チームＺは無能力者の集団じゃ・・・」
「確かにチームＺは無能力者が多い。だが、私はその中で数少ない能力者の一人。これを隠して四年間、長かったよ」
「だからデータにないわけだ・・・」
「そして、もう一つ。私は5年前に起きたＥ―ｖｉｌ事件の生き残りの一人、アリサ・ハズソード。・・・驚いたわ、殿堂杯のとき、チームＡのスパイ二人にバレるなんてね。まぁ、その二人は今ごろ寝室で

永遠に寝ているけど・・・フフ」
アリスはコートの中から短刀を取り出すと、それをリア監督に向けた。
「う、腕が・・・」
リア監督の肘や膝は曲がらない、腕や脚は動かない、棒立ちの状態。アリスの短刀は、抵抗できない体に少しずつ入っていく。
「あ、が・・・痛ッ！」
「ほら、悲鳴をあげて。聞きたいな・・・大の大人が痛みで叫ぶところを」
次の瞬間、アリスと監督の間に、衝撃波が生まれた。
アリスは短刀を離し、受け身をとる。
「来たか・・・アリス」
フロアの南口、非常口のピクトグラムが光る下に立っていたのは勅使河原だった。
「勅使河原・・・まさか、校長室から出てきたっていうの？」
「校長にトイレって言ったら出してもらえたよ。尿瓶を出されたときは焦ったがな」
今まで事務仕事の手伝いをしていたはずの勅使河原がそこにいた。
勅使河原は監督の方へと歩き、監督の脇腹に刺さるナイフを抜くと、ちょっとした回復魔法で治療する。
「それはリリーの能力・・・どうして。」
「能力を盗む能力。これ、なんだと思う？・・・勅使河原　八野地、21歳。名前から歳まで全部嘘。髪も染めて、口調も変えて正解だった。まさかこんな場所で決着をつけることになるとは思わなかった」
「月読（つきよみ）青（じょう）・・・」
「ご明察。お前の能力を知ってる人、案外近くにいたな」
「お前の能力は、手のひらを見た物の筋肉を好き勝手に操る能力だ！」
「だが、今お前が使える能力はリリーから奪った回復魔法。それでどうやって私と戦うんだ？その能力で奪える能力は一つのみ。前に奪った能力は上書きされてしまう」
「そう。だから俺はこの能力をある人から受け継いだ。波動という優

秀な能力をな」
　勅使河原は指を鳴らす。そこに生まれた波がアリスへと飛んでいく。アリスはそれを避けると、勅使河原に手のひらを見せる。
　勅使河原は目を閉じて見ないようにするが、アリスの投げた短刀を避けられずに当たってしまう。切り傷で済んだか、それでも腹から血が流れ始める。
　アリスは床に落ちたナイフを拾うと、目を閉じたままの勅使河原に攻撃を仕掛ける。
「ここだッ！」
「ッ！・・・きゃあっ」
　勅使河原は周囲の波でアリスが近づいたことを知り、アリスのみぞおち目掛けて掌底を浴びさせる。
「やるな、アリス。」
　勅使河原は痛覚を頼りに傷を探し、リリーから奪った力で傷を癒す。
「能力が無意味な状態の私じゃ、あなたを倒すことは厳しいみたいね。なら、これなんかどう？」
　アリスの出した考えはとても卑怯なものだった。
「ほら、あなた達の監督。そして私の盾になるもの。さぁ、あなたに攻撃できるかしら？雨のなか、青山の刺客によって傷ついたあなたを、まるで捨てられた猫を拾うかのように拾って六年間も育ててくれた、最愛の母を！」
　アリスは監督の首にナイフの切っ先を当て、人質のような扱いをする。
「いつまで私があなたの術中にハマっていると思う？」
『Ｄｅｌｅｔｅ』の文字が空中に浮かぶ。アリスが気づいたときにはもうすでに遅かった。リアは既に動けるようになっていた。リアはナイフをもつアリスの腕を掴む。
「残念だね、アリス。これであなたも終わり。データ化開始！」
「や、やめろ！・・・なんて言うと思ったか？私の役はもう終わった。既に！計画は最終段階まで進んでいる！」

さぁ、創造主様よ！この学校に！チームＺに！平和をもたらせ！

復活

その一瞬、何が起きたのかわからなかった。
迷路の壁が一気に崩れ、天井が開いたかと思うと、そこには赤い満月を背景に一人の男が浮いていた。そして地下にいたはずの俺たちは地面ごと地上へと押し上げられていた。
男は今さっきまで液体に浸かっていたのか、髪からは液体が滴り落ち、服はビショビショになっていた。
古代ローマ人のような服を身に纏い、白い髪に白い髭の男はこちらを見ると、地面に足を付けてこちらへと歩いてきた。
「あー、人間よ。我は創造主、この学校を作りし物だが、今まで何をしていたのか思い出せない。・・・何を怯えている？」
「創造主さマ！・・・彼ラはテキです！」
「敵か・・・。はぁー・・・ふんッ！」
創造主はその場で気合いを入れ、アリスの方へと跳び、リアを突き飛ばす。
「監督！」
「君が味方なのは知っている。暗闇のなか、君が我の前に立っていたのは鮮明に覚えている。」
「創造主様・・・ガ！」
創造主はアリスの首を掴み、片手で持ち上げた。
「そ、うぞ・・・う・・・しゅ？」
「だが、君では我に命令することはできない」
「し、・・・ぬ」
「ふんッ！」
まるでゴミでも投げるかのようにアリスを片手で投げ飛ばす。
アリスは壁に衝突すると、ガラス細工かのように弾けとんだ。
「彼女の記憶は見せてもらった・・・とても残念だ。平和的でなく、滑稽なものだ。この学校の生徒よ！もっと平和的な人間はいないのか！」
アリスの姿を見て、そこにいた全員は声を出すこともできない。

「・・・彼女の記憶の中にこんなものがあったな」
創造主は地面に複雑な魔法陣を作り出し、そこからチームZの戦闘メンバーの持つ銃と同じものを生み出す。
銃口は負傷するキラへと向けられ、銃弾はその方向へと放たれる。
「キラ!避けろ!」
「動・・・けな・・・い」
鎖に拘束され、足枷をかけられたように身動きの取れない体を無理矢理動かそうとするが、やはり動けない。これも創造主の能力なのか・・・?
「拘束解除!」
その言葉と共に、最初に動いたのはまさかの無能力者である四津野だった。
四津野は銃弾を落ちていたパイプで叩き落とす。
「四津野!」
「やっとできた!・・・私の初めての能力!」
「この土壇場で修得したか。四津野」
「みんなの拘束も解除するよ!」
四津野は妹の万理のように目を光らせて全員の拘束を解く。
創造主は四津野のその姿を静かに見ていたかと思いきや、いきなり笑い始めた。
「面白いやつもいたものだ。もっと我を楽しませろ!」
拘束の解除されたシュウとキラは、その一瞬で創造主との間合いをつめ、刀で腕を切り裂き、拳で頭蓋骨を破壊する。
「やった!」
「やるじゃないか、屑能力者諸君」
並の人間、能力者ではすでに死んでいるはずの重傷のはずが、創造主は何事もなかったかのように、二人を作り出した鎌の柄で弾き飛ばす。
「あ、が・・・ッ!」
創造主は倒れたキラの腕の骨を折るように踏む。
「この腕が!我の頭を破壊した腕だな!」

「やめろーッ！」
見るに堪えきれなくなったオルガは創造主を天銀で作り上げた剣で切りかかる、
「邪魔者は引っ込んでろ！」
振られた大鎌の切っ先はオルガの胸を通り、周りに血の雨を降らせる。
「オルガーーーッ！」
オルガは捨てられたゴミのように地面に叩きつけられると、動かなくなる。
「これ以上は見てられない！」
リアは地面に手を当て、創造主の周りにデータで作り上げた包囲網を張り、安全にキラ、シュウ、オルガを助け出す。創造主は一度怯んだが、すぐに体勢を整えるとスナイパーライフルで、リアの手に銃弾を撃ち込む。
「データが、散乱する・・・ッ！」
データの集合体によって作られた波から落ちたシュウは、意識を取り戻すとキラとオルガを肩に背負い、こちらへと走る。
「二人の回収はできた・・・。今は撤退するべきだ。この状況でヤツと戦えるのは０に近い！」
「・・・シュウ言うとおりだ。ここは一度撤退する！」
リアはシュウの意見を飲むと、上空に緊急事態発生の文字を浮かばせる。その字を読み取った学校敷地内を飛ぶセキュリティのドローンは、創造主の周りでハエのように飛び始める。
「目障りだ！」
創造主はドローンを破壊する。
そのときにはすでにチームＯ＋αの全員はその場から消えていた。
創造主のいる隣校舎二階、家庭科教室。
「よし、これでいいかな？」
「ありがとう、リリー」
オルガは意識不明。すぐに傷口を玲華が凍らせたため、出血は押さえられたが戦うことは不可能だろう。キラは右腕の骨の一部を破壊

され、リアは手のひらに銃弾が埋まった状態。どちらも戦うことは不可能。
　クロサクもあれから目を覚まさない。
　ルナも頭と膝、足首を負傷したみたいだ。
「戦えるのは、勅使河原、四津野、柊、東条、榊原・・・か。後半は勅使河原が指揮を行えば・・・」
「監督、俺はそれに反対だ。」
　勅使河原は立ち上がる。勅使河原は右手は拳を作っていた。
「あれと一年生のような若い能力者を戦わせるのは無謀だ。いくら数が多くても、あれを倒すことは無理だ。俺が前線で戦う」
「俺達をあまりなめないでください」
　シュウは勅使河原の胸ぐらを掴む。
「チームＯは上から下まで全員が強く、穴のないチームと他のチームから言われていた。現にチームＡはチームＯをそう言って警戒していた。あなたが思うほど、ここにいる能力者は弱くない」
「・・・わかった。なら柊と東条、二人がヤツを押さえろ。俺と四津野でトドメをさす。監督と榊原は引き続き、下で怪我人を守れ」
「了解！」
「よし、いい返事だ。」
「諸君、いつまで我を待たせるのかね？」
　校舎の壁を破壊して現れたそれは、すでに一能力者として目覚めていた。さっきまでの目とは変わり、殺意を見せる目と血管の浮き出た腕。そして創造主の手には肘くらいまでのトンファーが握られていた。
「創造主・・・。全員、作戦開・・・始？」
　創造主は監督の後ろに周り、おもいっきり腰辺りを蹴って壁に叩きつける。
「監督！・・・キサマ！」
　四津野は怒りに身を任せて剣を振るうが、創造主のトンファーを前に刃が立たず、
「弱々しいな・・・」

剣ごと、窓の外に押し出される。
「残るは・・・お前らだ。」
「・・・作戦はまだ終わってない。柊、東条、いくぞ！」
「はい！」「了解！」
四津野にトドメを刺しに行くのか、外へ飛び出た創造主を追い、俺達は外へ出た。
二階から飛び降りた俺は、真下にいる創造主の頭に蹴りを食らわす。
「お前の敵は四津野だけじゃねぇッ！狐術、炎蹴（えんしゅう）！」
空中で円を描くように足から放たれた炎が、創造主の背中に横一線の傷を作る。
創造主は二回目の俺の蹴りをトンファーで弾くと、黒い刃のサバイバルナイフを俺に投げる。
「狐術、幻惑盾！」
「チッ、やるな」
「シュウ、今だ！」
創造主が気づいたときには、シュウの刀が創造主の右肩から腕を切り落とそうとしていた。
創造主は間一髪でそれを防ぐが、勅使河原の攻撃が続いてやってくる。勅使河原が四津野から受け取った剣が創造主の右手のトンファーを弾いて耳を切り落とした。
「剣術は苦手だが、波動がサポートしてくれる。」
創造主は血の流れる耳を押さえ、ふらついた足で後ろに下がる。後ろは壁、逃げ場はない。
「もう少し落ち着いてからやれば良かったと後悔しているよ。何十年も寝ていた身だというのを忘れていたよ」
「降参したか」
「だが、それもこれで終わりだ」
勅使河原は息を吸い、手のひらを合わせる。周囲の空気が揺れるのがわかる。
「今から、法を作り出す。さらばだ、能力者共よ」

決着と目標

・・・

その場の光、音。何も感じられない。暗闇。

どうしてこんなところに立っているんだろう・・・。

確か創造主が、法を作り出すとか、何とか・・・。

・・・もういいや、疲れてるんだ。俺達。

（それでいいのか？）

タマの声が聞こえた。

（お前は目の前の創造主を倒すんじゃなかったのか？）

創造主・・・倒せるのか？

この学校の校則、能力者は能力を使えず、創造主の前に戦意喪失する。校則は絶対だよ、タマ。

（あ、そう。・・・ねぇ、反旗を翻すなんてどう？かっこよくない？）

そんなことできない。ルールは、法は、校則は絶対だよ。反抗しても変えられないんだ。

（じゃあさ、私の最後の願い、聞いてくれる？）

最後の願い？

（海都君、あなたと１００％、繋がりたい。同調して、融合して、合体して、一人の人として。このまま死ぬのならさ、私はあなたと一緒に、１つの体で死にたいな）

わかった。・・・最後の願い、俺の最後の願いは・・・。

暗闇のなか、チームＯのみんなと、シュウや、アキネが頭を過り、最後に、高校の夕日差し込む教室で告白したときのルナの笑顔が映った。

「生きてルナの元へ帰ることだ！」

暗闇は晴れ、目の前に創造主が立っていた。視界に倒れる東条と勅使河原を見る。

「何！ば、バカな、我の能力は発動したはずだ！」

「私は、九尾の一匹、タマ！能力者じゃないからあなたのルールは適用されない！」

「九・・・尾?なぜ神に値するものがここに!」
「狐術、炎舞!」
炎は波のように創造主を襲いかかる。創造主の作り出した壁は炎の前に氷のように溶ける。
「１００％、俺とタマは融合した。俺はタマで、私は海都。二人で一つ。」
「第２の法だ。俺への攻撃は全て、禁止、無効だ!」
「神に能力者が作った程度の法が、通用すると思ってんのか!」
創造主の顔を崩すような拳が突き刺さり、創造主は校舎の柱に張り付けになる。
「狐術、炎の十字架」
「我は創造主だ。全てを、全てを、創造する!」
俺は知っていた。創造主の知識量は完全に昔のものに、アリスの武器の知識を加えたものだ。今のことは一つも知らない。
もちろん、学校ごと俺達を消滅させるような核兵器なんて。
「もっと、この世界を勉強してから戦うべきだったな」
☆
目が覚めると、私は辺りを見回した。監督、シュウ、四津野さんが倒れ、校舎は瓦礫の山になっていた。
「目が覚めたか・・・」
右腕を骨折していたはずのキラさんがタオルケットを運んでいた。
「えっと・・・創造主は?」
「死んだよ、俺が見たときはもう腕だけになっていた。スライムみたいにドロドロに溶けてな」
「ドロドロ?・・・海都は!」
私は立ち上がると、瓦礫のなかを走って探した。
どこを見ても海都はいない。
「アイツは死んだよ。ヤツと相討ちでな」
「・・・え?」
「俺は・・・無能だ。暗闇のなかで必死にもがくことしかできなかった。死にたくないって。そんななか、アイツは創造主と戦って勝った。で

も、ヤツが最後に放った能力で」
「嘘、でしょ・・・嘘ですよね？」
「すまない・・・」
勅使河原さんは下を向いて黙り混んでしまった。
勅使河原さんの目から涙がこぼれ落ちた。
「俺は・・・チームO元隊長失格だ。・・・また仲間を守れなかった」
私は地面に膝をついて泣いた。
すでに夜は終わりを告げ、太陽が昇り始めていた。太陽の光の先にこちらを見て微笑む海都の姿が、私だけには見えた。
☆
（タマ・・・ここは）
「試験会場よ。神になれるか、なれないかを決める大事な場所」
大きな門をくぐり抜ける。目の前にはこれまでの景色からは想像できないような大きなビルが現れた。俺は何が起きているのか、わからなかった。
（一つ聞いていいか？）
「一つでいいの？」
（じゃあ三つ。一つ目は、どこだここ？）
「だから試験会場って」
（違う、俺が聞きたいのはここは地球のどこだって話だ）
大きなビルとそれを囲むように生える大木。後ろには歩いてきたと思われる道が見える。道は壁のように連なる山が曲がり角まで続いている。
「えっとね、中国の山の奥。本物の九尾になれるかなれないかの試験はここでやるの」
（場所はあまりよくはわかってないがわかった。じゃあ次に、なぜ俺の足は地に着いていない）
ここからでも確実に浮いているのがわかる。普段見えていないタマのつむじが見え、景色がタマの歩みと共に上下する。
「それは、今は海都が私に憑いているからかな。」
（憑いている・・・？）

「・・・最初から話すわ。」
創造主を倒したあのとき・・・
「我は死ぬ。だが、お前も道連れだ！」
「海都！早く跳んで！」
「跳ぶ!?」
「無駄だ、既に我が創造した毒はお前の肺に到達している！」
既に周囲には猛毒のガスが蔓延していた。
海都はそれのダメージから意識を失い、体を失いそうになった。そこで私と体を交換し、魂だけでも何とか救いだした。海都の体は既に溶け始めていたけど。
「そこで私があなたを助けるためと、目標達成のためにここに来たってわけ。どう？」
（そうだったのか・・・）
「・・・私に何か言うことあるでしょ？ほら、ほら」
（ありがとう。）
俺は頭を下げる。
「おいおい、人間（ペット）なんて連れてきてるぜ」
後ろから男の声が聞こえる。
振り返ると嘲笑う狐がいた。狐といってもタマのような人間の体に耳と尻尾を生やしたような姿だが。
「久しぶりだな、ヨーコ。」
「久しぶりね、豪酒（ごうしゅ）。」
（知り合いか？）
「えぇ。昔、私の試験の邪魔をしてきたアホ狐よ」
「だぁ～れがアホだってぇ？」
豪酒はタマの頭を叩く。全く動きが見えなかった。
（タマ！）
「タマ、タマだってよ！ギャーハハハッ、飼い猫かよ！」
豪酒は指を指し、下品な笑いをかます。
「主人の前では猫っぽくした方が可愛げあるぜぇ。ま、今度こそ受かるように頑張れや、その可愛いだけの弱っちぃ狐術でな。」

豪酒は笑いながら、先にビルへと入っていく。
（タマ・・・大丈夫か？）
「海都が命名したんだ。私はもう何も思わない、むしろ誇りに思ってるから。・・・いこう、試験会場に」
（お、おう！）
ビルの中は外見からは予想できないような寺院の造りになっていて、真ん中には俺の６倍はありそうな狐の像が座っていた。
（こうなっていたんだな・・・）
「タマ様、海都様、こちらです。お待ちしておりました。私、試験案内人の独楽といいます。」
俺たちが狐の像を見ていると、案内人の独楽と名乗る狐がやってきた。タマよりも狐らしく、顔が狐で、胴体が人間だった。
「いくよ。」
タマが入り口を通り、次は俺の番になり扉を通ろうとする。だが、俺は透明な壁にぶつかって入れない。
（な、なぜに・・・）
「海都様は霊体ですので、あちらからお入りください。」
独楽はそう言い、試験会場とは逆の扉へと向かい、重たい扉を開けた。
（わかった。・・・タマ、またあとでな）
「うん、気をつけて。」
（おう）
ん？気をつけて？
俺は疑問に思いながら部屋に入る。俺が入ると同時に扉は閉められ、入り口から部屋の向こうへと蝋燭が一気に点火する。
蝋燭の燃える道の先にはエースに憑いていた狐がこちらを見ていた。
「久しぶりだな、人間よ」
「エースの狐か？・・・どうしてここに」
「私とあの男は、あの空間の裂け目の中で分裂した。そして私はここで人間の魂を待っていた。」

「俺を?どうして」
「決まっておる。人間の魂を食らうためだ。私にとって人間の魂は大好物。さぁ、少しは抵抗したまえ」
狐は口を開け、こちらへと突っ込んでくる。蝋燭は辺りに散らばり、床の絨毯が燃え始める。
タマがいないと能力が使えない。・・・どうすればいいんだ。
「・・・いや、能力は使える」
あのとき、俺はタマと完全に融合した。もしかしたら、
「狐術ーッ!」
周囲で燃える炎は少しずつこちらへと集まってくる。
確実に能力エネルギーが生まれているのがわかる。
「狐術、狐火!」
周囲から集まった炎は球体になり、狐を捕らえる。
「この土壇場で狐術を発動しただと・・・」
「タマ、九尾の称号を与える。」
「ありがとうございます。」
大きな狐はタマに九尾の称号と言い、手のひらサイズの紫色の宝珠を渡す。
「日本の狐を祀っている神社で、人間の願いを叶えてやるのだ。・・・今年は一匹のみであった。来年は取れるように努力するのだ。」
大きな狐は煙になって消える。
タマは周囲の狐の目なんて気にせず、試験会場の出入口の扉をおもいっきり壊して、海都の入った部屋に入る。
「海都ー、やったよ!私、やっと九尾になれたよ!」
扉の先は焦げ臭く、床には灰が散らばっていた。
そこに海都の姿はなかった。
「海都・・・、そんな。」
タマは床に残った灰を集める。
「柊　海都。彼なら、下界に帰した。」
一匹の普通の大きさの狐がタマの肩に手を置く。
「あなたは・・・エースの」

「彼は一人の能力者として成長した。お前の力なんて必要ないくらいにな」
タマは涙を拭い、狐の顔を見る。
「てことは生きてるってことですよね？」
「そうだ。お前が日本にいれば彼と会う日が来るかもしれないな」
「よかった・・・」
集まった灰に涙が落ちる。
タマは立ち上がると、そのまま日本へと旅立った。

柊(主) 海都(人)に会いに・・・。

卒業

あれから四年かー・・・。
創造主との戦闘から四年。私は卒業試験を終えて、玲華さんと話しながら、教室に向かっていた。
「いやー、すごかったです、赤井先輩！まさか元チームＯ隊長のオルガさんに勝っちゃうなんて」
「いや、あなたのサポートがあったから勝てた。ありがとう。玲華さん」
「アタシはやることはやったまでですよ」
「次は、あなたが隊長になって私を越える番かな」
「赤井先輩・・・うぅ、この榊原　玲華、チームＯの隊長としてチームＯを引っ張っていきます！」
「頼むよ、榊原隊長っ！」
私は玲華さんの背中を押す。玲華さんは照れて、顔を赤くしていた。
私は階段を上がって教室の方を見る。教室の前ではメンバーがざわつき、教室のドアから中を見ている。
「あ、隊長。お疲れ様です。」
「ありがと。・・・で何してるの？」
「あれ見てくださいよ、侵入者です。あんな人いましたっけ？」
教室のなかを覗く。窓際の席、勅使河原元チームＯ隊長の席に帽子を目深に被った男が座っていた。
「データにはない人です。どこのチームの方ですかね。」
「・・・私が見てくる。」
私は教室に入り、男の前に立つ。
男は椅子を傾け、こちらに気づいていない。
「あなたはいったい誰ですか？教室、間違えてますよ。」
「ん？あぁ、すまない。チームＯ監督のリアに用があってな。」
この声、まさか・・・。
私は気になって男の帽子を取った。

「！」
　四年前、創造主を倒して消えた男、柊　海都の顔だった。
「よっ、ルナ。ただいま」
「海・・・都？本物、なの？」
「柊　海都。元チームＯ所属、戦績は新人戦で１回戦敗退、殿堂杯にて挑戦者側を優勝に導き、チームＡ隊長を倒したことで優秀能力者賞に選ばれ、この学校の脅威にしてこの学校を作った男、創造主の討伐に成功後、行方不明。まさか・・・本物か」
「海都・・・海都ーーー！」
　私は机を倒して海都に抱きついた。
　死んだと思われていた海都が生きていた。私は海都の腕のなかで涙を流した。
「泣くなって。今はルナが隊長なんだろ？部下の前でそんな姿見せんなよ」
「海都なのか？」
　私の姿を見て、クロサクが入ってくる。
「お、その声はクロサク。腕大丈夫か？」
　クロサクは治療した腕とどや顔を見せる。
「リリーに治してもらったんだ。結構かかったけどな」
「まぁかかるよな。俺も両腕治してもらったし」
「お、柊君。久しぶりー。」
　クロサクの次はリア監督が入ってくる。
「監督！お久しぶりです。突然ですが、一つ話が・・・
　俺と戦ってください。そして俺が勝ったら、この学校を卒業したということにしてください。

　急に始まった対戦。
　海都と監督は向かい合い、まずは握手をした。
　張り詰めた空気。二人の能力値が私たちには見えていた。
「二人ともすごいですね。特にあの柊って人、監督と同じくらい、いやそれ以上です」

この四年間。海都に何があったんだろう・・・。
「これより卒業試験（仮）を始めます！お互い、定位置についてください！」
審判の指示に従う二人。
「柊君。あなたが勅使河原のところにいたのは知っているわ、風の噂でね。」
「そうですよ？それがどうかしました？」
勅使河原？・・・どうしてあの人の名前が・・・
その理由はすぐに理解できた。
「やっぱりか・・・」
海都の周りには、勅使河原さんが戦闘のとき見せたような波ができていた。
「波動・・・」
「教わりました。勅使河原さんに波動を教えた人にね」
「その四年か。だけど、それを見せたからと言って卒業できるわけじゃない。この学校の授業、まだ二割も終わってないのに卒業させるわけないじゃない」
「始め！」
審判の声と共に走り始めた海都は、掌底で監督のしていた眼鏡を破壊した。
真っ二つに割れた眼鏡は下でデータになって消える。
「もう発動していたか！」
海都はそれを見て、すぐに後ろへ下がるが、履いていた靴の底はすでにデータ化していた。
「情報網（データ・トラップ）。一次試験はこれを抜けること・・・なんてどうかな？」
「上等」
監督お得意の範囲攻撃。特にあれは一定範囲の地面に触れた物を数字と文字の集合体、データに変えるものだ。
だが、海都にはそれへの対抗札があった。
海都は波で空気の塊を作り、情報網を上から抜け、監督に一撃を食らわした。

「情報の壁（データ・ウォール）。二次試験はこれかな」
今度は、触れたらデータ化させる壁。あの壁は紙のように薄く、半透明に近いが、通ったものを確実に仕留める恐ろしいものだ。
「よっと！空中戦は得意分野だっての！」
海都の作り出す波は、海都を情報の壁から守り、さらに踏み台になる。
（勅使河原の波動は自らの衝撃で生成した波。だけど、柊君の波動は自然に発生した波。特に自分の声や歓声、太陽や電気による光で空気にできた波。なら、これなんてどう？）
「三次試験か？いくつまであるんだ？」
監督が無言で作り出した空間、それは全てを閉鎖する空間。それは音、光、空気、全てを通さない。監督は無言で作り出したのではなく、作り出したことで無言になったのだ。
（苦しそうだが、これも試験だ）
だが、その空間もあっけなく海都によって破壊される。
「な！」
海都は波を生み出すこともできるようになっていた。
「こんなんじゃ、波動は消えない！」
「なら、データの波をあげるわ」
二つの数字が波になって海都に襲いかかる。空間を蝕むそれは海都の両手両足を掴み、海都を監督の目の前から消した。
「まだあなたは能力の裏を知らない。だから飛び級なんてしてはいけない」
「まだだ・・・！」
空気に亀裂が入る。ガラスをぶち破るように海都は現れた。海都はその勢いで拳を撃つ。しかし、攻撃が入ると思っていた私の想像を越え、彼の拳は監督の手のひらに軽々と止められてしまう。
「能力値が尽きたのね・・・、柊君」
監督の前に立つ海都の息は上がり、立っているのがやっとの状態だった。
「本当は不合格にしたいところだけど、私に攻撃を当てた。それに、勅

使河原君から君の努力は聞いてるからね。」
「・・・ということは」
「柊　海都！卒業試験結果、合格！これより、卒業試験を終了します！」
戦場に歓声があがる。海都は拳を天に突き上げると、静かに後ろへ倒れた。
「海都！」
私は観客席から下りて、海都のところへ走る。後ろからクロサクと玲華が来てるのもわかった。

「リア、すぐに校長室まで来い。」
「わかりました。」
私は通信を切り、戦場の方をみる。
戦場では胴上げさせる柊君の姿があった。
「おめでとう、柊君。」
私は戦場から消えた。
そして卒業試験は幕を閉じた。
☆
卒業試験が終わり、あの島から出て元の世界に帰って来てから１０年が経った。
俺はルナと結婚し、多くの鳥居が目立つ稲荷神の祀られる神社の近くに家を建てて暮らしていた。
娘の青空（そら）は５才なり、来月から小学生になる。
青空の、
「ランドセルと神社で写真撮るー」
という頼みで神社まで来ていた。
神社前の稲荷神の像を見て、タマのことを思い出す。
今、何をやっているのだろう・・・。あれ以来、一度も会っていない。日が経つと共に、声も姿も、全て少しずつ薄れていく。
「パパ！キツネー！」
青空は境内の方を指差す。

見たことのある後ろ姿が神社の奥へと消えていく。
「待てー！」
青空は神社の方へ、ランドセルを置いて走っていく。
「青空！待て！」
俺は青空を追い掛け、神社の裏へ回る。
神社の裏には、前から少しだけ見えていた桜の木の太い幹と、その下に一匹の狐がいた。
「野生の狐・・・。まさか、いるわけないよな」
「ここだよ。ここ、君の目の前」
その狐は俺の前で人の姿へと変わる。
「タマ！」
「私は妖狐。久しぶりだな、このやり取り」
その日撮った写真には二人の能力者と一人の子供、そして一匹の狐が写っていた。